

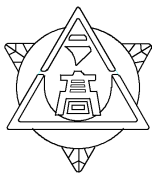
平成 2 5 年 度

研 究 紀 要

創

第 1 6 号

TSUKURU



北海道今金高等養護学校

巻 頭 言

今年の1月20日に日本政府は、障がい者の差別禁止や社会参加を促す国連の「障害者の権利に関する条約」を批准し、2月19日からその効力が発生しています。この条約は、「すべての障がい者によるあらゆる人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し、保護し、及び確保すること並びに障がい者の固有の尊厳の尊重を促進する」ことを目的とし、締約国には、全ての障がい者のあらゆる人権及び基本的自由を完全に実現することを確保、促進することが求められています。そのため、これまでに障害者基本法の一部改正を端緒とし、障害者総合支援法の制定や障害者差別解消法の制定、学校教育法施行令の一部改正など、国内環境が整えられてきました。

さらに、障がい者雇用の状況に目を向けますと、厚生労働省の「平成24年度の障害者への職業紹介状況等」では、ハローワークを通じた障がい者の就職件数は、平成23年度の59,367件から大きく伸び、68,321件（対前年度比15.1%増）と3年連続で過去最高を更新し、就職率も42.2%（同2.2%増）と、3年連続で上昇しています。今後もこのような時流により、障がいのある方達の労働や生活の状況がさらに良い方向へと変化していくでしょう。

さて、本校においては、このような社会情勢を踏まえた教育課程の見直しを進めるため、昨年度から研究主題を『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』とし、3カ年計画で第6次研究に取り組み始めています。初年度は、研究主題を「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究」とし、『今養版キャリアプランニングマトリックス』をまとめました。そして、2年次となる今年度は、研究主題を「今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究」と設定し、生活単元学習と作業学習を中心に新たな教育実践に取り組みました。

校内研究の推進にあたっては、昨年度に引き続き本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸准教授に、本校へ何度も足を運んでいただき、数多くの貴重なご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、道内の研修会にも本校の職員が多数参加させていただき、キャリア教育に関わる教育課程の編成や授業実践など多くの先進的な取り組みから学ばせていただきましたことにも、この場を借りて深く感謝申し上げます。

本研究は、限られた時間の中で研究推進委員会を中心に全校であるいは各学年、各学科等で研修をし、協議をしながらまとめたものです。皆様には今年度の研究のまとめを御高覧いただき、忌憚のない御意見などをいただきながら、次年度以降の研究を進めていきたいと思っております。あわせて今後も、本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

北海道今金高等養護学校長

佐々木 誉 之

目 次

< 巻頭言 >

第 1 章	研究の取り組み	・・・・・・・・	5～12
第 2 章	課題研究	・・・・・・・・	13～44
第 3 章	プロジェクト研究	・・・・・・・・	45～60
第 4 章	寄宿舍の研究	・・・・・・・・	61～88
第 5 章	研究の成果と課題	・・・・・・・・	89～94
資 料	特別支援教育研修会の記録	・・・・・・・・	95～105

< あとがき >

< 共同研究者 >

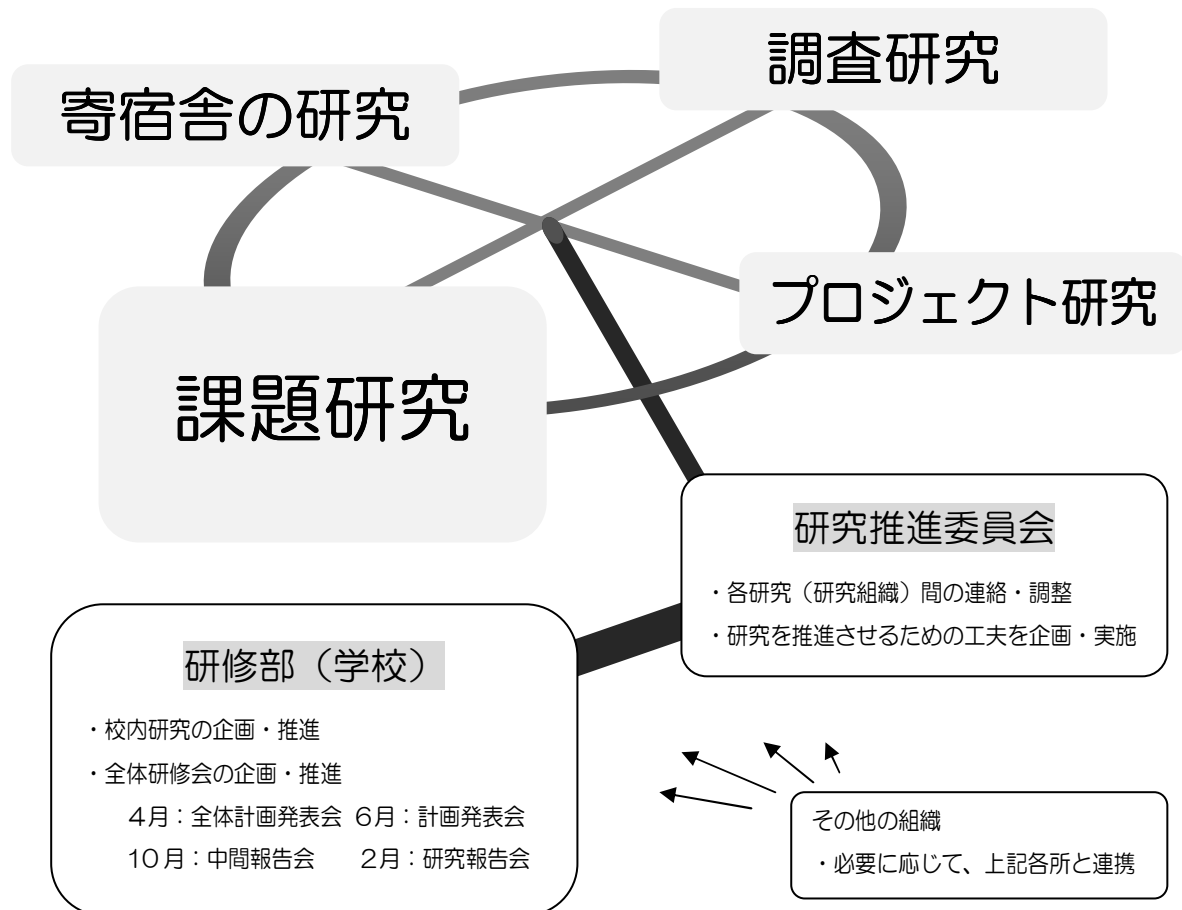
第 1 章

研究の全体像

1 本校の校内研究

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舍の研究」の4研究があり、それぞれが相関している（[図1](#)参照）。

～ [図1](#) 「本校の校内研究」イメージ ～



課題研究

本校の研究の中心的研究と位置づけている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置づけている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どういった組織で取り組むかといったことは、年度当初に公募している。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

寄宿舎の研究

寄宿舎研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記 3 研究の流れに沿う形で取り組むものと位置づけている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

校内研究の企画・推進は、学校の研修部（以下「研修部」と略す）が行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会（以下「研推委」と略す）は、4 つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。

4 つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（表 1 参照）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

～ 表 1 本校の校内研究のあゆみ ～

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第 1 次	【平成 9～10 年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ 社会参加・自立を促す教育課程の編成は いかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 2 次	【平成 11～13 年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる 力を育む授業づくりと教育課程の編成 はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 3 次	【平成 14～16 年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的設定と指導内容の関連、単元・題材指導計画の工夫、個別化と集団化が最適化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 4 次	【平成 17～20 年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向上 を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の充実、個別的教育支援計画等の様式及び作成に関する研究、体力つくりの見直し	・課題研究（形態部会） ・P 研究（CO+進路部代表、体力つくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 5 次	【平成 21～23 年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育成	教科及び領域・教科を合わせた指導の授業研究、体力つくりの見直し、指導内容表の検討、教育支援計画・指導計画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P 研究（体力つくり部会、研推委、指導計画 WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（P はプロジェクトの略 / CO はコーディネーターの略 / WG はワーキンググループの略）

2 第6次研究

(1) 経緯

平成23年度初頭、今年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容で研究を進めることに決まり、研究推進委員会が主体となってスタートさせることになった。

研究推進委員会は、平成24年度以降の校内研究全体の方向性、つまり第6次研究の計画の素案をまとめることを目指した。具体的には、キャリア教育の概要を学び、これまでの教育課程・教育内容の成果と課題を洗い出しながら今後の研究の進め方を検討するべく『本校としてのキャリア教育の進め方の洗い出し』という主題を設定し、研究を進めた。

まず、キャリア教育学習会を計2回実施した。キャリアとは何か、まずはイメージを共通認識することから始め、本校の現状や道内外の取り組み（実践事例）について学習した。全職員に資料を配付し学習することで、キャリア教育の必要性について確認することができた。しかし、意識を浸透させ、共通理解を図るには時間を要する。

次に、学習会を踏まえた上で「キャリア（教育）の視点を生かして、本校でどのような取り組み・研究を進めていくのがよいか」というテーマで、研究推進委員会の各委員はレポートを作成した。「行事や授業をはじめとする教育課程をキャリア教育の視点で見直す必要がある」「キャリア教育について校内の共通理解が必要である」という意見が多く出された。また、見直しや共通理解の具体的な方法、研究組織や期間についての具体的な意見も多く出された。そして次のような「第6次研究の方向性」がまとまった。

「第6次研究の方向性」

<1年目>

- ・キャリア教育の指針を決めていく段階
- ・具体的には、各学科、各学年、研究推進委員会を研究組織として、3年間の系統的な教育目標・方針（≡基礎・柱・道筋）の明確化に取り組む

<2年目>

- ・教育実践を見直していく段階
- ・教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）などを見直し、修正し、まとめていく

<3年目>

- ・1年目の土台、それをもとに2年目で改められた教育計画のもと、実践とその検証・評価を重点的に行う段階
- ・3年間の取り組みによる成果と課題をまとめ、次期研究へと引き継ぐ

これまでは、研修部が考えた研究主題を各研究組織（学年部会や形態部会）がある意味“自由”に解釈して課題を見つけ、研究授業をするという、いわば“形式的”な研究だった。一方、第6次研究は現場の声から始まり、テーマがキャリア教育であるだけに学校教育全体という視点を持ち、研究を進めながら研究の方法を見いだしていかなければならないという、いわば“創造的”な研究である。今後もボトムアップ方式で研究を推進し、チームワークを発揮して課題を解決していきたい。そして、生徒の成長と将来に結びつく成果を残したい。

(2) 研究主題

社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究

～ 「今金版キャリア教育」の創造を目指して ～

(3) 主題設定の理由

本校は開校以来15年間、卒業後の就労、広義には社会参加・自立を目指した職業教育に取り組み、284名の卒業生を輩出した。生徒実態や社会情勢の変化に対応しつつ、生活単元学習と作業学習を中心とした教育課程のもとで指導を行い、生活する力と働く力の両方を身につけられるよう工夫を続けている。

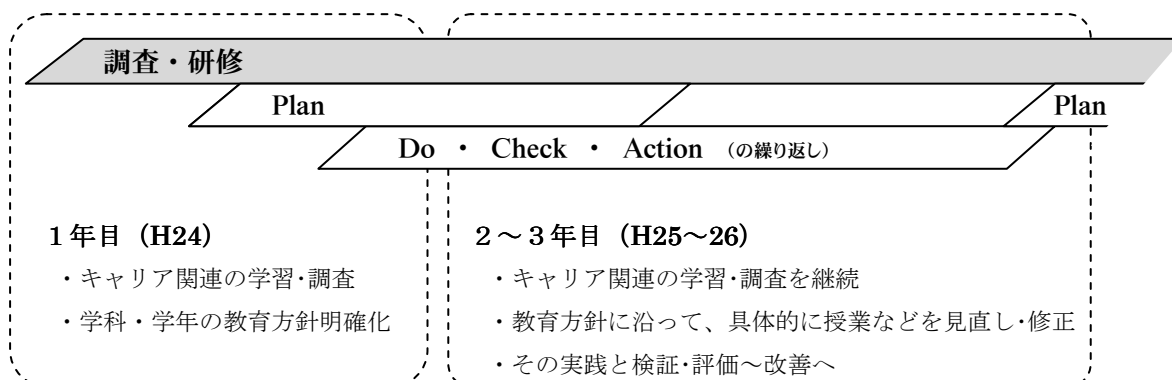
しかし、近年の生徒実態や社会情勢の変化は、これまでとは変化の質も幅も大きく異なってきている。例えば、障害の多様化（特に発達障害を持つ生徒の増加）、それに伴う個に応じた指導・支援のあり方の多様化、経済の不安定さがもたらす就労への影響、障害者自立支援法の動向をはじめとする障害者福祉の課題点などが挙げられる。これらは、生徒が卒業後、社会の中で主体的に生きていこうとする上での“内外部的な困難さ”として立ちはだかっている。全国に存在するこの困難は、道南地域、本校周辺の地域も例外ではない。さらには、地理的条件など地域ならではの困難さも存在する。だが、これを乗り越える道を切り拓き、その道を歩んでいく力を身につけさせることこそ、我々教職員の使命である。

こうした状況を踏まえ、本研究では、本校の学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、その道筋とも言える教育課程、授業・指導の一つ一つをキャリア（教育・発達）の観点から再点検する。教職員のチームワークをもって今一度本校の教育のあり方を見直し、生徒や社会の変化に柔軟に対応できる生徒を育てていくことを目指し、本主題を設定した。

(4) 研究期間

原則として、平成24年度から平成26年度までの3年間とするが、「課題研究」として位置づける図2の「調査・研修」から「Action」までが一定程度終わるまでとする。何を達成すれば一定程度とするかについては、研究推進委員会を中心に全校的な協議を進めて決定したい。つまり、研究の進み具合から、3年未満もしくは3年以上になることもあるということになる。

～ 図2 「課題研究」イメージ ～



(5) 研究内容

① 課題研究

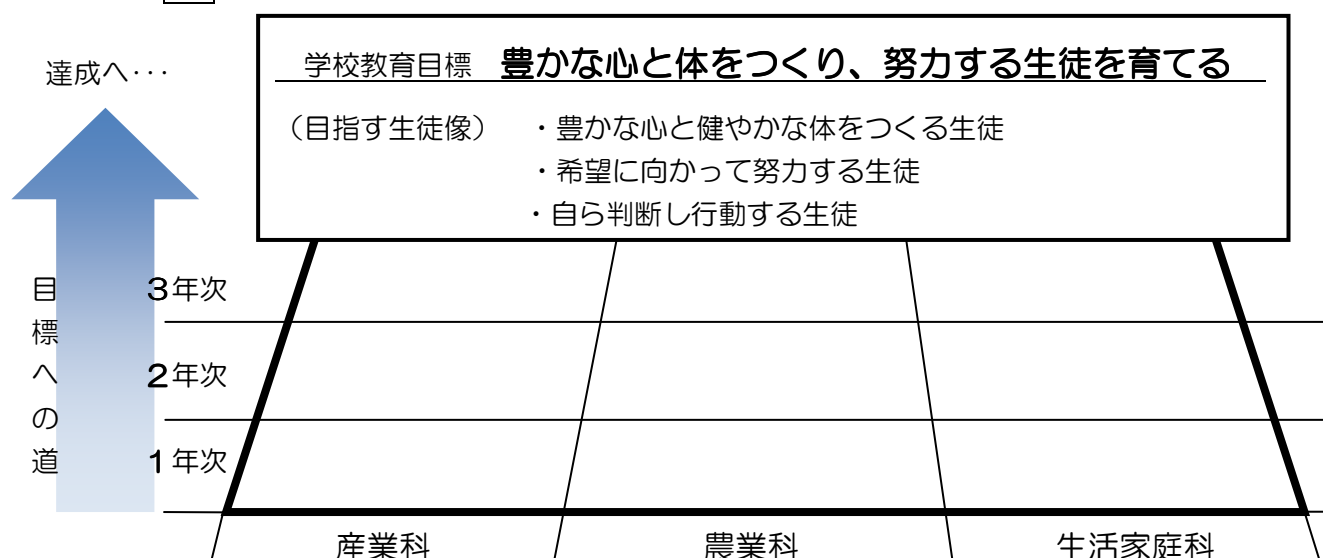
<調査・研修> 第6次研究期間を通して取り組む

- ・研究推進委員会が主体となって進める。この委員会は、研究主題に基づく実践的な研究推進にかかわる業務の企画、研究・研修内容等の推進等を行う特別委員会である。教頭、研修部長、研修部員、各研究グループの代表、その他必要な職員で構成する。
- ・キャリア教育の学習会を行う（全体研修会の中で）。また、キャリア教育の学習に役立つ資料を、各研究組織に提供する。これらにより、キャリア教育の概念について職員間の共通理解を図る。
- ・担任をはじめ、全職員が在校生の実態把握に努める。また進路指導部や旧担任を中心に、卒業生の現状と課題を調べる。調査した内容をまとめ、各研究組織に伝える。これらにより、キャリア教育の必要性について職員間の共通認識を図る。
- ・各研究組織と協議しながら、具体的な研究の進め方を検討する。つまり、いわば舵取りをすることにより、各研究組織が同じ方向・方法で研究を進められるようにする。

<Plan> 1年目後期から取り組む

- ・各学科・各学年が主体となって進める。研究推進委員会を連絡・調整の場とする。
- ・各学科・各学年の教育方針（指導段階）について協議する。キャリア教育について学習したことも踏まえて、3年間の系統的な教育目標・方針（≒基礎・柱・道筋…仮に「目標への道」と呼ぶ）をはっきりさせる（[図3](#)参照）。
- ・これにより、学校教育計画の学科経営案や学年経営案の様式・内容についても検討が必要となることが予想される。その際は教務部も含めて検討を進める。
- ・最終的には教育課程検討委員会、職員会議にかける。

～ [図3](#) 「目標への道」のイメージ ～



<Do・Check・Action (の繰り返し)> 2年目から取り組む

- ・「目標への道」に沿って、本校の教育全般を見直す。教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）など、実践～評価（検証）～改善を繰り返しなが見直しを進めていく。

- ・Plan 段階を経て検討するが、研究組織は Plan 段階とは異なる。分掌や部会が担当する方法、その枠を超えた研究グループを組織する方法などを検討する。
- ・教育相談や進路支援、就学支援など、保護者や外部とのつながりがある部署は、教育の柱の周知をする。あわせて、相談・支援の在り方についても検討する。

② プロジェクト研究と調査研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関する組織で進めるものと位置づける。何か取り組むかどうか、年度当初に公募する。

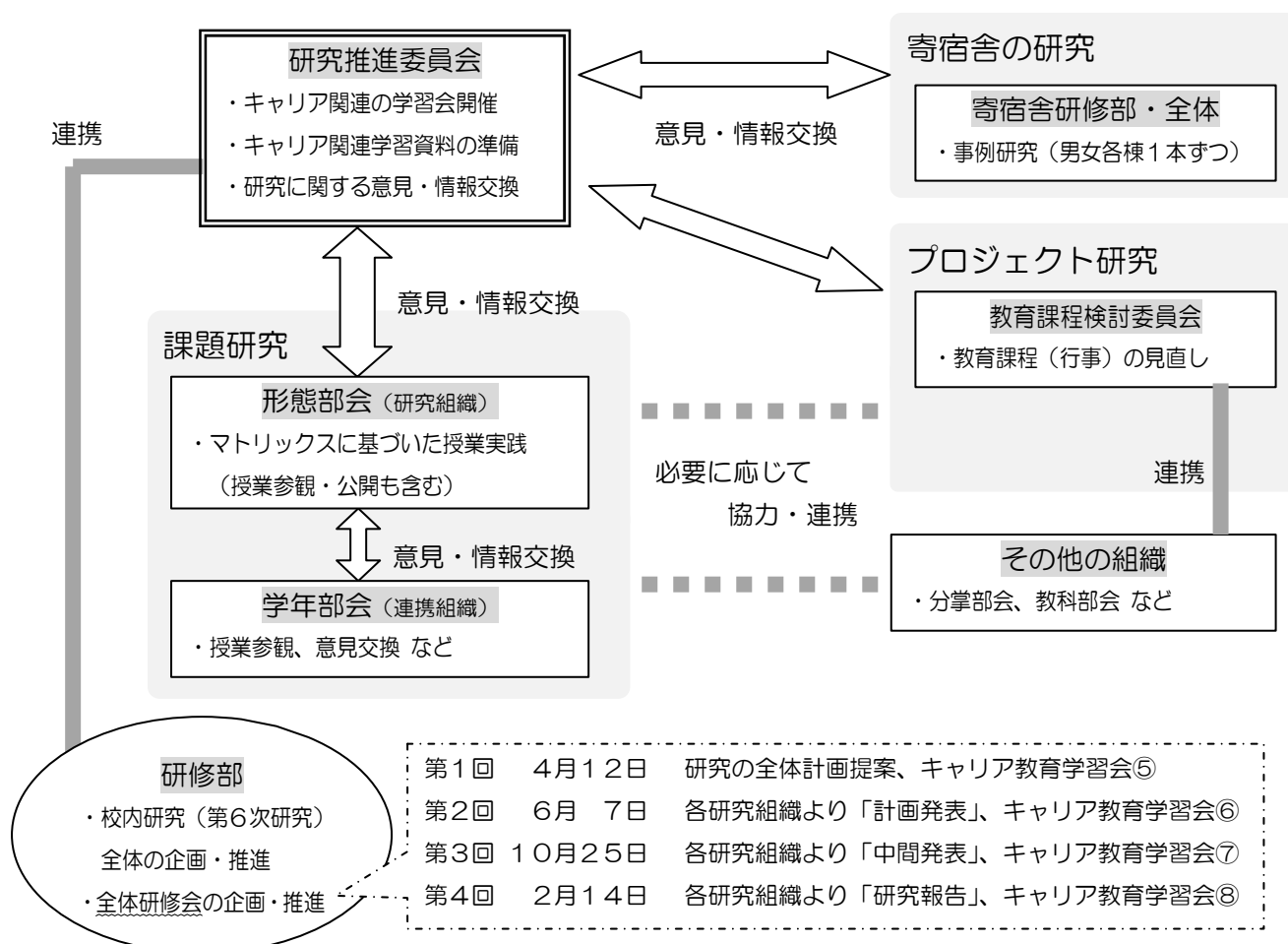
③ 寄宿舍の研究

寄宿舍研修部を中心に、第6次研究の流れに沿う形で、学校教育目標の達成に向けた研究を進める。なお、寮務主任を研究推進委員会の委員に加えるほか、全体研修会に寄宿舍職員が可能な限り出席することで、学舎の情報交換や連携を図る。

(6) 平成25年度の研究

以上を踏まえ、課題研究は調査・研修と並行して Do・Check・Action の段階に取り組む。今年度は校内アンケートの結果を受け、課題研究は形態部会（生活単元学習部会、作業学習部会）と学年部会で取り組むことにした。プロジェクト研究は、教育課程検討委員会による教育課程（行事）の見直しに取り組み、調査研究は予定しない。寄宿舍の研究は男女各棟1本ずつの事例研究に取り組む。研究組織とその相関については図4の通りとする。

～ 図4 平成25年度研究組織及び相関図 ～



3 キャリア教育の学習

(1) 学習会の企画と実施

これは、キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解を目的として、研究推進委員会が企画し、計4回実施したものである。講義形式、グループ協議形式など、学習内容に応じてスタイルを変えて学習会を実施した。また、昨年度作成し活用した「キャリアに関する学習資料」を、今年着任した職員に配布した。さらに、こうした学習の様子や補足的な内容は、研修部が適宜発行している「研修部だより」に掲載し、全職員に配布した。

そもそもこの学習会は、先述のとおり「課題研究」の一環として行われているものではあるが、「プロジェクト研究」や「寄宿舎の研究」を進める上でも役立つものとなっている。

(2) 第1回学習会

4月の全体研修会とあわせて実施した。グループに分かれて「力が身につく〇〇の授業・指導を語ろう」というテーマで自由に協議する時間（グループディスカッション）とした。このとき、各グループとも最低3つの提案をすること、全員必ず発言すること、相手を批判しないこと、マトリックスや指導内容表、年間指導計画などを見ながら考えることを条件とし、約30分間の協議を設定した。協議の内容は模造紙にまとめてもらうこととした。



グループ分けについては、くじを引いて集まった職員同士が生活単元学習、作業学習、体力づくり、教科（国語・数学）のうち指定された1つについて語るという方法をとった。たとえ普段担当していない授業に当たっても、客観的立場から意見を出すことが研修になると考え、あえてこのような方法をとった。

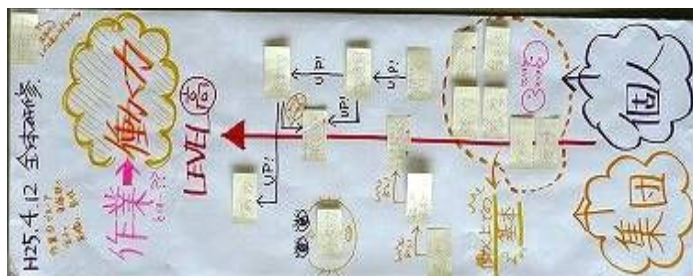


右の写真は、グループ協議と発表の場面である。協議においては、普段授業を担当している職員からは普段授業をしながら考えていること、普段授業を担当していない職員からは客観的にその授業の在り方について考えていること、異動してきて間もない職員からは前任校での経験など、幅広く意見が出され、授業に対する考え方の共通理解を深める機会となった。発表された提案（模造紙）は各授業担当で授業づくりの参考として役立ててもらうこととし、しばらくの間校内に掲示した。



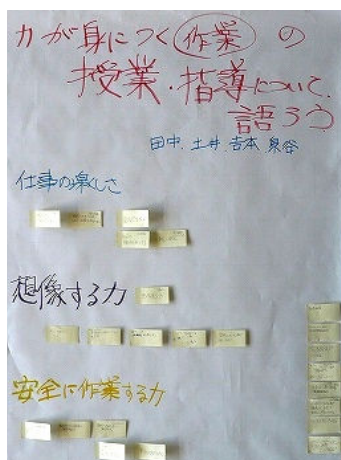
以下は、各グループで書き込んだ模造紙と提案内容である。

① 作業学習 A グループ



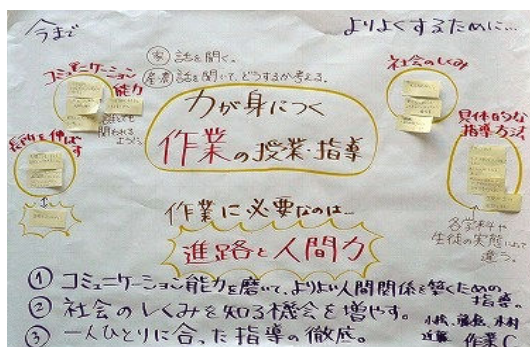
- ・集団と個人の観点と、3学年、3学科の共通認識が必要である。
- ・基本（あいさつ、返事、体力、自主性など）対応できる力（思いやり、コミュニケーション能力の向上、指示を理解し行動に移す、相談や報告など）、集団で培う力（協力）を身に付けさせる指導が大事である。

② 作業学習 B グループ



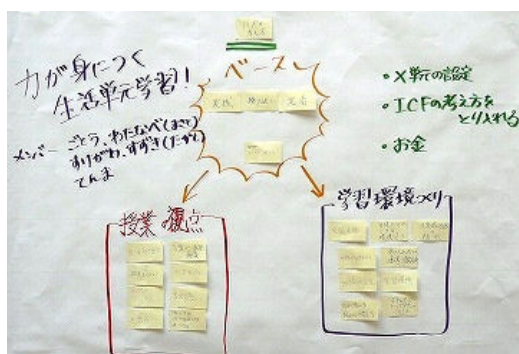
- ・楽しさ、想像する力、安全に作業する力の観点から指導していくことが大切である。
- ・楽しさについては、失敗を認めることから始まり、繰り返し作業を行う中でスキルアップを図り、達成感を味わわせる指導が大切である。
- ・想像する力については、力加減など、感覚的な部分を身に付けさせる指導が大切である。
- ・安全に作業する力については、危険察知能力や正しい道具の使い方を身に付けさせる指導が大切である。

③ 作業学習 C グループ



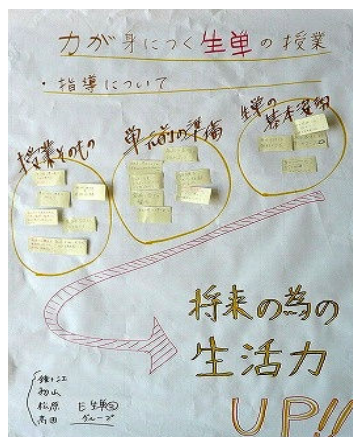
- ・長所を伸ばすこと、課題に気付かせること、実態に応じてステップアップしていくことが大切である。
- ・社会の仕組みを知ること、コミュニケーション能力の向上、一人一人に合った指導の工夫などが大切であり、教材教具の工夫なども必要になってくる。

④ 生活単元学習 A グループ



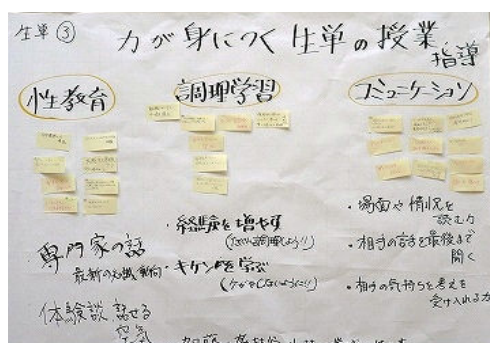
- ・ベースとなる指導（繰り返し、定着、実践、じっくりゆっくりなど）、授業の視点（段階的、ディスカッション、リアルな情報など）、学習環境作り（外部からの指導者、生徒自らが考える場面、生徒主体など）の相互の関連性が大切である。
- ・上記を加味し、X単元の設定（時期や生徒の興味関心に合わせた、柔軟的な単元の設定）、ICFの考え方を取り入れての共通認識、お金の出所の整備の3点を提案する。

⑤ 生活単元学習 B グループ



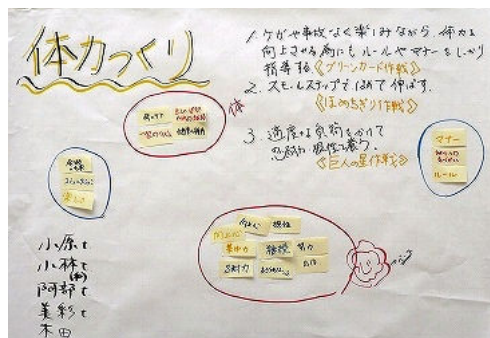
- ・授業そのもの（体験的な学習、生徒の興味関心を引き出す指導など）、単元前の準備（事前と事後の組み立て、行事などに関連性を持たせた単元の設定など）、生活単元学習の基本姿勢（生活単元学習以外の教科や学科とのつながりなど）、これらを整理することで、将来のための生活力をアップさせることにつながると思う。

⑥ 生活単元学習 C グループ



- ・単元・題材ごとに指導を考える。性教育は、専門家の話・体験談など、調理学習は、経験を増やす・危険を学ぶなど、コミュニケーションは、場面や状況を読む力・相手の話を最後まで聞く力・相手の気持ちや考えを受け入れる力、これらが大切であると思う。

⑦ 体力づくりグループ



- ・けがや事故なく楽しみながら体力を向上させるためにも、ルールやマナーをしっかり指導する（グリーンカード作戦）
- ・スモールステップでほめて伸ばす（ほめちぎり作戦）
- ・適度な負荷をかけて忍耐力、根性を養う（巨人の星作戦）

これらが指導に必要と考える。

⑧ 教科グループ



- ・求められる力（理解力、応用力、集中力など）を身につけるために、まずは、向上心を持てる目標立てを行う。指導の方法・集団については、指導段階など道すじを立て、内容の精選や反復が大切である。実践として、体験的な活動、試験、資格の取得などが考えられる。これらが整理されることで、将来楽しく豊かな生活を送ることができると考える。

(3) 第2回学習会

6月の全体研修会とあわせて実施した。内容は、本校学校評議員でもあり研究アドバイザーである北海道教育大学函館校の北村博幸准教授の講義・演習を行い、本校研究への助言をいただいた。

前半は、キャリア教育についての基礎知識等を講義していただき、関係する用語や考え方の共通理解を図ることができた。主に話していただいた内容は以下の通りである。



- ① 大学のなかで仕組みをつくり示されたのがキャリアのスタートであり、一般の教育を念頭においている。若者の離職や、卒業後長続きしない等の時代背景から、総則から改善の試みを命じたのがきっかけである。



- ② キャリアとは、単なる進路や職業という意味ではなく、もっと大枠で、全体で行っていくものである。キャリアについての定義は、他校にならって行うのではなく、今金は今金で「評価」について、研修部でまとめながら実践していけばよいのではないかな。
- ③ 知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の定義（東京都教育委員会、2009年）にて述べられていることは、進路指導の定義とほぼ同じである。特別支援学校は昔から実践していて、キャリア教育の「職業」「進路」「生活」を一緒にやっていくということが示されている。
- ④ 今金高等養護学校のキャリア教育のポイントは、マトリックスの完成をゴールとするのではなく、実践を通してよりよい授業を作っていくことである。そして、次のサイクルが重要となる。

<See (アセスメント)>

- ・“実態把握”だけではなく“手立て(短所・長所)”を大事にすること、その上で「何がうまくできて、何がうまくできないのか」「どんな手立てがいいのか」を明確にすること。

<Plan (計画)>

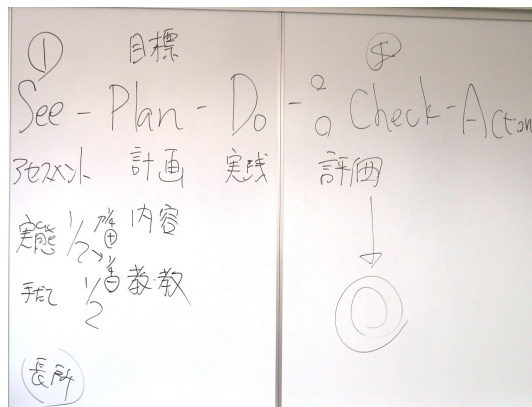
- ・大まかに決まっていた計画に、アセスメントから見てきた要素にあった、内容や教材を加える。

<Do (実践)>

- ・内容や教材を工夫した、実践を行う。しかし、実践のなかで見てきた生徒の実態に合わせて内容・教材を改善していく。

<Check/Improvement (評価)>

- ・See-Plan-Do-Seeの経過を評価するが、評価で明らかになったことは次のアセスメント(手立て)の検証材料にする。



こうした講義を受けて、生単・作業の中から実践で活用できそうなものや、思いつくアイデアについてグループディスカッションを行った。6つのグループに分かれて行った。各グループで出された話は以下の通りである。

① グループ1（作業）

作業学習の中で、縫工（家庭科）がある。雑巾を縫う計画をし、実践のなかで長所を拾い「不器用だけど縫うごとに上手になっていく」など、前向きでモチベーションの向上につながる評価を加えてあげると「次は巾着に挑戦する」など次の意欲にもつなげやすいと思う。

② グループ2（作業）

評価の話、生徒がやったことを個別の指導計画にリンクできる書式があるといい。例えば、作業日誌の項目に個別の指導計画の目標を入れ「生徒が記入した評価をそのまま評価して」活用していくということができるかもしれない。

③ グループ3（生単）

寄宿舎で個別に行っている実態評価を元に、教務（学校）と連携し、生徒の細やかな部分を見逃さないようにする。入学当時と比較して障害が軽くなってきている生徒や、実態が変わる生徒のインプルーブメント（見直し）を図る。

④ グループ4（生単）

今生単で「心と体の学習」単元を実践していくが、指導が系統立っていないことがある。評価は一番手を抜きがちな部分であるが、実践の前後に学級で評価の話し合いを持てればよいのではないか。

⑤ グループ5（生単）

評価は必ずしもテストなどを通して見られるものはないと考える。マトリックスと連動して目標を立てたい。「できた」「できなかった」は関係なしに、実践したことを生徒に聞いて書いてもらい、「学んだことをどこの場面で活かしたいか」を教師側が引き出すといった取り組みも必要ではないか。

⑥ グループ6（作業）

長所に注目して指導をしていくが、マトリックスとも連動して目標設定をする。難しいことではあるが、評価しやすい工夫をする。また、日々の生徒の言葉の記録、「聞きにくる」「挨拶する」という基本的なことの評価が大事になってくるのではないかと考える。

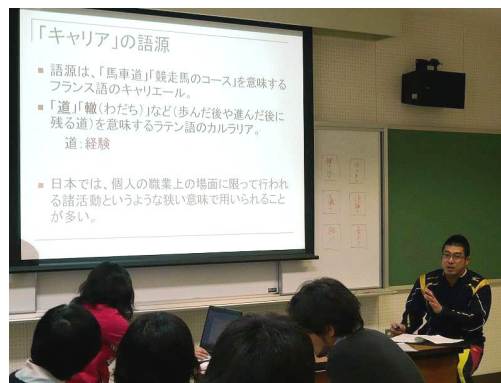
講義と演習を通して、キャリア教育とは特別なことをすることではないということを共通理解することができた。また、指導者は「なぜこれを指導するのか」を考えること、生徒にも「なぜこれを学ぶのか」を問いかけて自分が取り組む学習の意味を理解させていくことがポイントであり、授業の充実につなげられるということに気づくことができた。



(4) 第3回学習会

12月の2学期終業式後に実施した。北海道特別支援教育センターの「キャリア教育研修講座」を受講した本校職員による研修報告という、講義形式の学習会を行った。

報告によると、研修講座ではキャリアの語源の話から定義についての話、指導者が意識すべきことなど幅広い講義と演習があったとのことだった。主な内容は、以下の通りである。



- ・キャリアの語源は道、轍と言う意味。道とは経験にあたる。キャリアの4つの基本要素は、①人との環境との相互作用の結果、②時間的流れ、③空間的広がり、④個性である。
- ・キャリア教育とは、内面の変化を促していく教育である。子どもは、やってみなければわからないことがたくさんあるので、学校で経験させる状況を作ることが大切になる。余暇の充実もキャリア教育になる。すなわちキャリア教育とは、一人一人の内面の変化を促す仕組みそのものである。よって、間違った経験をさせるとマイナス要因となるので注意が必要である。共通理解を図り、指導者全員が同じ方向を向いて指導することが大切である。
- ・キャリア発達とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程である。教え込みではなく、知識技能などを活用し、適応できる能力を育成することが大切である。他者からの価値付けをされることで、自分が意味づけできる。そのことにより、活動や行動に重み付けを図ることができる。
- ・キャリアとは、過去、現在、未来と連続し発達していく。キャリア教育は、組織的に行うものである。また、家庭生活や地域生活など社会全体の支援の機能でもある。
- ・教師が意識すべきことは、ただ漠然として行う授業ではなく、しっかり考えて授業を組み立てること、根拠を明確にして授業をすることである。また、「働くこと」「働くことと生きること」を相互に関連づけることも大切である。
- ・生徒の声として、考えている時に指導者に声をかけられたくない、というのがある。考えている生徒に対しては、待つことも大切である。「生徒の話を丁寧に聞く→“話したい”“伝えたい”という思いを行動に出させる→伝える喜びを感じさせる→伝えることの大切さを実感させる」というようにするため、まずは丁寧に聞いてあげる姿勢が大事になる。
- ・生徒の「やってみたい」という気持ちを大切にすべきである。「やりたい→できてうれしい→認められてうれしい→人の役に立ってうれしい」というようにつなげる支援の工夫が必要である。このようにして、生徒の夢や希望を大切にしていきたいものである。

研修報告を受けて、短時間ではあるが意見交換も行った。全体を通して、キャリア教育の基本的な部分があらためて確認でき、それぞれがこれからの指導を考えることができた。

(5) 第4回学習会

2月の全体研修会とあわせて実施した。今回も講義形式とし、研究推進委員でもある進路指導部長による「本校生徒をとりまく就労環境について」と題した講義を行った。本校の進路指導の流れ、卒業生の現状、企業が求める人材、法律改正の影響など、生徒の将来に向けた指導・支援のために必要不可欠な内容を凝縮した講義となった。こうした環境下で、子どもたちにどのような力をどのように身につけさせるべきなのか、それを考え実践していくことこそがキャリア教育であり、現在行っている研究であるということを再確認できた。



さらに、北海道特別支援学校長会研究第3部会に所属されている本校校長による「キャリア教育の在り方についての調査からの考察」をまとめた資料を用いた講義も行った。この資料は全道特別支援学校アンケートの回答をまとめたレポートである。これによると、キャリア教育に係る教職員の専門性の向上、共通理解の推進、一貫性や系統性のある指導といったことがどの学校にも求められていることがわかる。では、その一貫性や系統性とは具体的にどういうことなのか、本校は作成したマトリックスを使って一貫性のある指導を行えているのだろうかということを再確認し、次年度の研究の在り方についても考えることができた。

(6) その他の学習会

研究推進委員会が企画したキャリア教育学習会と似たような取り組みではあるが、研修部の企画している全体研修会のうち第3回の「研究中間報告会」においてグループディスカッションする時間を設けた。中間報告を受けて、感想や意見などを出し合ってもらおうという座談のような形で行った。マトリックスと関連させることの大切さと同時に難しさがあるという話や、単元指導計画の在り方、今後の研究の進め方など、幅広い内容が話題に上っていた。このような機会を設けることで、明確な答えは出ないにしても、研究に対する意識や意欲を持ってもらうことができたため、一定の成果があったと考える。

また、寄宿舎職員研修の一環として「寄宿舎キャリア教育学習会」を行った。これは、年に4回の全体研修会を行っているものの、勤務の関係でこれに参加できる寄宿舎指導員が少ないため、特別に夏季休業中に時間を設けて実施したものである。内容は、(1)で述べた「キャリアに関する学習資料」を用いて、キャリアに関する基本的な用語の押さえを確認したほか、「周囲と話し合いながらでもよいので、先生方ご自身の『キャリア』を自由に書いて(描いて)みてください」という演習を行った。キャリアという言葉を、“積み重なっていく”“連なる”“ずっと続く”といったイメージで捉えてもらうことを狙いとした演習である。この演習を通して、経歴が積み重なって今の生き方があり、それがわかったとき自己有用感、自信、意欲、向上心、目標・夢を抱くことができる、ということを体験的に学ぶことができた。生徒には“何のためにするのか”“それが何のためになるのか”を伝え、理解・実感させながら「キャリア」を実感させることが大切であるということを共通理解することができた。

(7) 学習会の成果と課題

全体研修会と合わせたり、長期休業中の時間を利用して学習会を実施することで、時間的な負担を抑えながら効率的に学習を進めることができた。昨年度は学習内容を考えるにしても何を学習すべきかわからず、戸惑いながら実施していた側面があったが、今年度は2年目ということもあり、研究の進み具合や職員からの声を受けて、タイムリーな内容を計画し実施することができた。また、講義形式と協議形式を組み合わせることで、学習会後は研修部だよりで復習できるような記事を掲載し発行するといった流れを作ることで、定期的にキャリア教育や研究のことを意識して指導に当たることができたと考える。

このように、学習会の実施は、研究への意識喚起、キャリア教育の必要性や考え方の共通理解を進めるために大変効果があった。しかし、学習会の内容を振り返ると、昨年度と今年度でおおむねキャリア教育に関わって学習すべき内容は網羅したとも考えられる。そのため、次年度はこの学習会がマンネリ化しないよう、新たな工夫が必要になると思われる。このような成果と課題を踏まえ、次年度以降も学習会を実施していきたいと考えている。

第 2 章

課題研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究

～生活単元学習と作業学習を中心に～

(2) 設定理由

昨年度の課題研究では、学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、教育課程や指導のあり方をキャリア（教育・発達）の視点から見直し、「今養版キャリアプランニングマトリックス・試案（以下『マトリックス』と略す）」をまとめることができた。

昨年度からの引き継ぎにより、キャリア教育について教職員一人一人がその内容と必要性を共通理解することについては継続して学んでいくことが大切であると確認している。その上で、研修部と研究推進委員会で今年度の取り組みを検討したところ、授業を担当する指導者チームを中心として、キャリア教育の観点から授業づくりを行っていくことが望ましいという結論に至った。これまでの授業・指導をマトリックスに照らし合わせ、授業に関係する部会からの助言等を受け、学校教育目標を達成するための具体的な授業実践を行うことに重点を置き、キャリア教育実践の第一歩を踏み出すべく、本主題を設定した。

(3) 研究の内容と方法

- 研究組織は生単・作業部会とし、部会の教職員全員でマトリックスに基づいたキャリア教育実践研究を進める。具体的には、評価のあり方を見直していく（統一した様式の評価表の作成を目指す）ことを通して授業実践を見直していき、授業のねらいを明確にし、授業実践し…というサイクルで展開する。いずれの場面でもマトリックスを見ながら取り組む。授業参観をし合ったり、研究に関する話をする機会を設けたりするなど工夫しながら取り組む。
- 7月2日の形態部会から計画を立て、適宜実践をスタートする。また、研究に関する代表者は研究推進委員会に属し、関係各所との連携を図る。学年部会においても研究に関して情報・意見交換をする時間を設ける。
- 公開研究会でどこが研究授業をするかは、研究の進め方を考える・進める過程で決定する。

(4) 推進日程

- 7月 各形態部会でテーマとする内容、研究計画作成
- 2学期 授業実践研究開始
- 10月 全体研修会（研究中間発表）
- 12月 公開研究会
- 2月 全体研修会（研究報告、次年度の研究の方向性を検討）

2 生活単元学習部会の研究

(1) 研究の目的

今年度の第2回全体研修会にて、今年度の課題研究の進め方は「評価のあり方を見直していく」と決定したことを受け、生活単元学習部会（以下「生単部会」と略す）でもどのような方向で研究を進めていくのか検討した。その結果、評価のあり方を見直すには、計画段階を見直す必要があることを確認した。また、見直しをすることで実際に今後の授業に生かすことができることを研究で行うこととした。

(2) 研究の内容と方法

生活単元学習（以下「生単」と略す）は固定された単元指導計画がなく、年間計画に沿って各単元の担当者が授業の内容を計画している。そのメリットは生徒の実態に合わせて柔軟に対応することができることだが、デメリットは指導者が一から計画を立てなければならない負担があること、年度ごとに指導者が変わるため、その都度指導者が計画を立てることで一貫性に貧しく、1年から3年まで系統立てて授業ができないということが挙げられる。

また、年度当初、生徒の中で性的な問題が多く起きたことを受け、生単部会では「心とからだの学習」単元の中で正しい性情報を伝えたり、命の大切さなどを学習する必要があるということを確認していた。こうした背景から、「心とからだ」に焦点を絞り、今後の授業を計画的・系統的に進められるものの作成を研究として取り組むこととした。

(3) 推進計画

- 7月 形態部会（研究の方向性について話し合い）
- 8月 臨時形態部会（研究の内容についての検討）
- 10月 形態部会（中間確認）・中間発表
- 12月 形態部会（まとめ）

(4) 研究の実際

「心とからだ」の単元に焦点を絞って研究を進めるということで、まずは各指導者が各学年の授業を参観し合ったり、単元計画を確認し合うところから始めた。生単部会はもともと会議の数が少ないということもあり、年間計画を確認した後は授業の内容を全体で確認し合う機会がなかった。7月に全学年で「心とからだ」の授業を行っていたので、全学年分の単元指導計画を印刷し、配布した。それまでは、所属している学年の学習内容しか把握していなかったが、各学年でどのような単元を扱っているのか確認することができた。また、授業を見合うことで各学年段階においてどのような単元を扱う必要があるのか考えるきっかけとなった。

その後、具体的にどのように研究を進めていくか検討した。今養版キャリアプランニングマトリックス（以下「マトリックス」と略す）を生かすという基本方針が研究推進委員会では出されていたため、平成20年度3学年の研究で作成された心とからだの「学習指導段階表」（資

料1)とマトリックスを照らし合わせることにした。指導段階ごとにマトリックスの要素を盛り込んだり、内容・文言も現在の生徒の実態や本校の「指導内容表」の生活単元学習の心とからだの部分などと照らし合わせながら検討しようということになった。しかし、マトリックスの要素を盛り込もうとすると、指導観点と観点の中身、観点の柱が学習指導段階表の題材の内容と一致せず、文言を当てはめてマトリックスを生かす方法は難しいということがわかった。(表1参照)

表1 学習指導段階表一部分抜粋

段階 学習分野	1	2	3	4	5
B 健康・安全な 生活	・清潔	・健康管理	・たばこ、アルコールの害 ・病気の予防と治療 ・自分の身を守ろう(実技)	・性被害(問題解決の方法) ・ストレスと解消法	・エイズ、性感染症の予防 ・出産 ・避妊 ・人工妊娠中絶
マトリックス の指導観点		心と体	心と体	心と体	心と体

指導観点でいうと「心と体」と捉えられるが、観点の中身に「清潔」に近いものがない。「知識・技術」の観点の中身には、「身だしなみ」という項目があるが、指導の柱を見ると「社会の仕組みなどの知識・技術」とあり、単元である心とからだよりは生活する力に近い内容になっている。そのため選択が難しい。

こうした現状から、生単部会でどのようにマトリックスを生かしたら良いのか数回話し合いを重ねたところ、マトリックスは指導者側の押さえであるということを通認識できた。また、授業の計画段階でマトリックスの中から狙う観点を決め、単元指導計画に盛り込んではどうかという案も出された。さらに、単元指導計画は生単部会で統一された様式がないため、単元指導計画の様式・単元反省の項目の見直しを行ってはどうかということにもなった。加えて、今年度行った授業で使用したプリントやデータも、今後参考にできるよう整理を行うことにした。

結局、「心とからだ」の単元に焦点を絞った研究の進め方は、今後授業を計画しやすくするために「心」と「からだ」の題材一覧を作成するということになった。ただし、マトリックスの指導観点や指導の柱を盛り込もうとすると、表1のように不具合が出てくるため、あくまでもマトリックスの達成を目指すという観点で話し合い、題材一覧の中にはマトリックスの文言を盛り込まないこととした。

以上を分担して進めるために、生単部会の中で4つのグループを作成し、そのメンバーで話し合いを進め、10月の生単部会で進捗状況を確認することとした。

【4つのグループ】

- ① データ整理・資料のファイリング
- ② 単元指導計画・単元反省見直し(単元指導計画の様式・単元反省の項目の見直し)
- ③ 心の題材一覧作成(心の学習で取り扱う題材の一覧を作成する。)
- ④ からだの題材一覧作成(からだの学習で取り扱う題材の一覧を作成する。)

① データ整理・資料のファイリング

校内 LAN (今養ローカル) 内の学年ごとのフォルダを日付や項目ごとに整理した。また、授業の準備の際に使用できるよう、各学年の「心とからだ」の授業で使用した資料をまとめたファイルを作成することとした。

② 単元指導計画・単元反省の見直し (元指導計画の様式・単元反省の項目の見直し)

系統立てて授業を行うことができることを考え、固定化された単元指導計画を作成してはどうかという提案が出された。(表 2)

本校では 3 年間同じ指導者が生単に入るという可能性が低いため、誰が担当しても生徒に系統立てて指導ができるよう、固定化された単元指導計画があった方が良いのではという意見だった。しかし、固定化してしまった場合、生徒の実態に合わせて柔軟に授業内容を計画できる良さもなくなってしまうことが懸念されることや、年間計画の見直しも必要になってくると考えられる。また、マトリックスの指導観点を単元指導計画に盛り込むことに関しては、マトリックスの中のどの表現にも当てはまらないことをねらいとしたい場合が考えられることや、毎回の授業でねらいが変わること、学年段階が決まっているが、必ずしもその学年段階を生徒が達成しているとは限らず、3 学年が 2 学年段階をねらいたい場合などがあるということも考えられる。

そのため、固定化された単元指導計画を作成せず、学年ごとに題材をまとめた指導段階表を作成することになった。その指導段階表を元に、生徒の実態などを見て担当者が授業内容を組み立てることができるようなものを目指すこととした。

表 2 提案された固定化した単元指導計画の様式

単元名	心とからだの学習③			対象	2 学年
マトリックス (抜粋して記入) ※指導者の目標	指導観点	指導の柱	段階	指導方針	
	心とからだ	心身の健康	2 学年	自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	
	コミュニケーション	相手を受け入れ、自らそこに参加する	2 学年	相手の立場や考え方を理解して受け入れ、かかわることができる力を育てる。	
目標 ※生徒の目標	1 性に対する正しい知識の習得を通し、望ましい心身の成長を図る。 2 自分や周りの人を大切にする気持ちを持つことができる。 3 これからの生活に生かすための具体的な方法を考えることができる。				
学習内容		指導内容表（抜粋）			
オリエンテーション		(1) 対人 16	・心とからだの学習では何を行うのか？ ・男性と女性では、意識や考え方に違いがあることについて、理解を深めることができる。		
二次性徴について考える		(1) 二次性 3 (1) 男女交 18	・第二次性徴における体や心の変化がどんなものか理解することができる。 ・異性に対する接し方のルールやマナーを理解することができる。		
命について		(1) 命 1 (1) 命 4	・受精・妊娠から出産までの流れについて、理解を深めることができる。 ・命の重さについて、理解を深めることができる		
〇〇の実践					

③ 心の題材一覧作成（心の学習で取り扱う題材の一覧を作成する。）

マトリックスの観点から題材を見直し、生徒に教える必要のあることを「心」の分野で洗い出すということで、昨年までの資料をもとに話し合った。大人に近づいていくためには判断と行動が必要で責任が出てくることが、人間関係等のキーワードについて話し合った。

④ からだの題材一覧作成（からだの学習で取り扱う題材の一覧を作成する。）

「からだ」グループでは始めに、保健体育の学習指導要領を参考に大枠を作った。大枠を基にグループで話し合いを進めた。その中で、福祉の学習指導要領の中に「清潔」という分野があることから、新たに「清潔について」という項目を追加した。その後、「心」グループの題材とも照らし合わせ、話し合いを進め、3学年を通して継続的に行うものなどを検討し、枠組みを作成した。

②単元指導計画・単元反省の見直し（元指導計画の様式・単元反省の項目の見直し）での話し合いの結果、固定化された単元指導計画を作成せず、学年ごとに題材をまとめた指導段階表を作成することとなったため、グループごとに作成した「心」と「からだ」の題材一覧（資料2）をもとに、マトリックスの達成を目指すことを念頭に題材を学年ごとに振り分ける話し合いを行った。グループごとに話し合いを進めたが、両方のグループで共通する内容が出て来たため、最終的には「心」と「からだ」で分けることができないと判断し、1・2学年段階は①自分と社会 ②健康について ③体の仕組みという3つの項目に分けた。3学年段階では①自分と社会 ②卒業後を見据えての二つの項目で分けた。最後に全体で確認をして一覧を作成した。（資料3）

（5）成果と課題

誰もが指導で悩みを抱えていた「心とからだ」の指導段階表を作成したことで、授業の計画がしやすくなったと考える。また、指導者が変わっても、授業内容の重複がなくなると考える。

一方、どの場面でもマトリックスを生かして研究を進めるということで何度も話し合いを重ねてきたが、単元指導計画など形式的なものに盛り込もうとすると不具合が出て来て、形だけのものになってしまうことがわかった。

今後は指導段階表を使っていきながら、生徒に対して効果的な指導ができているかの評価・反省をし、見直し・検討をしていく必要がある。

段階 学習分野	1	2	3	4	5
A 身体に関する科学的な理解	・身体の一部 ・身体の一部の名前	・男女の身体の違い ・プライベートゾーン	・性器の名称とはたらき ・二次性徴 ・生理、射精の仕組み	・受精のしくみ ・命の誕生	・妊娠と出産 ・エイズ、性感染症
B 健康・安全な生活	・清潔	・健康管理	・たばこ、アルコールの害 ・病気の予防と治療 ・自分の身を守ろう（実技）	・性被害（問題解決の方法） ・ストレスと解消法	・エイズ、性感染症の予防 ・出産 ・避妊 ・人工妊娠中絶
C 対人関係	・みんなと仲良く	・自分の気持ちを考える ・人の気持ちを考える	・異性への興味関心 ・異性との接し方 ・自分の行動を振り返ろう	・男女交際 ・性的欲求のコントロール	・結婚、離婚、家族の形 ・コミュニケーションの必要性
D 自分を取りまく社会	・私と家族	・私と周りの人との関係	・人との距離 ・大人としての行動と責任 ・自己理解Ⅰ	・性的事故（加害と被害の防止） ・性情報、性産業への適切な対応	・色々な生き方 ・地域社会での生活 ・自立に向けて ・自己理解Ⅱ

「心とからだ」の題材一覧表

	題 材 名	備 考
心	【自分と社会】 ◎自己理解 ・他者理解 ・自分の行動 ・コミュニケーションの必要性 ・人との距離 ・ストレスと解消法 ・大人としての行動と責任 ・家族の形 ・私と周りの人との関係 ・職場の人との関わり ◎異性との接し方 ・男女交際 ・自分の行動を振り返ろう ・男と女の役割 ・異性への興味関心 ・男子は女子を守る ・性的欲求のコントロール ・性被害 ・性情報 ・性的なマナーについて	
からだ	【健康について】 ・健康とは(WHO の健康の定義など) ・生活習慣病について(がん・脳卒中・心臓病など※肥満、糖尿病も) ・健康の保持増進(食事、運動、休養、睡眠) ・喫煙が体にあたえる影響(ニコチン、タール、依存症) ・飲酒が体にあたえる影響(長期間の飲酒:肝臓の影響) 【体のしくみについて】 ・二次性徴①(男女の体の違い) ・二次性徴②(体の仕組み) ・妊娠仕組み(精子、卵子、受精) ・妊娠するまでの流れ(受精、着床など) ・妊娠、出産(胎児への栄養など) ・人工妊娠中絶について 【清潔について】 ・清潔の保持(自分への体の影響など) ・身だしなみを整える必要(相手に与える印象)	

心とからだ 指導段階表

H25. 12. 17現在

1 学年		2 学年		3 学年	
【自分と社会】 - 自己理解① ⇒長所、短所など - パーソナルスペース - コミュニケーションスキル① ⇒聞く（返事、体を向ける、相手の顔を見る、相づち、話を最後まで聞く、復唱する）など - 人との距離・関わり - 大人としての行動と責任 ⇒高校生になってなど - 清潔の保持 ⇒清潔って？など - 身だしなみ ⇒周りからどう見られてしまうのかなど		【自分と社会】 - 自己理解② ⇒他者の評価を受け入れる - コミュニケーションスキル② ⇒伝える（感謝、謝罪、お願い、断り方、伝言、支援を求める）など - ストレスと解消法		【自分と社会】 - 自己理解③ ⇒社会に出るために - 他者理解 ⇒他者の気持ちを尊重しよう - コミュニケーションスキル③ ⇒社会に出るために（場を読むなど） - 社会人としての行動と責任 ⇒大人としての判断	敬語、電話対応など
【健康について】 - 健康とは？ ⇒健康な状態とは？などを考える - 生活習慣病について ⇒日本人の三大死因や肥満・糖尿病にも触れる	病気・ケガの対応	【健康について】 - 喫煙について ⇒煙の種類、有害物質、体への影響など - 飲酒について ⇒過度、長期の飲酒の影響など - 薬物乱用について ⇒種類、脳への作用など		【卒業後を見据えて】 - 異性とのかかわり方③ ⇒大人としてのかかわり方、マナー、将来（結婚）についてなど - 性被害、性加害 ⇒性犯罪、性的事故などについて	症状や予防法など

・健康の保持増進のために ⇒食事・運動・休養などの大切さ（健康管理）	運動余暇に触れる			・性感染症について② ⇒感染の症状、感染した場合など	戦争・脳死などの例
【体の仕組み：性教育】 ・異性とのかかわり方① ⇒プライベートゾーン、異性への興味関心、性的欲求のコントロール、異性との距離感など ・二次性徴 ⇒思春期の体の変化、男女の体の違い、身体の仕組みなど ・妊娠について① ⇒受精から出産までの流れなど ・性感染症について① ⇒H I V ・ A I D S について、その他の性感染症など	予防、正しい知識	【体の仕組み：性教育：命の尊さ】 ・異性とのかかわり方② ⇒男女交際のルールやマナーなど具体例を出し、行動を選択・決定する。 ・妊娠について② ⇒確認、振り返り程度（生命の誕生を確認） ・人工妊娠中絶 ⇒避妊方法、心と体への影響など ・命の大切さ① ⇒実際の例を出し、命について考えるなど	一般論を伝える 事故などの例	・結婚と家族、家庭を持つ ⇒どういったことが必要（法律など）なのかなど ・運動と余暇 ⇒生徒の実態に応じて ・命の大切さ② ⇒実際の例を出し、命について考えるなど	

3 作業学習部会の研究

(1) 研究の目的

第6次研究の主題である「社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究」の必要性は昨今の経済・社会情勢（具体的には本校生徒の進路先が多い道南地域の雇用状況など）や卒業生の事例から、喫緊に求められているところである。「社会の変化に対応できる」生徒とは、本校の目指す生徒像である「豊かな心と健やかな体をつくる生徒」、「希望に向かって努力する生徒」「自ら判断し行動する生徒」とし、教育課程の1つである作業学習を振り返り、見直すことにした。

作業部会内で話し合った結果、日々の作業学習におけるねらいや指導内容、その授業を受けた生徒の変容も含めた授業の様子をまとめて授業後に振り返ることができる様式を、これまで使用していた授業略案をもとに改善して作成していくこととした。

評価様式の作成を通し、授業に関わった教員が指導内容と生徒の変容を把握することで、今後の進め方や指導内容などを考え、次回の改善につなげていくようにした。さらに今養版キャリアプランニングマトリックス（以下「マトリックス」と略す）との関連性を高めるため、各学科の指導の重点をマトリックスの指導観点と照らし合わせて置き換えてみることで、各学科の指導の重点をより授業に反映させていくことを目指した。

(2) 研究の内容と方法

- 研究推進委員会より示された、本研究の目的、ねらいを部会内で説明し、全体周知を行った。
（社会の変化に対応できる力が身についた生徒を育成するための授業展開と授業改善）
- 各学科で使用している授業略案を比較・検討し、授業改善に生かせる様式を選び出した。
（各学科の特性もあり、統一様式を目指す前段階として現在の各学科独自の様式を作成）
- 各学科で評価様式を作成し、授業で活用したときの使いやすさ、改善点などについて授業者および部会内で検討し、周知を図っていく。
- 実際の授業に活用しながら、適宜、授業者間で見直しを行い、部会内で進捗状況を確認し、学科内でも進捗状況を共有することに努めた。

(3) 推進計画

- 8月 評価様式の作成にむけて
…各学科で使用している略案を集約し、新しい評価様式に盛り込みたい内容を検討。
- 10月 評価様式の作成にむけて
…各学科の略案の特徴や長所について話し合う。その後、学科ごとに評価様式を作成。
- 11月 評価様式の作成・実行
…各学科評価様式を作成し、活用する。
- 12月 評価様式の進捗確認
…評価様式を活用してみたからの使用感や改善点などについて話し合う。

(4) 研究の実際

産業科

- 学科部会で確認した後、作業担当者を中心として既存の授業略案をもとにした評価様式を2案作成した。
- 2つの評価様式を交互に使用した後、授業者間で話し合いを持った。1案(資料1)では生徒の実態を載せたものだが、これは授業によっては他学年、他学科の教員が指導にあたる際に、生徒の特性や課題がわかり非常に有効であった。2案(資料2)は個別の指導計画を載せたものだが、これは指導した内容とそれに対する生徒の様子を記入することにより、個別の目標に対しての評価の活用にもつなげることが可能になった。
- 再び、学科部会内に双方の評価様式の特徴と利用法を伝え、学科職員全員で検討し、2案の評価様式を活用していくことを決定した。
- STが生徒の様子や評価をまとめてMTに渡し、MTがそれをまとめて次時の略案の裏に掲載することで、次時の授業者全員が指導内容を振り返られる構成にした。

農業科

- 日々の授業や生徒の評価について学科として統一したものがなく、各学年の作業担当者に委ねられていた。1年生と2年生は、日々の授業の計画と評価は異なった様式で作成しており、3年生は授業の計画と生徒の評価を一緒にした様式で行っていた。
- 本研究での評価様式の作成にあたり、授業計画と評価が一体化されていた農業科3年生の評価様式を基にして、学科で統一した様式を作成することにした。
- 評価様式は、原案の段階で2つの案を作成した。案1と案2で共通している点は、学科の指導の重点を記載してその日の授業では特にどの重点に重きをおいて指導するのかを明確にしている点と、指導の重点に対しての授業評価を組み込んでいるという点である。異なる点は、授業の単元名を入れているかいないかという点と、生徒個人個人の評価に指導の重点に関する評価も加えているかどうかという点である。
- 学科部会にて検討したところ、農業科の作業は他の学科と明らかに違う点として、その日の天候や畑の状況等によって作業の中身が変わってくるという特性があげられた。これは前もって単元を設定することが困難であることや、生徒の実態に合わせて作業内容を構成したとしても、作業を続けていくうちに自然とそれに関わる他の単元を同時に行わなければならないことがあることを示している。
- 作業学習の計画を組みにくくしてしまうことを避けるため、単元の設定を明記する形はやめ、指導の重点に関連する生徒の評価を残すこととした。こうして、2つの案を整理・統合した様式(資料3)を作成し、11月から全学年で活用することとした。

家庭科

- 生活家庭科では、学科として統一した評価様式はなく、各学年の作業担当者が年度当初に様式を作成して授業者に配布、記入していた。
- 1・2学年は授業略案と評価が別になった様式(Excel)を使用し、データ入力を行っている。3学年は指導略案と評価が一体となった様式を使用し、担当した生徒の分をその指導者が毎回手書きで記入していた。
- 一定期間使用した後、学科部会で各学年の評価様式を見合わせた。使い勝手や見やすさなどについて話し合った結果、2学年が使用していた様式(資料4)を学科の統一した様式とし、活用・改善していくこととした(活用方法については資料5参照)。

(5) 成果と課題

産業科

【成果】○生徒の変化（現在のつまずきや課題、良くなったところ）に気づき、見えるようになってきた。これにより、生徒の実態を考慮した題材設定、授業構成を考えることにつながった。
また、マトリックスの指導観点と授業内容との関連も考えるようにもなった。

【課題】○評価様式に記述する内容をある程度統一したものにする。

※例えば…評価に活用できるように、記述する内容は①指導前の生徒の様子②指導内容③指導後の生徒の様子の3点に統一するなど。

○検証・評価～見直し・改善のサイクルを定期的に行う。

…実際に評価様式を使用してみてわかったことだが、授業者によっては複数の業務を抱えている者もあり、十分に時間のとれない中での取り組みとなった。より効率的にできる方法を考えていく必要がある。

○学科部会内でテーマ別研究グループを構成し、全員で研究にあたる。

…研究グループを編成し、全員が参加できる形態にすることで業務の分担化や本研究テーマの共通理解の浸透を図る。

※例えば…コミュニケーションについて研究するグループを構成し、グループ内で「よりよい人間関係を作っていける力」について作業学習を通してどのように教えていくかを話し合うなど。

農業科

【成果】○作業内容がはっきりとしている時はその日の授業での指導の重点をどこに置くかを考えて授業計画を立てるようになった。

○授業後に、どこまで重点項目を意識して取り組むことができたのか、自分で自分の授業評価を行うようになった。

○個別の指導計画の目標を合わせて記載することで、生徒の課題とするところを常に意識して授業に取り組み、評価が行えるようになった。

【課題】○農業科の特性上、天候がはっきりしない時には計画が立てにくく、天候の急変に合わせて作業内容も切り替えざるを得なくなるなど臨機応変な対応が求められる。できるだけ柔軟な対応をしてきたが、作業種が変わると重点項目も変わってくるため、評価がつけにくいときがあった。

○学年によっては晴天版と雨天版の2パターンを作成していた。天候にあわせて柔軟な対応ができるが、作成に時間がかかってしまう一面もある。

家庭科

【成果】○個別の目標が記載されていることで、それを見た指導者が個々の生徒の課題とするところを常に意識して授業に取り組めたことに加え、授業後の評価への活用にもつながった。

○クラスの生徒全員分の一週間程度の評価がまとめて見られることから、担当する生徒の前時の様子がわかったり、それに関連した重点的な指導にも生かすことができた。

○担当教員が変わっても、生徒の課題とするところを意識した継続的な指導にもつながった。

【課題】○現在の様式（Excel）では、記入できるのは一人のみである。授業に関わった複数の教員が同時にデータ入力できる書式に変更することで業務の効率化が図れるので整備していきたい。

このように、本研究を通してのこの一年間は各学科ともに授業改善のための取り組みに踏み出した段階である。今後もよりよい授業実践が行われるためには、全職員が同じ目的をもって取り組むことが不可欠である。そのためには定期的な確認の場を設け、みんなで知恵を出し合って授業改善に努めていくことが必要である。

温度… ℃ 湿度… %

平成 25 年度 産業科二学年 作業学習 授業メモ

日 時	平成 26 年 2 月 4 日 (月) 9 : 50～12 : 10		場 所	窯業室	指導者	岩城、矢倉 T、小松 T
単 元 名	販売会に向けて		題 材 名	サダボウル、カクレカップ→八角皿、コーヒーカップ、4.5 寸皿の作製、		
時刻	学習活動				教材・教具	
9 : 50	・入室あいさつ、タイムレコーダー、作業道具の準備、身だしなみの確認 <始業あいさつ> 「おはようございます」「よろしくお願いします」 <全体説明～本時の学習内容と担当の先生の確認> ☐ 作業内容の確認、新しい分担、掃除リーダーの仕事 ☐ 掃除を時間内に終えること ☐ 声をかけ合う、時間を意識する				<生徒服装・持ち物> ・作業服 タオル ・作業ファイル ・筆記用具	
10 : 00 (100分)	【成 形】 ☐ カクレカップ→八角皿 …… I、N (岩城) ※終了後、八角皿の成形 ☐ コーヒーカップ …… T、H (〃) ※取ってつけを行う ☐ サラダボウル …… I、N (矢倉 T) ※縁の修正 ☐ 4.5 寸皿 …… N、 (小松 T)					
11 : 40	【掃 除】 自分たちの使った作業台を分担して掃除する。 作業リーダーが率先して全体掃除を進める。 合流したグループは掃除の進行状況を確認する。 早足で移動する。					
12 : 05	<作業日誌への記入> ※かけない時は放課後、記入してから下校 作業を振り返り、日誌を記入する。 できたら担当の先生に報告し、アドバイスを受ける。					
12 : 10	<終業あいさつ> 「気をつけ」「これで作業を終わります。」「礼」「おつかれさまでした」 ・退室あいさつ、タイムレコーダー					
指導記録						
I・T		I・K				
O・H		T・H				
N・T		N・K				
N・Y		H・M				

※裏面に前回の生徒の様子を載せてます。

資料 2

温度… ℃ 湿度… %

平成 26 年 2 月 3 日 (月) の様子

	マトリックスの観点	指導の重点	評価
1	【職業】	正しい手順や方法で作業を行い、集中力や作業に必要な体力などの基本的な能力を身につけさせる。	○
2	【職業】 【コミュニケーション】	あいさつ、返事、報告などの作業をするのに必要な基礎となる力を身につけさせながら、仲間と協力して取り組む姿勢を育てる。応対の仕方など基本的な行動様式を育成する。	○
3	【心と体】 【知識・技術】	健康・安全指導を徹底するとともに、整理整頓、清掃などの習慣を育成する。	○
4	【知識・技術】	生産から販売、納品までの流通過程の学習を通し、流通の仕組みを体験させ、働く喜びや意欲の向上を図る。	△
5	【自己理解】【職業】 【自己内省】	「作業強化日」「現場実習」を通し、自ら課題を理解するとともに、課題解決への意欲を高める。	なし
6	【職業】【知識・技術】	販売学習を通し、実践的な態度や勤労意欲を育成する。	なし

評価の基準 ◎…達成できた ○…おおむね達成できた △…改善の必要がある

	個別の指導目標	手だて	評価	備考
I ・ T	・指導者が説明した工程で作業に取り組むことができる。 ・仲間と協力して作業することができる。	・工程について、わからなくなった時や疑問があった時はその都度教師に伝えるようにし、正しい工程で取り組ませていく。 ・自分から相手に話しかける場面を設定していく。	・「タガボム」作製。薄刃カッターで水平に切り取る工程で焦りを感じたようで、ガタガタになる。一度で切りだすのではなく、数度に分けて切りだすように伝えた。次回、縁を水平にする工程。	
I ・ K	・苦しい作業や場面でも気持ちを切り替えたり、安定して作業に取り組むことができる。 ・仲間とコミュニケーションを取りながら作業に取り組むことができる。	・作業前に本人にどのように取り組むかを確認させていく。 ・短く簡潔な表現を心がけるとともに、作業内容についての簡単な会話を交わたりしながら取り組ませる。	・目線を合わせての報告、返事ができず。指摘すると本人も戸惑いを隠せず。個別実習での成果と課題であることを伝える。本人も意識してみるとこたえる。	
O ・ H	・相手がのぞましいと思う表情や態度で作業に取り組むことができる。 ・誰でも素直に作業に取り組むことができる。	・のぞましい声の大きさや目線、姿勢など具体的に伝えていく。 ・注意をされる前に自分から意識して行動することを確認する。言い訳と受け取られるような答え方をした場合は指摘をしていく。	休み	
T ・ H	・相手が望ましいと思う声であいさつ、返事、報告を最後まで行うことができる。 ・作業の状況を自分の言葉で相手に説明することができる。	・作業前に目標を確認させ、作業に対する集中力を高めるとともに、終了後によかった点を伝える。 ・自分の言葉で説明すべき状況を作り、自分の考えを伝える経験を積んでいく。	・声は大きくはないが、相手には伝わっている様子。西川と言葉を選びながら掃除の分担を話し合っていた。 ・日向と話しながら取っ手つけ。日向に取っ手つけのポイントを説明。日向も分かった様子。	
N ・ T	・時間いっぱい早足で取り組むことができる。 ・気持ちを切り替え、安定して作業に取り組むことができる。	・移動を早くすることで、作業時間がより確保できる事を意識させていく。 ・工程どおりに作業したり作業後半になっても集中力を維持して取り組むように言葉をかけていく。	・「タガボム」作製。指押しの力加減良い。石こう型から粘土を取り出すことができず苦戦。息を一か所に吹きかけて振りだすように教える。 ・掃除の後半から早足に行動していた。	
N ・ K	・のぞましい言い方とタイミングで声をかけ合いながら協力して作業を進めることができる。 ・製品づくりの技能を高めることができる。	・のぞましいわかり方をその都度、教えていく。自分から行えた場合はほめる。 ・工程順や指の動かし方、力の入れ方などの見本を見せ、出来上りに差が出ることを自覚させる。	・タイミング、時間の事を気にしながら動けるようになってきたのでスムーズに作業を進めることができる。焦ると掃除など雑になる傾向があるので丁寧さも忘れずに取り組ませる。	
N ・ Y	・仲間と声をかけ合いながら作業に取り組むことができる。	・清掃の時のように、本人発信の指示や報告、説明などを作業でも行うように伝える。場合によっては具体的な見本を見せる。	・作業時の仲間とのやり取りはみられない。掃除の時に水洗い場で声をかけられることが多い。主体的な自分発信の声が出ていない。 ・丁寧に作業できている。底板、一発で作ることができた。	
H ・ M	・自分から相手に声をかけて作業に取り組む。 ・相手に聞こえる声であいさつ、報告、返事を行うことができる。	・本人から申し出があった時は、声をかけるべき相手やタイミングについて助言をする。 ・作業時間や作業目的を本人に自覚させ、作業に対する集中力を高めさせる。	・取っ手の付け方について多田にその都度質問していた。返事の声はもう少し大きくてもよい。 ・掃除の時はためらわなく行動。足早に動く姿も見られた。表情は真剣。	

資料 3

○学年 農業科作業学習 略案 (回目)

日 時:平成26年1月31日(金) 2~4校時

場 所:農場

指導者:小原(MT) 泉谷 T 加藤 T

農業科指導の重点(平成25年度)・本時の重点ポイント(最重点◎、重点○)

○	(1)	(1) 自立に必要な基礎的学力や社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身に付ける。(知識・技術)
	(2)	(2) 栽培から販売までの過程を学習することを通じ、やりがいや生きがいを見だし実践的な労働意欲を高める。(職業)
○	(3)	(3) 整理・整頓・清掃の生活習慣を身に付けるとともに、健康・安全に気を付ける。(心と体)
◎	(4)	(4) 姿勢の保持、集中力、持続力、集団行動などの基本的作業態度を身に付ける。(職業)
	(5)	(5) 「作業強化日」「現場実習」を通して自己の課題を理解し、卒業後の職業自立に向けて自ら課題解決をしようと努力する姿勢を身に付ける。(自己内省)
	(6)	(6) 様々な作業体験を通して自己の理解力を高め、卒業後の職業生活への見通しを持たせ、自立への興味・関心を持つ。(自己理解)
	(7)	(7) ホームルームや他教科との連携を図りながら、社会人として必要なコミュニケーションの取り方を身に付ける。(コミュニケーション)

本時の活動:収穫物の調整と冬に向けての準備

本時の目標:社会人として必要なルールやマナー、礼儀を身につける。(1)

使った物をきれいに洗浄する習慣を身につける。(3)

基本的作業態度を身につける。(4)

本時の展開

配時	指導内容	学習活動
5分	集合・内容確認	・班長の号令 ・本時の作業内容の確認。
125分	プラグトレイの洗浄	・前回、自分の行ったトレイを確認し、洗い残した部分を確認させてから洗浄させる。 ・全てタタキで使ったトレイなので、自分が使った物は自分できれいにすることを意識させる。
10分	集合・反省	・日直の号令 ・本時の振り返りと反省

評価の観点

社会人として必要なルールやマナー、礼儀を身につけられたか。(1)

使った物をきれいに洗浄する習慣を身につけられたか。(3)

基本的作業態度を身につけられたか。(4)

授業記録 指導重点(1)→(○) (3)→(◎) (4)→(○)

プラグトレイの洗浄は、だいぶ慣れてきており各自でコツを掴んできている。使う道具や洗い方など以前に3年生から教えてもらったやり方の他に自分なりのやり方を考えて取り組んでいる様子が見られてきた。

個別記録(個別指導計画後期目標)

I	・予鈴が鳴る前に確実に集合することができる。 指導重点(1)→(○) (3)→(○) (4)→(△)	VI	・手早さを優先させて、丁寧さがおろそかにならないようにする。 指導重点(1)→(○) (3)→(○) (4)→(◎)
II	作業中にトイレに行った。最近、時間内に早めに作業場に来るが、作業中トイレに行くことが1回はある。もう少し様子を見た。予鈴には間に合った。	VII	・積極的に作業に取り組む事ができる。 指導重点(1)→(○) (3)→(◎) (4)→(○)
III	・協力する場面では、自分から声をかけることができる。 指導重点(1)→() (3)→() (4)→() 欠席	VIII	・自分から気が付いて動くことができる。 指導重点(1)→(○) (3)→(△) (4)→(○)
IV	・集中力を持続させ、気分が流されず作業に取り組むことができる。 指導重点(1)→() (3)→() (4)→() 欠席	IX	・ベースが早くなってきた。トレイの底の汚れが落としきれいなく2回ほどやり直しをさせた。気が付いて動けるようになってきて、声かけも出来るようになってきた。
V	・目上の人に対して適切な言葉遣いで話ができる。 指導重点(1)→(○) (3)→(○) (4)→(○)		・受け身にならず、積極的に作業に取り組むことができる。 指導重点(1)→(△) (3)→(△) (4)→(△)
	自己点検は甘いが、一度やり直しをさせると次からはきれいな状態で持ってきて、やり直しがなくなった。道具をうまく使っている。言葉遣いには問題なかった。		長靴を履く場所ですぐに脱いでいた。ややしばらくしてから作業場まで来たが、ガラス室に入らず、友人の誘いでようやくガラス室に入りトレイの洗浄を始めた。気持ちがその時により不安定。理由は話さなかった。
	・周囲とコミュニケーションを取りながら作業を行うことができる。 指導重点(1)→(△) (3)→(○) (4)→(△)		指導の重点の評価:以下の観点で評価をして下さい。 ◎:大変良くできていた。 ○:できていた。 △:できていなかった。
	トレイの洗いの要領を掴んできている。ペースも早くなってきた。 しかし効率よくできない。道具をうまく使えない。準備・後片付けで声かけなし。		

資料 4

マトリックスとの関連		指導の重点				12月4日	12月5日	12月6日	12月10日	12月11日	12月12日	改善の力点
(1)	職業	縫工、リサイクル、紙漉、環境整備等の作業を通して興味関心の幅を広げ生活経験を豊かにすると共に、働くことの意義や喜びを理解する気持ち				○	○	○	○	○	○	
(2)	自己理解	現場実習・作業強化日などを通して自己の長所を知り課題を理解し、他者から受ける評価を受け入れる気持ちを育てる。				○	○	○	○	○	○	
(3)	自己内省	働くために必要な態度・習慣・集中力や注意力、課題解決に向けて努力する姿勢を育てる。				△	○	○	○	○	○	
(4)	知識・技術	作業学習や日常生活に必要な基本動作及び巧緻動作、協応動作の向上を図ると共に、社会のルールやマナー、礼儀を身につける力を育てる。				○	○	○	○	○	○	
(5)	知識・技術	安全に作業が取り組めるよう、道具等の取り扱いに気をつける力を育てる。				△	○	○	○	○	○	
(6)	心と体	ホームルームや他教科との連携を図りながら、望ましい生活習慣や健康を維持できる力を育てる。				△	△	△	△	△	△	
(7)	コミュニケーション	場の状況に応じた挨拶・返事・報告をする力や、必要な支援を他者に求めることができる力を育てる。				○	○	△	○	△	○	
		12月4日	12月5日	2013/12/6 紙すき55枚 液体9	2013/12/10 紙すき33枚	12月11日	2013/12/12 紙すき	特記事項				
氏名 A	石けん作り 自分では全く準備できない。指示されたことをやる感じ。報告の言葉は覚えていてしっかり言っていた。	石けん削り 準備は障子の後をおいて見ながらやっていた。石けん削りは1時間手を休めることなく集中してできた。掃除・片づけも自分から仕事を見つけることはなかった。	ローラーかけ ローラーのかけ方をしっかりと理解していきムズに動いていた。失敗もなくてよかった。グラムがかわってネル生地の変色もかわったが対応できていた。	ローラーかけ 集中してローラーがけをしていた。失敗もなく仕上がりがきれいになっていてよかった。返事・報告も大きな声でできた。	封筒作り(56枚) 手早く封筒切りができていた。何度か真直ぐ切れていないことがあったが、次は気を付けるようにと言った。報告はしっかりとできていた。報告はしっかりとできていた。	ローラーかけ						
氏名 B	目標・丁寧さと丁寧さを意識して取り組む。・時間と能力を作業に集中して取り組むことができる。次回に向けて	出停	出停	出停	出停	出停	出停					
氏名 C	目標・自分のやるべき作業に集中して取り組む。・工程を進める時や違う作業をする時必ず確認する。次回に向けて	石けん作り 準備は自分なりに覚えている物を用意していたが、不十分。型に入れる時に何度も液をこぼした。	裁断・経量 裁断は、職員の指示を聞きながら手早く行うことができていた。28枚。経量では、計りの数字をしっかりと確認しながら手早く行うことができていた。38個。	液体せっけん作り 着ち着いて最後まで集中して作業していた。準備と一回目の石けん作りは指示や声がかかれば必要だったが、二回目からは一人でできていた。後片付けも自分から進んでしっかりできていた。	アクリル板洗い 準備はヒントを言わないと分からない物あり。集中して取り組んでいたが、やり方を自分流にすることが有り指導。	メモ帳作り 初めてのメモ帳作りだったがやり方を説明すると覚えその通りやっていた。報告もしっかりとできていた。パルプ切りも手を止めずに集中してできていた。	メモ帳作り メモ帳のサイズに切る裁断のやり方を覚えてきて終わるまで集中して取り組めた。報告もしっかりできた。					
氏名 D	目標・相手に聞こえるように報告や返事。・どんな作業でも集中して取り組む。次回に向けて	報告・確認 「ミネート・パルプ切り」上手くミネートが刺さる感じがスレスレだった。刺さる感じがなくなると足が上がるように手をあげることがあった。パルプ切りは集中して糸山切ることができた。自ら報告することはなかった。	パルプ切り 大きな声を出すこともなく、手を止めることもなく集中して切っていた。目が合うと次の行動に移ろうとした。報告も声がかかるとできなくなった。	液体せっけん作り 落ち着いて作業していた。準備・作業工程・後片付けすべてに指示や声がかかるとできなくなった。報告も声がかかるとできなくなった。	準備・掃除 ばち袋作り 最初から不安定な様子。準備は声掛けをしてやる。きかかけをきかないと次の工程に取り組めない。自分から報告したことは1回だけ。後は、促さないといけない。掃除は壁などを蹴って手を止めない。	型外し・洗い 型外しは手際よくどんどん外すことができた。石けん削りは言葉がけが必要な部分があるが、集中して取り組んでいた。報告は自分からはできずに促されてからする程度。	封筒切り 線の通り上手く切り抜くことができた。切り終わった後報告するよう言うが、できない。封筒の柄を眺めている。声掛けで報告を促すも時間がかかることが多かった。					
氏名 E	目標・丁寧さと丁寧さを意識して取り組む。・自分から報告や返事。・どんな作業でも集中して取り組む。次回に向けて	石けん作り 紙を見ながら準備。工程は覚えていて自ら取り組むことができる。型に入れる時にこぼすことあり。	石けん削り 準備や身支度もしっかりできていた。石けん削りも集中して行い、手を休めることもなくやっていた。掃除・後片付けも手早く無駄なくできていた。	紙すき 集中して行っていた。パルプの取り残しも前回より少なく、無駄な行動もなく、後片付けまで手早くできていた。	紙すき パルプの取り残しはなく、やり直しも1度しかなかった。後片付けや掃除も黙々とこなっていた。	封筒作り(56枚) 全体を通して、集中して丁寧にやっていた。テープ貼りは1枚逆貼に貼ってしまうことがあったが、テープは気を付けて丁寧に貼ることができていた。順通りに折れずに曲ってしまうことが数回あった。	紙すき 非常に丁寧に紙漉を行った。意欲的に取り組んでいた。掃除も排水溝をきれいにして洗っていた。					
氏名 F	目標・時間いっぱい集中力や注意力を集中して取り組むことができる。・丁寧さを意識して作業に取り組む。次回に向けて	石けん作り 工程をしっかりと、余計な確認をしすぎないことをしている。	パルプ切り 注意する点(同じ幅で切る)を確認してから取り組めるが、できていくと注意が2回した。手を止めることはなく取り組んでいる。	ローラーかけ ローラーのかけ方をしっかりと理解していきムズに動いていた。失敗もなくてよかった。グラムがかわってネル生地使用の変色にも対応できていた。周りを見て物を用意したり置く位置を考慮する。	ローラーかけ 最後まで集中していた。2枚ほどしわができてやり直しをしたが、それ以外はきれいにローラーがけができていた。	型外し・洗い 型外しは、残念なことには残る。ぼろぼろ石けんが落ちてくる。自分のルマはすべて終了。報告はできた。石けん削りは非常に手際が良かった。型外しは丁寧にやる。	ローラーかけ					
氏名 G	目標・どんな作業でも時間いっぱい集中して取り組むことができる。・仲間と協力しながら作業に取り組む。・自分から報告や返事。・どんな作業でも集中して取り組む。次回に向けて	ミキサー・パルプ切り 時間前に教室に入っていたが、自分の仕事の準備はできていなかった。作業は最後まで取り組んでいたが、よく見をするところもあり、切ったパルプは少し多かった。	パルプ切り たまに手がとまることがあったが、2枚ずつ切り始めに切ることでできた。終わりに際して少し作業と関係ない話をしていた。掃除は自分から行っていた。	ミキサー 久しぶりで忘れていたことはあったが、すぐに通常の工程で作業ができた。掃除が水に入る前にフラッシュボタンを押して、周りをみてから行っていた。無駄な動きもなかった。	ミキサー 準備はしっかりとできていた。前回同様掃除が水に入る前にフラッシュボタンを押して、周りをみてから行っていた。無駄な動きもなかった。	計量(5g100個) 手早く計量できていた。報告する時としないときがあった。手を休めることはなかった。ミキサーはがし手早くできていたが、ゴミ取りを最初おいていて声掛けした。	ミキサー 勢よくミキサーからすき中に流し込むため、水滴が飛ぶことがあった。流し入れる方向を変えるように指示し、その後はとぶことはなかった。時計を見ながらどこまでやったらよいかを自分で判断できていた。					
氏名 H	目標・自分から報告や返事。・丁寧さを意識して作業に取り組む。次回に向けて	名刺切り・計量 定規を逆さに使うことや計りの数字が0gになるのを確認せずに作業を行うことがあった。全体を通して、集中しており、丁寧に取り組むことができていた。名刺30枚、経量50個(5色×10個)	名刺切り 集中して慎重に行うことができていた。1枚切りの時に時間を掛けているので、丁寧さを維持しつつ少しだけ手早さを加えて見るよう促している。	名刺切り 正しく道具を使い丁寧に切れていた。手早さもありよかった。手早さの時間を気にする様子はない。	裁断 裁断した辺としない辺の区別がつかない。裁断しない辺を合わせて切っている。裁断をきくと合わせて切っている。裁断をきくと合わせて切っている。裁断をきくと合わせて切っている。	封筒作り(56枚) 封筒切りは手早く意識して行い5分未満で切ることができていた。後片付けはまっすぐに断を付けることができていた。両面テープは、貼りに着くことができていた。ゴミを処理した際に、一緒に両面テープを処分せずに捨ててしまっていた。	封筒作り(13枚) 封筒切りは手早く意識して行い5分未満で切ることができていた。後片付けはまっすぐに断を付けることができていた。両面テープは、貼りに着くことができていた。ゴミを処理した際に、一緒に両面テープを処分せずに捨ててしまっていた。					

評価様式 記入例及び解説

生活家庭科 評価様式

マトリックスとの関連		指導の重点			10月23日	10月28日	10月29日
(1)	職業	縫工、リサイクル、紙漉、環境整備等の作業を通して興味関心の幅を広げ生活経験を豊かにすると共に、働くことの意義や喜びを理解する気持ちを育てる。	縫工、リサイクル、紙漉、環境整備等の作業を通して興味関心の幅を広げ生活経験を豊かにすると共に、働くことの意義や喜びを理解する気持ちを育てる。	縫工、リサイクル、紙漉、環境整備等の作業を通して興味関心の幅を広げ生活経験を豊かにすると共に、働くことの意義や喜びを理解する気持ちを育てる。	○	○	○
(2)	自己理解	現場実習・作業強化日などを通して自己の長所を知り課題を理解し、他者から受ける評価を受け入れる気持ちを育てる。	現場実習・作業強化日などを通して自己の長所を知り課題を理解し、他者から受ける評価を受け入れる気持ちを育てる。	現場実習・作業強化日などを通して自己の長所を知り課題を理解し、他者から受ける評価を受け入れる気持ちを育てる。	△課題認識希薄	△前回同様	○
(3)	自己内省	働くために必要な態度・習慣・集中力や注意力、課題解決に向けて努力する姿勢を育てる。	働くために必要な態度・習慣・集中力や注意力、課題解決に向けて努力する姿勢を育てる。	働くために必要な態度・習慣・集中力や注意力、課題解決に向けて努力する姿勢を育てる。	○	○	◎
(4)	知識・技術	作業学習や日常生活に必要な基本動作及び巧緻動作、協働動作の向上を図ると共に、社会のルールやマナー、礼儀を身につける力を育てる。	作業学習や日常生活に必要な基本動作及び巧緻動作、協働動作の向上を図ると共に、社会のルールやマナー、礼儀を身につける力を育てる。	作業学習や日常生活に必要な基本動作及び巧緻動作、協働動作の向上を図ると共に、社会のルールやマナー、礼儀を身につける力を育てる。	○	○	◎
(5)	知識・技術	安全に作業が取り組めるよう、道具等の取り扱いに気をつける力を育てる。	安全に作業が取り組めるよう、道具等の取り扱いに気をつける力を育てる。	安全に作業が取り組めるよう、道具等の取り扱いに気をつける力を育てる。	△姿勢・姿勢しり	△生徒不調	○
(6)	心と体	ホームルームや他教科との連携を図りながら、望ましい生活習慣や健康を維持できる力を育てる。	ホームルームや他教科との連携を図りながら、望ましい生活習慣や健康を維持できる力を育てる。	ホームルームや他教科との連携を図りながら、望ましい生活習慣や健康を維持できる力を育てる。	△作業単独傾向	△同左	△同
(7)	コミュニケーション	必要に応じて他者との協力を求めることができる	必要に応じて他者との協力を求めることができる	必要に応じて他者との協力を求めることができる	○	○	◎
その日の全体の達成度合いを記入する。							
10月23日(水)3～4紙漉 35枚 藤倉		10月28日(月)3～4紙漉 13枚 矢倉		10月29日(火)2～4紙漉 35枚 中川		10月30日(水)2～4紙漉 40枚(新) 藤倉	
OM 工程ことの正しいやり方を理解し正確に行う。		・計量 水色のお花紙を2枚入れるよう指示。指示通り取り組む。後半花紙の大きさを減らし、1枚入れるよう変更するが、指示通り正確に行う。		・計量 途中、お花紙の大きさが変わらぬよう両手に変えたことを指導。更にのんびり取り組んでいたことで自分の目標を再確認させ積極的に取り組むことを指示。見事に改善された。		・ローラー 久々だが、今まで言われていた注意点を意識しながら終始取り組んでいた。目標である積極性も意識できていた。	
次回に向けて 手早さ		・ミシン ミシンそのものは良い。ミシンそのものは指示通りでミス。指示通り		・ミシン ミシンそのものは指示通りでミス。指示通り		・ミシン 取り組みは指示通り。作業室の片手アーム	

マトリックスとの関連を意識した指導が行えたか、授業そのものを4段階程度で評価し、改善に繋げる。

マトリックスとの関連を意識した指導が行えたか、授業そのものを4段階程度で評価し、改善に繋げる。

改善の方策

施設見学直後の生徒が多いため、就労を意識した場面設定

作業日誌の活用

改善策の具体的な方策を記入し、指導者間で話し合う材料に活用する。

授業改善

目標に対する評価を中心に記入する。
評価の活用

個人目標を記入する。「個別の指導計画」の作業学習の目標と、生徒の個人目標をできる限りリンクさせた目標を立てる。

個別の指導計画との関連

その日の課題及び次回につなげたことを簡潔に記入する。指導者間での改善・見直しに活用する。

課題の共通認識 授業改善

後期の目標につながる、あるいは新たな課題となることを、総合的に記入する。

個別の指導計画との関連

特記事項

目標以外の様子などについて記入する。課題については「次回に向けて」の欄に記入。極力できたことや改善が見られた部分を記入するよう心がける。

良い面を評価する意識

・他の生徒に声を掛ける場面が出てきているので、生徒からの指示が明確になるよう環境設定していく。

4 成果と課題

今年度の課題研究は、授業を担当する指導者チームを中心として、キャリア教育の観点から授業づくりを行っていくことに焦点を当てた。生活単元学習と作業学習において、これまでの授業・指導をマトリックスに照らし合わせ、学校教育目標を達成するための具体的な授業実践が成されることを目指した。

生活単元学習部会の研究では、心とからだの学習単元における授業の題材を整理し、マトリックスの各学年段階・各指導観点における教育方針も踏まえた上で、生徒に身につけさせたい力を各学年段階にまとめた「指導段階表」を完成させることができた。これにより、授業の計画がしやすくなったところは成果と言えるが、今後これを使って生徒の実態に即したキャリア発達を促す効果的な指導を実践していくことが課題と言える。また、心とからだの学習以外の単元においても同様のまとめを作成するのか、当初は取り組む予定でいた評価の在り方の検討はどうするのかといったことも課題として残っている。

作業学習部会の研究では、評価様式の見直しを通して生徒の変容を把握し、授業や指導の在り方を見直していくという取り組みを行い、各学科で統一された評価様式を完成させることができた。これにより、生徒の変化にきめ細かく気づくことができるようになり、その日の重点を設定して授業計画を立てて生徒の課題を常に意識ながら指導できるようになり、担当職員が変わっても指導がぶれなくなったことが成果と言える。つまり、評価という Check をまとめたことで、結果として授業の改善 (Action) が進み、授業の内容や指導のねらいがしっかりと計画され (Plan)、実際の授業において実践される (Do) という PDCA サイクルがよい形で機能し始めたのである。これを今後循環させ、評価の記述方法や、複数人が記入できるようデータ処理を工夫するなど、運用面での細かい課題を解決していくことが求められる。

また、今年度検討を重ねる上で、マトリックスの生かし方がよくわからないという声が多く聞かれた。それは、マトリックスの各指導観点と授業、単元、指導場面の結びつきが明確化されておらず、マトリックスのどの部分を意識して何を指導するかについて基準のようなものではなく、その基準作りが教職員個々の主観あるいは各研究組織に委ねられていたためではないかと考えられる。しかしながら、各学科の学科経営方針に明記されている6～7つの「指導の重点」には、それぞれがマトリックスのどの指導観点到に基づいて設定されたものなのかが記載されており、学科という組織としてマトリックスの生かし方を検討し明確化した例もある。こうしたことを踏まえ、マトリックスの教育方針と普段の教育活動やそのねらいをどのように結びつけて整理していくべきなのか、またそれはどのような研究組織を構成して成されるべきなのか、研修部や研究推進委員会等による検討が必要である。

第3章

プロジェクト研究

研究主題：キャリア教育の視点を通した「教育課程（行事）の見直し」

1 研究の概要

（１）設定理由

平成 24 年度の課題研究で「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究」が行われ、キャリア教育の学習が始まり、研究推進委員会が中心となって「今養版キャリアプランニングマトリックス」が作成された。

今年度の課題研究は、「今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究」となり、これまでの授業・指導をマトリックスに照らし合わせ、学校教育目標を達成するための具体的な授業実践を行うこととした。本校のプロジェクト研究では、教育課程検討委員会が中心となりキャリア教育の視点から「教育課程（行事）の見直し」を行うことになった。その中で教育課程検討委員会は、各行事の目的やその教育的意義を再確認して現在の本校生徒の実態に即しているものであるかを総合的に考察して担当部署に報告することとした。

（２）研究の内容と方法

- キャリア教育の視点から「教育課程（行事）の見直し」を行う。なぜその行事を行うのかをマトリックスを見ながら検討することを主とする（行事を増やす・減らすはその先の話）。
- 研究組織は教育課程検討委員会とする。ただし、関係分掌の先生方には客観的に出された意見をもとに分掌部会で具体的検討をしていただくために、委員会メンバーは、教頭、教務主任、寮務主任、学年主任、学科長、研修部長とする。
- 校内で行事に関するアンケートを実施して各行事の課題と改善策の調査を行う。その結果を教育課程検討委員会で検討し、その後ワーキンググループ（学年・学科・その他の 3 班）が分担してキャリア教育の視点を通して「教育課程（行事）の見直し」を行う。
- ワーキンググループで出された意見を教育課程検討委員会が再度精査して、全体研修を通して関係部署に報告する。関係部署は、平成 26 年度内にその意見を検討して行事の課題解決に努めるとともに平成 27 年度には改善させるものとする。なお、平成 26 年度内に改善可能なものについては改善を進めるものとする。

（３）研究推進計画

平成 25 年 8 月 16 日	第 1 回教育課程検討委員会：計画内容確認
平成 25 年 9 月 27 日	第 2 回教育課程検討委員会：アンケート結果考察、 ワーキンググループ分け（3 班）
平成 25 年 10 月 25 日	全体研修（研究中間報告会）：中間報告 ワーキンググループ討議数回
平成 25 年 12 月 20 日	第 3 回教育課程検討委員会：ワーキンググループ中間報告 ワーキンググループ討議数回
平成 26 年 2 月 4 日	第 4 回教育課程検討委員会：ワーキンググループ報告のまとめ
平成 26 年 2 月 14 日	全体研修（研究報告会）：最終報告

2 研究のまとめ

ワーキンググループ（WG）は①「学年主任グループ」、②「学科長グループ」、③「その他のグループ（教頭・教務主任・寮務主任）」の3班である。担当は、下記のとおりである。

- ① 学年主任 WG：「見学旅行」「宿泊研修」「遠足」「社会見学」
- ② 学科長 WG：「マラソン大会」「生徒会役員選挙」「作業強化日」「現場実習」
- ③ その他の WG：「体育祭」「フレンドリーライブ」「学校祭」「卒業式」「その他の意見」

学年主任 WG は1回、学科長 WG は4回、その他の WG は5回それぞれ開催した。以下にそれぞれのポイントを絞ったまとめを挙げ、関係部署への報告とする。詳しくは、後頁に参考資料を掲載しているため、ご確認願いたい。

（1）学年主任 WG：「見学旅行」「宿泊研修」「遠足」「社会見学」

① 「見学旅行」

5月第3週が最も望ましい。また、4泊5日の日程が必要である。

② 「宿泊研修」

2学期に個別実習を行うことを考えると、1学期しか日程がとれない。よって7月実施が望ましいと考える。自然体験的な旅行行事は1年次に行う。見学旅行との系統性を深く持たせ、以下のように2泊3日・函館方面で行うことを提案する。

1日目：大学（教育大学？）で行われているビジネスマナー・就活に関する講座のようなものに出席させてもらう or すてっぷの職員から同様の講義を受ける or 会社見学先の会社の採用・人事担当者から同様の講義を受ける。のち、函館山にて記念撮影、研修センター一泊。

2日目：社員教育がしっかりなされている企業見学。竹田食品、布目、北海道乳業、道新などを見学し、望ましい職業観・勤労観を体得させる。そして、湯ノ川のホテルに一泊。

3日目：自主研修。五稜郭、元町、教会、バイエリアなど。見学旅行自主研修と同様に計画させる。

③ 「遠足」

目的は「自然体験」と「仲間との交流・親睦」に絞る。1日日程で、5月中～下旬、美利河で行う（今金町市街地は生単の「今金町を知ろう」単元の町調べで探索しているため）。名称は、「ピリカアウトドア20XX」に変更する。内容は、まずダムやピリカ遺跡の見学。昼はクアプラザか旧美利河小学校敷地において野外炊飯。午後はそこでパークゴルフや生徒企画のレクなどを行うというもの。今金の自然も満喫し、仲間との絆も深める内容。下線部を年度・生徒によって変えるのみとし、他の旅程は定番化する。

④ 「社会見学」

卒業生が落ち着きはじめる8月下旬～9月上旬に、職場体験と社会見学を融合させた形で社会見学として実施したい。これに伴い、1年の作業強化日（例年8月末実施）と現場実習（例年9月上旬実施）を社会見学後にずらしてほしい。

※進路指導部から現場実習を遅らせることについて意見あり

(2) 学科長 WG : 「マラソン大会」「生徒会役員選挙」「作業強化日」「現場実習」

① 「マラソン大会」

マラソン大会は体力づくりの成果を出すことができる行事であり、体力づくりの意欲にもつながるものであると考えることから、行った方がよい。学校から近いせたな町の水仙ロードレースを全員参加にしてマラソン大会の代替えも考えられるが、日曜開催なので参加できない生徒も出てくる。また、寄宿舎との連携、修学旅行に日程が近い、1 学年は体力づくりを始めて間もない時期など問題が多くあり困難だと思われる。

コースについては、市街地にすると交通量も多く信号もあることから、監視者の人数を増やさなければならないことが考えられる。今年度以上に監視者を増やすことは難しいと思われるため、現状のコースで行うのがよいと考える。

現状の各学校行事、各学年の現場実習の時期を考えると時期の変更は難しい。今後も同時期に行う。

② 「生徒会役員選挙」

現行の日程を変更する。変更によってその時の生徒会の任期が長くなるが、前年の前期生徒総会で選挙時期の変更を伝える。学校祭後から12月中旬までの期間であれば可能。さらに、この時期に変更すると学校祭の運営を3年生が行えるという利点もある。

③ 「作業強化日」

生徒自身が本当に必要だと思い、取り組みたいと思えるような指導を行う。また、進路の話と合わせたり、作業目的を明確に伝えたりと個別の課題の改善を目指す指導を行う。1・2年冬は1年間のまとめのテストと位置付けて、働きぶりをしっかり評価し、生徒に返すとよい。自学科の作業だけではなく社会奉仕や校外作業など地域の題材を生かすことも大切である。

④ 「現場実習」

目的をマトリックスの観点で系統立てれば、ある程度明確な方向性も見えてくるのではないか。その目的をもとにして進路・学年でこれまでの生単の現場実習単元の中身を見直し、人生設計の学習も取り入れるか検討する。

2年の現場実習の時期を変更するとしても他の行事との調整がある。仮に変更した場合、9月下旬～、10月上旬にする生単の年間計画や後期の個別実習の対応がどうなるのか。現場実習の時期をこの時期にずらし、その後個別実習を入れるとその後の日程が過密になる。それに伴って後期の個別実習をなくすと進路決定に遅れが出てくる。また、個別実習までそれほど期間がないため、課題が見つかっていても課題を意識して解決するまでの時間がない。そのため、現状で行うのが望ましいという見解に至った。

(3) その他の WG : 「体育祭」「フレンドリーライブ」「学校祭」「卒業式」「その他の意見」

① 「体育祭」

学年種目は、学年ごとに必ず使用する備品を設定するなどして準備の軽減化を図る。生徒の自主的な取り組みを促すためにも種目内容を一緒に計画する等、生徒の参加、取り組みを進める。「水泳授業(体育)」「体力づくり」「歩くスキー(体育)」の成果の場として、それぞれ「水泳大会」、「マラソン大会」「ピリカ歩くスキー大会」があるように「体育・体力づくり」の成果の場としての「体育祭」を目的でも押さえる。生徒に協調性や協力性を身につけさせるように現状の取組を推進する。

② 「フレンドリーライブ」

「交流及び共同学習」の目的や必要性を別紙からしっかりと捉える。その上で、本行事は本校にとって数少ない交流事業のひとつであり、開校時から続いていることを鑑みて実施内容や課題については検討・改善を行い継続すべきである。

フレンドリーライブと学校祭はその内容性や生徒の意識付け等を勘案すると連続日が望ましい。校内的には、学校祭と合わせ金土の日程も考えうるが対外的には土日もやむを得ない。しかし、開催時期の移動は、今中・北高の都合確認が必須であり、両校にはこちらから参加依頼をしていることから参加しやすいように配慮が必要である。もし、変更となれば学校祭にも影響するため、学芸部との連携が求められる。

③ 「学校祭」

学校祭は、日頃の学習の総合的な成果を発揮する一つの重要な特別活動として、内容を検討しながら発展させる。

学年劇は負担面が問題視されているが、「学年劇」を行う教育上の意味を別紙からしっかり考える必要がある。負担だから他の出し物と考えがちだが小学校・中学校で培った経験を伸ばす必要もある。また、衣装や道具の作成、生產品プリントなど、日頃の作業学習等の経験やスキルを生かし、生徒が主体的に取り組む機会を設ける。寄宿舎職員も関わることでできるような取り組みや場面を考える。

④ 「卒業式」

特になし。職員会議の決定内容のとおり実施する。

⑤ 「その他の意見」

委員会活動の内容を精選して確認を進める。

国語・数学の担当者間で連携・確認を進める。

3 成果と課題

まずは、本プロジェクト研究のためのアンケート協力に感謝を申し上げます。本校では、行事後に反省をしっかりと行い次年度に向け改善を図っているが、行事のマンネリ化や生徒の障がい特性の変化もあり、本来の目的とずれが生じてきている。そこで、このキャリア教育の視点を通して教育課程（行事）の見直しを図ることになった。各行事の問題点や改善点はあがったが、行事の廃止という意見はあまりあがらなかった。このことから本校の行事の精選はある程度進んでいることが伺える。しかし、その行事の目的をキャリア教育の視点を通して我々も再認識することにより、新たにその行事を計画する姿勢になり、その行事を更に発展させ生徒が目的達成のために主体的に取り組む行事となりうると確信している。

最後に、本校の行事反省では、その行事の気付いたところ、失敗したところの記述が多く、成果をしっかり評価して次年度の展望をまとめ切れていないものを見かける。平成 26 年度内に本研究の報告を参考にキャリア教育の視点から各行事の課題解決に努めるとともに平成 27 年度には改善させうることを期待する。

4 参考資料

- (1) キャリア教育の視点を通した「教育課程（行事）の見直し」に係るアンケートのまとめ
- (2) 学年主任 WG：アンケートに対する見解のまとめ
- (3) 学科長 WG：「現場実習」「作業強化日」「生徒会役員選挙」「マラソン大会」のまとめ
- (4) その他の WG：キャリアの視点から「劇」、「交流教育」を考察する

(1) キャリア教育の視点を通した「教育課程（行事）の見直し」に係るアンケート まとめ

1. 入学式

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

なし

- それはどのように改善したらよいと思いますか？

集計数 25 (舎2)

- 1. シンプルに

2. 見学旅行

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

- 1. 目的、日数の割には事後学習が薄い
- 2. 服装は、生徒にも考えさせる機会を持ったほうがよい
- 3. 社会見学・宿泊研修との系統性が見えない
- 4. 事前・事後学習期間の少なさ、目的と目標を意識した旅程か
- 5. 日程が長いように感じます
- 6. 卒業後の生活を見据えた3年生なので、卒業後に5日間も休んで旅行に行けるか疑問もある。地域的な理由もあり5日間設定だとは思いますが・・・。
- 7. (全国的な調査結果があるかどうか分からないが) いわゆる、テーマパーク（ディズニーランド等）に必ず入園していると聞いている。

- それはどのように改善したらよいと思いますか？

- 1. 3泊4日で良い、単元計画をしっかり立てる
- 2. 生単の中でTPOを考えさせるような授業展開をしていく
- 3. 日程・目標・社会見学・宿泊研修との系統性等の整理をし、それに沿った旅程の検討（行先・泊数等）をする
- 4. 事前・事後学習計画（HR・生単）と旅行時期の両方の見直しをする
- 5. 3泊4日にし、生徒の回復休暇に充てると良いと思う。
- 6. 3泊4日か4泊5日かと言われれば3泊4日が一般的な気がします。便や利便性を考えた空港選びも必要かと思っています。
- 7. 修学旅行で行く理由がないから「行かない」となったら、内外からの圧力に耐えられないので、改善しないほうが良い。でも、修学旅行で取り入れる必要はないと考えるのであるが・・・。

3. 体育祭

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

- 1. 親があまり来ない。生徒が主体的に取り組む場が少ない
- 2. もう少し、生徒が係活動に関する方が実態に合っていると思う。
- 3. 1年のみ生単で単元化しているが今や必要だろうか？特別に何かいつもやっていない競技の練習をしなければならない（その準備する教師も大変）
- 4. 金曜開催の是非が出ている
- 5. 学年種目：毎年趣向を凝らして見ている方は楽しみな反面、担当の負担増になっています。
- 6. 毎日体育祭の活動で本番までに生徒が疲れてしまうこと。
- 7. 事前学習期間に勉強がない。

- それはどのように改善したらよいと思いますか？

- 1. 土曜や日曜に関係するなど。生徒がアイデアや意見を出して取り入れられる内容や場面を増やす
- 2. 特別日課で係活動を組み込んでいく
- 3. 普段体育や体力づくりでやっている成果を発揮したり、学年一丸となって取り組むといったねらいで内容を検討できないか？
- 4. 春の体育のスポーツテストをコンパクトにできれば体育祭前にもう少し多くのスポーツができると思うが
- 5. 開催時期検討（保護者に聞くなど）
- 6. そもそも中身が変われば全校レクのような規模になって保護者は呼ばなくなる？

7. 学年種目を固定制にしてみてもいいでしょうか？
8. 長期化して通常の日課もした方がいいと思います。
9. 体育祭への練習と作業学習の両立をねらっての時間割とすべきと思う。

4. 宿泊研修

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？
 1. 目的、時期が問題の意見3件、先生たちがすごく頑張っている、2学年の1学期はとても忙しい
 2. 社会見学・見学旅行との系統性が見えてこない
 3. 社会見学の要素を入れてみてはどうでしょうか？
 4. 研修先のマンネリ化
 5. 遊園地等に行く理由は何なのか？と思う。研修や見学なのだから、遊びに直結するのはいいか？
- それはどのように改善したらよいと思いますか？
 1. 体験活動をメインに、宿泊先も要検討、2年生は1学期に現場実習、体育祭、宿泊研修と多忙である、宿泊研修は2学期が良い、時期の見直し、もっと生徒達に任せて失敗もよい経験ととらえられる指導をする。
 2. 内容の整備・事後学習の充実
 3. 自然体験・野外活動内容での学習であれば社会見学や遠足でまかなえないか？ビジネスマナーなど他にも研修すべきことはたくさんあると思うが
 4. 3年次は進路に集中するためか、2年次に見学旅行に行く学校もある（美深）
 5. 1日目の日程に組み入れてみる。※そうすると宿泊地や見学方面の選定が大変かもしれません。
 6. 新たな研修先の確保
 7. 社会見学や見聞を広めるための内容にする。宿泊先の近隣で見学できる施設や体験可能なものに限るようにすると良いのでは？

5. 遠足（1学年）

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？
 1. どうしてもクラス単位になってしまう場面が多い。目的・内容が年によってバラバラ。
 2. 炊事要素を取り入れてみてはどうでしょうか？
 3. 今金町にある自然を満喫させる。例えば、美利河までバスで行って美利河から奥美利河まで歩いて着いたら焼肉など。
 4. バスで行くと遠足ではないということから、今金町内で行っていますが、生単の今金町を知らうで今金町内を歩いているので計画する方も難しいです。
- それはどのように改善したらよいと思いますか？
 1. 無しでもよいのでは、他学級との交流を意識的にすすめる
 2. 今金を知る、クラスで初めて取り組む行事というねらいを持って、歩いて行く遠足コースを定番化してよいのでは
 3. 早く実施したいところだが、虫の発生時期も無視できない。5月下旬～6月上旬
 4. 調理学習前の実態把握にもつながると思います。
 5. 単元の中で組み込めるのであれば、組み込んだり、遠足の必要性を考え直してもいいかと思います。

6. 生徒会役員選挙

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？
 1. 立候補者が少ない。人気投票になっている。
 2. 選挙期間と投票日の間に夏休みがある。こうした形の行事は他にはない。間延びしていないだろうか。
 3. 立候補者が最近少ない
- それはどのように改善したらよいと思いますか？
 1. 事前の説明や働きかけなど立候補者の動機や公約を先に発表し、概ね知れわたってから写真の発表にしてみるなど。
 2. 2～3週間内に告示～開票までをやってしまうとよいのでは。それはいつできるかは、他の行事の都合によって設定していいと思う。
 3. 生徒自身が学校をよりよくしていくという意識を持たせるような声かけをしていく。

7. マラソン大会

- 具体的にどういう点に課題があると思いますか？
 1. 距離。多少の無理や限界を押して長い距離に挑戦することも大切
 2. マラソンコースの安全性
 3. 3年生の現場実習期間に重なってしまうので、少しかわいそうだと思います。

4. 緊急事態に対応できない人員数と環境。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 3km はいらない、10 km 、7 km、 5km でよい、1 学年と体調不良者以外は、3km にエントリーできないように
2. 体力づくりでも 3km は走っているのだから 3km をなくして 5km,7km,10km にした方がよい。
3. 町との連携を深めて、もう少し市街地を走るコースというのはできないか（町の人との交流が少ないので）
4. 道路整備を徹底してもらう
5. 時期を変更できるのであれば、変更してもらいたいです。
6. 即刻、やめるべきだと考える。遠い距離にチャレンジさせるなら、学担・学年・保護者を交えてロードレース等に参加させて代替とする。3 Km 程度のレースは対象としない。（体力づくりで走れる距離であるから）

8. 社会見学

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 見学箇所が学年裁量になっている
2. 学習効果やねらいが明確に設定されていないため、見学先もばらつきが大きい。
3. 事前学習を単元化するかが学年任せ、進路の職場見学と目的や内容が重なる年がある
4. 2 学年の 1 学期に組み込むと多忙になりました。
5. 職場見学とのすみ分け。また、行事と生単とのすみ分け。
6. 遠方に行くような風潮になっている。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. ある程度絞ってあればよい
2. 進路や生活単元学習につなげられるように計画する
3. 宿研中に社会見学に行くという形はなぜなくなった？
4. 宿泊研修と一緒に行うのはどうでしょうか。
5. 検討が必要だと思います。また、中途半端であれば、なくてもいいかと・・・。
6. 地元優先の見学先にする。（いたずらに函館近郊とする理由がわからない）

9. フレント'リーライブ'

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 年々、充実した内容になってきたが交流教育とまではいかないと感じる
2. 形式的であり、交流教育としての要素が薄い。本校のみに負担が大きい、他校の交流意欲が疑われる
3. 交流活動がもっとあればよいと思います。
4. 今中・檜山北高との交流を維持していく必要がある。
5. 活動場所が限られる。
6. 今中、北高生との温度差があるように見えます。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 席を自由にするとかちょっとした工夫を増してみる
2. 互いにとってどういった教育的メリットがあるのかを関係学校間で整理すべき。よりねらいを持った系統性があり、継続的な交流計画を関係校全てで作るとよい
3. 楽器あてクイズや楽器に触れる経験、うまく歌えるマル秘テクニックや作詞作曲で即興で曲をつくる。
4. 新たな交流先を探す。
5. 年に一度ではなく、複数回の継続的な交流が必要だと思います。

10. 学校祭

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 常連様以外の新規のお客さんをお呼びすることを考えると具体的な課題が見えてくるのでは
2. 特別日課・練習・在舎期間の長さに生徒がイライラして耐えられない。（舎）
3. 生徒の負担を考慮すると日曜日実施よりも土曜日実施が望ましいと思います。（舎）
4. 日程が慌ただしい（当日）、内容を難しいことをやっていないか？（舞台発表は特に）

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 学校祭を日曜実施から土曜実施にしたらどうか(舎)
2. 以前のようにフレンドリーライブを学校祭と切り離して日程を組んではどうか？(舎)
3. 学習の成果を発表する機会と考えればいろいろな内容が考えられる。

11. 卒業証書授与式

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 一般就労者も増え特別日課の日数が足りないのでは
2. 学年や担当の意見で物事がかわること

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 必要に応じて弾力的に日課変更を行う
2. 担当する生徒を思うからこそそのこととは思うが、それに周囲が振り回されるようでは毎年トラブルが尽きない。教務がもっと主導権を持って良いと思う。
3. 職員会議で決裁された内容で実施することを全員で確認すればよい。

12. 現場実習

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 自分の将来、自分の今を考えたときにこの行事がどう結びついているのか本当はわかっていない生徒が多い

- ① 2年の時期が早い、他の行事とのからみがある
- ② 実習先の大人の実態がよろしくないケースが多い
- ③ 日誌・評価・項目・評価表・学習帳等重要な部分が学年一任に近い格好

2. 各学年、時期・内容の位置付け

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. もう少し人生設計などを学習し、自分の生活や必要な活動・計画などを考える活動をしてはどうか
- ① 他の行事と時期を調整する。実習期間を見直す（期間が長いのが今金の特徴だが今後もそれでいいのか？生徒の実態や雇用、社会情勢をふまえて今一度考えてもよいのでは）。
- ② 実習先の検討。少なくとも学校で行っている「あいさつ」のある所へ
- ③ 実習先・卒業生の就労先の意見もききつつ、キャリア（マトリックス）の視点をふまえ、進路としての押さえ（指針）をつくってほしい。（細かい部分は学年としても）
2. 1年：1回目、実態把握、2回目、2年現場実習の選別検査
2年：1回目、現場、2回目、3年現場実習の選別検査

13. 作業強化日

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 生徒たちにとって「やらされている感」が強いと思う
2. 1年夏は実習の事前的意味があるが、他は意味がうすい。製品づくりの都合という感が強い。
3. 学年によっては独自に期間を設けているところもある
4. 1日だけでは体験だけで改善につながらないと思います。（1年生作業強化日）
5. 自学科の作業で追い込まずに社会奉仕や校外での作業をさせる理由。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 生徒自身が本当に必要だと思い、取り組みたいと思えるような指導ができること
2. 1・2年冬は1年間のまとめのテストと位置付けて、働きぶりをしっかり評価し、生徒に返してやると良いと思う。
3. 2年夏は、後期現場実習から個別実習になったことで気の緩む生徒もいる中で行うということを踏まえて、あり方ややり方を考えると良いのでは。課題別校内実習日を毎週一日は設けるなどすれば、進路選択への意識が継続しないか。
4. 3学年トータルで見直してみてもよい、現場実習とも連動するだろうが。
5. 数日（3日以上）設定で、体験・経験・失敗したことを1つでも改善できるように。
6. 社会に出ると毎日、同じ仕事が待っているのが一般的なので、同じ作業を3日間続けさせてほしい。

14. 教育課程全般についてご意見・ご要望があればお書きください

1. 生単と各教科の関連やつながりが見えやすいものになっていればよい。
2. 舎の行事も見直しを並行して行う必要はないのか。
3. 委員会の数・種類・内容・目的・時数、週時程に入れていることの必要性など全体的な見直し。
4. 国数は本当に力がついて生活や仕事に役立っているか検証していない。
5. 一部の教諭の負担が大きいように感じる。偏りがなくなるような配置。
6. とにかく行事ややらなきゃいけないことに追われているという日程で慌ただしい。その行事の存在する意味を全て見つめ直し、他の行事や学習活動でカバーできるものであったら行事数は削減して良いと考える。生徒の実態は変わってきているが、日々の教師の指導がそれに追いついていない。実態に即さなくなってきたかもしれない行事に関する業務に追われていることもその一因ではないか。
7. もし、行事が多いのであれば遠足と社会見学は結合できるかもしれない。

平成25年度 教育課程検討委員会 学年主任 WG アンケートに対する見解のまとめ

田中、矢倉、金子

検討に先立って、まず本校の学校教育計画「学校行事」で、見学旅行等の行事がどのように押さえられているのかを見た（学習指導要領も見た）。

学校教育計画 p10「学校行事」

A) 旅行・集団宿泊的行事

平素と異なる生活環境において見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての理解を深め、望ましい態度を育てる

B) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや意識を理解し、働くことや創造することの喜びを体得し、社会奉仕の精神を養うとともに、望ましい職業間や進路選択についての理解を深める

働く様子を見に行くことで学習効果をねらう社会見学（あるいは宿泊研修、あるいは見学旅行）にするのであれば、上記Bの要素も入ってくる。
すると「職場見学」「施設見学」と重なるのではないか。

※職場見学

目標：2年生の実習先を見学することによって、仕事の内容や先輩の働く様子を知ると共に、自らの進路や現場実習に対する意欲を持たせる

内容：2年生実習先の見学（1年生生徒の実態と2・3年の実習先を見て決定するが長万部方面で検討）

※施設見学

目標：卒業生や3年生の実習先を見学することによって、仕事の内容や先輩の働く様子を知ると共に、自らの進路選択や現場実習に対する意欲を持たせる

内容：江差あすなろ学園関連施設（グループホーム含む）

この2行事は、学校行事の計画には組み込まれておらず（学校行事実施計画（基本案）には載っている）、学年と進路指導部共同で提案されているという、他に類を見ない独特の行事といえる。これもきちんと位置づけられていないといけないのではないか。

以上を踏まえ、まず旅行・集団宿泊的行事（勤労生産・奉仕的行事の要素を盛り込んだものも含む）というものは、マトリックスのどの指導観点・指導の柱に基づいて目的や内容を計画し、実施されるべきなのかを考えた。そのまとめが『本校の旅行・集団宿泊的行事とマトリックスとの関連について（重点的に関連する部分）』である。

そして、アンケートより出された意見に対して、見解をまとめていった。そのまとめが『マトリックスと関連させた本校の旅行・集団宿泊的行事の目的・内容・目標の在り方について』である。

（1）見学旅行について

平成25年度の目的（局提出・ねらい）

・公共の場を利用することで、社会生活に必要なルールやマナーを身につける ・集団の中の自己の役割を自覚し、仲間と協調しながら責任を持って活動をする

平成25年度の特徴（局提出・内容の特徴）

・日本の首都である東京を中心に見学および活動することによって見聞を広める ・文化的施設の見学や自主研修を通して日本および諸外国の文化や歴史について理解を深める

平成25年度の内容

・4泊5日、ホテル2箇所に宿泊 ・スカイツリー、上野動物園、お台場自主研修、浅草、ディズニーシーとランド

	課 題	改 善 策	学年主任 WG の見解
①	目的、日数の割には事後学習が薄い	3泊4日で良い、単元計画をしっかり立てる	・年間行事予定を見ると、5月第3週が最も望ましい。そのため4月のHRから事前学習を始めるなど工夫をし、事前・事後の時数を確保する必要があると考える。 ・地理的条件から、初日と最終日は移動中心になってしまう（きまりとして新千歳からは行き来できない、新幹線が開通しても飛行機の方が早く生徒への負担も少ない）。よって4泊5日の日程が必要。 ・3年次の1学期に実施する。先進校は2年次のようだが、急な変更は混乱を招くほか、宿泊研修との系統性も構築するため意味ある旅行とする。 ・余談だが、2年次にする、3泊4日にするといった場合、保護者に理解を得るための説明も必要となる。それができるかどうか。
②	日程が長いように感じます	3泊4日にし、生徒の回復休暇に充てると良いと思う。	
③	事前・事後学習期間の少なさ、目的と目標を意識した旅程か	事前・事後学習計画（HR・生単）と旅行時期の両方の見直しをする	
④	卒業後の生活を見据えた3年生なので、卒業後に5日間も休んで旅行に行けるか疑問もある。地域的な理由もあり5日間設定だと思いますが・・・。	3泊4日か4泊5日かと言われれば3泊4日が一般的な気がします。便や利便性を考えた空港選びも必要かと思います	
⑤	社会見学・宿泊研修との系統性が見えない	日程・目標・社会見学・宿泊研修との系統性等の整理をし、それに沿った旅程の検討（行先・泊数等）をする	
⑥	（全国的な調査結果があるかどうかかわからないが）いわゆる、テーマパーク（ディズニーランド等）に必ず入園していると聞いている。	修学旅行で行く理由がないから「行かない」となったら、内外からの圧力に耐えられないので、改善しないほうが良い。でも、修学旅行で取り入れる必要はないと考えるのであるが・・・。	
⑦	服装は、生徒にも考えさせる機会を持ったほうがよい	生単の中でTP0を考えさせるような授業展開をしていく	

（２）宿泊研修について

平成25年度の目的（局提出・ねらい）

- ・見学や体験学習を通して、生活体験や社会体験を豊かにする
- ・公共施設の利用を通して、社会生活のルールやマナーを身につける
- ・自分の役割に責任を持ち、主体的に活動するとともに、仲間と共に活動する喜びを味わう

平成25年度の特徴（局提出・内容の特徴）

- ・自然に親しみながら集団行動や野外炊飯を経験し、日常の学習の積み重ねの成果を生徒が発揮できるようにするとともに、施設の利用を通して公衆道徳を身につけられるようにする。また、それらの経験を通して、将来の自立に向けての意識を高められるよう配慮した。

平成25年度の内容

- ・2泊3日、ネパール洞爺に1泊、ルスツリゾートホテルに1泊
- ・野外活動（登山、野外炊飯、キャンプファイヤー、いかだ体験）バードコール制作、室内レク（雨天）、さくらんぼ狩り、火山科学館見学、ルスツ遊園地学級活動

	課 題	改 善 策	学年主任 WG の見解
①	時期が問題 2学年の1学期はとても忙しい	時期の見直し。2年生は1学期に現場実習、体育祭、宿泊研修と多忙である、宿泊研修は2学期が良い。3年次は進路に集中するためか、2年次に見学旅行に行く学校もある（美深）	・2学期に個別実習と考えると、1学期しかない。よって7月実施が望ましいと考える。 ・ネパール洞爺が閉館＋研修先として行ける範囲はニセコまで。羊蹄・森ともにたいした野外活動メニューがない。よって、自然体験的な旅行行事は1学年次に行うとして、見学旅行との系統性を深く持たせ、
②	目的が問題 先生たちがすごく頑張って終わっている	もっと生徒達に任せて失敗もよい経験ととらえられる指導をする。	
③	社会見学・見学旅行との系統性が見えてこない	内容の整備・事後学習の充実。	

④	社会見学の要素を入れてみてはどうか 研修先のマンネリ化	・ 1 日目の日程に組み入れてみる。(そうすると宿泊地や見学方面の選定が大変かもしれません。) ・ 体験活動をメインに、宿泊先も要検討。 ・ 新たな研修先の確保。 ・ 自然体験・野外活動内容での学習であれば社会見学や遠足でまかなえないか？ビジネスマナーなど他にも研修すべきことはたくさんあると思う	従来型から脱却した宿泊研修を以下提案する。 ・ 2泊3日、函館方面で行う。 ・ 1 日目：大学（教育大学？）で行われているビジネスマナー・就活に関する講座のようなものに出席させてもらう or すてっぷの職員から同様の講義を受ける or 会社見学先の会社の採用・人事担当者から同様の講義を受ける。のち、函館山にて記念撮影。のち、研修センター一泊。 ・ 2 日目：会社見学。前日の講義で話されたようなことがしっかりなされている会社（例えば竹田食品、布目、北海道乳業、道新などの大企業、社員教育がしっかりなされている企業）を見学し、望ましい職業観・勤労観を体得させる。そして湯ノ川のホテルに一泊。 ・ 3 日目：自主研修。五稜郭、元町、教会、ベイエリアなど。先述の見学旅行自主研修と同様に仕掛けを用意し、計画させる。地元の生徒が先導することになるだろうが、東京自主研修の予定としては妥当かと。2～3 時頃に集合し学校へ戻る。
⑤	遊園地等に行く理由は何なのか？と思う。研修や見学なのだから、遊びに直結するのはいかがか？	社会見学や見聞を広めるための内容にする。宿泊先の近隣で見学できる施設や体験可能なものに限るようにすると良いのでは？	

（３）社会見学について

平成25年度の目的（職員会議資料より）

- ・ 社会施設を見学することとおして、新しい見聞や知識を広げる
- ・ 公共機関を利用する時のマナーを学ぶ
- ・ 集団で行動することとおして、個々の行動に責任を持つ

平成25年度の内容

- ・ 木曜日、全日かけて実施、近郊の見学のため昼食の際に一旦学校へ戻り給食を食べて再出発
- ・ せたな町：立象山展望台、ジェイウィンドサービス（風力発電）の見学 + 今金町：今金浄化センター（下水処理施設）の見学

	課 題	改 善 策	学年主任 WG の見解
①	2 学年の 1 学期に組み込むと多忙になった。宿研中に行くという形はなぜなくなった？	宿泊研修と一緒に行うのでしょうか。	・ 職場見学は進路の行事として、5 月、2 年生の実習を見るために行われている。しかし、実習段階の 2 年生を見るより、給料をもらって立派に働いている卒業生を見せた方がよい動機付けにできるのではないかと考える。 ・ よって、卒業生が落ち着きはじめる 8 月下旬～9 月上旬に、社会見学として実施したい（つまり職場見学と社会見学を融合させる）。 ・ これに伴い、1 年の作業強化日（例年 8 月末実施）と現場実習（例年 9 月上旬実施）を社会見学後にずらしてほしい。
②	職場見学とのすみ分け。また、行事と生単とのすみ分け。	検討が必要だと思います。また、中途半端であれば、なくてもいいかと・・・。	
③	見学箇所が学年裁量になっている。学習効果やねらいが明確に設定されていないため、見学先もばらつきが大きい。 事前学習を單元化するかが学年任せ、進路の職場見学と目的や内容が重なる年がある	ある程度絞ってあればよい 進路や生単につなげられるように計画する	・ 1 日日程で、今金近郊にて行う。給食のため一時帰校もあり。 ・ 今金近郊（せたな、八雲、長万部あたり）の一般企業、福祉サービス事業所でしっかり働いている卒業生の様子を見せ、働くとはこういうことだというイメージを持たせる。そして、その後の作業強化日、現場実習といった実際の行動へとつなげていく。進路指導部との連携が必須。 ・ 單元として起こした方がよい。現場実習單元とするか、別單元とするかは検討が必要。
④	遠方に行くような風潮になっている。	地元優先の見学先にする。（いたずらに函館近郊とする理由がわからない）	

(4) 遠足について

平成25年度の目的（職員会議資料より）

- ・仲間と協力し、助け合う気持ちや自発的に活動する力を養う
- ・野外活動を通じ、地域の自然に触れる楽しさを体感する
- ・集団行動や公衆道徳の必要性を知る

平成25年度の内容

- ・木曜日、全日かけて実施
- ・町内ウォークラリー（各学級）、パークゴルフ、昼食は注文弁当

	課 題	改 善 策	学年主任 WG の見解
①	目的がはっきりしていない。どうしてもクラス単位になってしまう場面が多い。目的・内容が年によってバラバラ。	無しでもよいのでは、他学級との交流を意識的にすすめる 今金を知る、クラスで初めて取り組む行事というねらいを持って、歩いて行く遠足コースを定番化してよいのでは	・ 目的は「自然体験」と「仲間との交流・親睦」に絞る。
②	炊事要素を取り入れてみてはどうでしょうか？	調理学習前の実態把握にもつながると思う。 今金町にある自然を満喫させる。例えば、美利河までバスで行って美利河から奥美利河まで歩いて着いたら焼肉など。	・ 1日日程で、5月中～下旬（おそらく虫は大丈夫）、美利河で行う（今金町内は生単の「今金町を知ろう」単元の町調べで歩き回っている）。 ・ 行きは町のバス、帰りは函館バスとする。そのため厳密な“遠足”ではない。よって行事名を「ピリカアウトドア20XX」に変更する。 ・ 生単「今金町を知ろう」単元の中にこの行事の事前・事後を含める。 ・ 内容は、まずダムやピリカ遺跡の見学。昼はクアプラザか旧美利河小学校敷地において野外炊飯。午後はそこでパークゴルフや生徒企画のレクなどを行うというもの。今金の自然も満喫し、仲間との絆も深める内容。下線部を年度・生徒によって変えるのみとし、他の旅程は定番化する。
③	バスで行く遠足ではないということから、今金町内で行っていますが、生単の今金町を知ろうで今金町内を歩いているので計画する方も難しいです	単元の中で組み込めるのであれば、組み込んだり、遠足の必要性を考え直してもいいかと思います。	
④		早く実施したいところだが、虫の発生時期も無視できない。5月下旬～6月上旬	

(5) 本校の旅行・集団宿泊的行事とマトリックスとの関連について（重点的に関連する部分）

指導観点	指導の柱	1年次段階（ピリカアウトドア・社会見学） ～学びを通して気づく・知る～	2年次段階（宿泊研修・施設見学） ～将来を意識し、自ら学ぶ・行動する～	3年次段階（見学旅行） ～将来を見据え、自ら学ぶ・行動する～
職業	職業理解	・身のまわりのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる	・自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育てる	・職業生活の中にやりがいや生き甲斐を見出し、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる
知識・技術	社会のしくみなどの知識・技術	・集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる	・社会のルール、マナー、礼儀などを、状況に応じて使うことができる生徒を育てる	・社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身につけ、社会の一員として生活できる力を育てる
応用力	人間関係	・集団活動に参加し、他者と協力することができる力を育む	・集団活動において自分が果たす役割を理解し、周りと協力することができる力を育む	・集団の一員として自ら役割を理解し、協力していくとともに、その役割を遂行していく力を育む

	情報活用	・学校・寄宿舎・地域社会の中には様々な活動があることを、体験を通じて理解できるよう指導する	・自ら興味のある活動や職業等に関して、様々な情報を収集し、自ら活用できる力を育成する	・希望する進路の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報収集・取捨選択し、自ら判断して活用できる力を育成する
感性	感受性	・事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む		・事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む

※ 他にも「自己内省」「コミュニケーション」「意思決定」などが考えられるが、日常的に意識的に指導していることと考え、敢えて重点には含めなかった。

（６）マトリックスと関連させた本校の旅行・集団宿泊の行事の目的・内容・目標の在り方について（案）

	1年・ピリカアウトドア	1年・社会見学	2年・宿泊研修	3年・見学旅行
目 的	①施設の見学や野外活動を通して、地域の歴史や文化、自然に触れ、理解を深めるとともに、その魅力を体感する（体感させる）。 ②仲間とともに活動し、その楽しさを味わうとともに、集団行動や公衆道徳を学ぶ（学ばせる）。	①卒業生の働く様子を見学し、話を聞くことで、自らの見聞や知識を広め、進路や将来の生活に対するイメージを持つ（持たせる）。 ②集団行動を通して、ルールやマナー、礼儀といった基礎的な姿勢・態度を身につける（身につけさせる）。	①見学や体験を通して、社会生活に必要なルールやマナーを学び、進路選択に対する意欲を高める。 ②自己の役割に責任を持ち、仲間と協力しながら主体的に活動する姿勢・態度を身につける。	①見学や体験を通して、社会生活を豊かにする知識と教養を身につけ、将来の生活に対する意欲を高める。 ②集団の中の自己の役割を自覚し、仲間と協調し責任を持って行動する姿勢・態度と公衆道徳を身につける。
特 色			①今金町では経験することのできない都市部における見学・研修・体験活動を通して、豊かな知識と情操、公衆道徳を身につけさせ、社会人・職業人となることへの意欲を高める。 ②自主研修をはじめとした集団行動を通して、考えて行動する、仲間と助け合う、集団行動のルールやマナーを守る、健康・安全を意識するといった、社会人として必要な望ましい態度を育てる。	①北海道では経験することのできない首都圏における日本の政治・経済・文化に触れることによって、広い知見と豊かな情操を育成し、社会人・職業人となることへの意欲を高める。 ②自主研修をはじめとした集団行動を通して、自ら判断し行動する、協力する、集団行動のルールやマナーを守る、健康・安全・公衆道徳を意識するといった、社会人として必要な望ましい態度を身につけさせる。
旅行先	今金町美利河地区	今金町およびその近郊（せたな・八雲・長万部等）	函館方面	東京・千葉・横浜等の首都圏
旅行時期・期間	5月下旬・1日	8月下旬～9月上旬・1日	7月・2泊3日	5月第3週・4泊5日

備 考	・右3行事とは系統性を持たない ・旧「遠足」にあたる行事 ・生単「今金町を知ろう」単元内の1行事として位置づける ・往路は町のバス、復路は函バスで移動	・従来の「職場見学」と統合 ・この行事後に「作業強化日」と「現場実習」が行われるように調整が必要 ・業者には依頼せず、進路指導部と連携し行き先を決定する ・全旅程貸切バスで移動	・進路「施設見学（実際はあすなる学園関連施設のみの見学）」との関連も考慮した上で実施する ・業者に依頼する ・全旅程貸切バスで移動	・これまでの旅行・集団宿泊の行事の集大成として実施する ・業者に依頼する
活動内容とそのねらい（目標）	午前 ・美利河ダム・ピリカ遺跡見学 昼食 ・クアプラか旧美利河小で野外炊飯 午後 ・パークゴルフや生徒企画のレク いずれの目標も目的①②と同じ。	午前 ・卒業生就職先見学（一般就労） 目標は目的①と同じ。一般就労の現場の厳しさや魅力を体感させる。 昼食 ・一旦帰校し給食 午後 ・卒業生就労先見学（福祉的就労） 目標は目的②と同じ。福祉的就労の現場の様子や魅力を体感させる。 ※午前と午後は逆でも可 ※昼食は給食以外（外食）でも可 ※一般就労と福祉的就労の違いについて、見学・事前・事後学習を通じて学ばせる（優劣をつけるような学びにはしないよう注意する）	1日目 ・講義形式の研修 職業生活・社会生活に関する専門的見知を持つ方からの講義を受けることによって、将来に向けて必要な心構えや知識を学ばせる。 ・函館山（記念撮影） 都会の大きさを視覚的に体感させることで、社会の一員としての自分について考えさせる。 2日目 ・会社見学 社員教育の行き届いた企業の様子、従業員の働く姿勢を見学することで、働くことについて現実的に考えさせるほか、望ましい公衆道徳を身につけさせる。 3日目 ・自主研修（生徒に計画させる際、モデルコースを示す、歴史・情報・科学等の分野を選ばせ通過点を設けるなど、勉強させるような仕掛けをつくる） 移動手段や見学先などを決めさせる事前学習を通して、協調性、時間やお金の使い方、計画を立てることの必要性を学ばせる。当日は計画した活動をやり遂げさせることで、集団行動、臨機応変な対応、ルール・マナー・礼儀等を体験的に学ばせつつ、自信を持たせる。	1日目・5日目 ・移動（貸切バス・航空機） 2日目 ・首都機能を学ぶ メディア等でよく目にする首都の中核（政治・経済）や観光地を見学することを通して、日本の中心的機能が集積している場所であることやその大きさを体感的に学ばせる。 3日目 ・一日自主研修（生徒に計画させる際、モデルコースを示す、歴史・情報・科学等の分野を選ばせ通過点を設けるなど、勉強させるような仕掛けをつくる） 目標は宿泊研修の自主研修と同じ。宿泊研修の経験を生かして、成功できるよう仲間とともに努力させる。 4日目 ・一日テーマパーク 日本で最も有名なテーマパークのアトラクションやサービスを体験することを通して、仲間と仲良く楽しむほか、人を楽しませるサービスの在り方や、人を喜ばせるために働くといったことについて考えさせる。
※ 「目的」「特色」「旅行先」「旅行時期・期間」は固定化する。「活動内容とそのねらい（目標）」の大筋は固定化し、細かい中身についてはその学年生徒の実態に応じて工夫する。 ※ ピリカアウトドアと社会見学の「目的」「特色」の欄が統合されているが、これは“職員会議における実施計画”に「目的」として記載するもの（教育局への計画書提出は不要）。 ※ 宿泊研修と見学旅行の「目的」と「特色」は、“職員会議における実施計画”と“教育局に提出する計画書”に記載するもの（同一とする）。				

学科長 WG

岩城、小原、佐々木

(1) マラソン大会 担当分掌：保健体育部

I 目的をマトリックスの観点と照らし合わせると…

①保健体育や体力づくりで鍛えた体力・精神力を発揮して、全力で競技に挑む態度を身につける。

心と体：心身の健康 自己内省：物事に対する意欲

②競技中の体調の変化への対処や安全にコースを走る知識や態度を実践的に身につける。

応用力？

II アンケートから

★どのような課題？

- 1 距離。多少の無理や限界を押して長い距離に挑戦することも大切
- 2 マラソンコースの安全性
- 3 3年生の現場実習期間に重なってしまうので、少しかわいそうだと思います。
- 4 緊急事態に対応できない人数と環境

☆それはどのように改善したらよい？

- 1 3 kmはいらない。1 0 km、7 km、5 kmでよい。1 学年と体調不良者以外は、3 kmにエントリーできないように
- 2 体力づくりでも3 kmは走っているので3 kmをなくして5 , 7 , 1 0 kmにした方がよい。

保体部反省より

生徒の病気の面で3 kmは必要、監視者人数の面で1 5 kmは行えない。3,5,7,10 kmは可能だが設定が細かいので選択に迷いそうである。このことにより来年度は3,5,10 kmの現状維持で行いたい。

⇒3,5,10 kmで行う。

- 3 町との連携を深めて、もう少し市街地を走るコースというのはできないか(町の人との交流が少ないので)
⇒市街地をコースにすると交通量も多く信号もあることから、監視者の人数を増やさなければならないことが考えられる。
今年度以上に監視者を増やすことは難しいと思われるので現状のコースで行うのがよいと考える。
- 4 道路整理を徹底してもらう
⇒道路を管理する所に依頼する？ マラソン大会前にコースのゴミ・石拾いなどを行うとよいかも。
交通整理のことであれば…
保体部反省より…警察からの応援は今年度は1 名だけ。来年度は分からない。交通安全指導員など配置場所を来年度再考する。
⇒安全面を考えると交通安全指導員、本校監視者の配置場所と役割を保体部で検討し事前の打ち合わせを綿密に行う必要があると考える。
- 5 時期を変更できるのであれば、変更してもらいたいです。
⇒現状の各学校行事、各学年の現場実習の時期を考えると時期の変更は難しい。来年度も1 0 月中旬から下旬の時期に行う。3 学年の現場実習と近い時期に行うという問題は、3 学年に対応を検討してもらう。
- 6 即刻、やめるべきだと考える。遠い距離にチャレンジさせるなら、学担・学年・保護者を交えてロードレース等に参加させて代替とする。3 km程度のレースは対象としない。(体力づくりで走れる距離であるから)
⇒マラソン大会は体力づくりの成果を出すことができる行事であり、体力づくりの意欲にもつながるものであると考えることから、行った方がよい。学校行事＝全員参加なので、ロードレース参加となると土日に開催されるものがほとんどであることから、参加できない生徒が出てくると思われる。
⇒学校から近いせたな町の水仙ロードレースを全員参加にしてマラソン大会の代替えも考えられるが、日曜開催なので参加できない生徒も出てくる、寄宿舎との連携、修学旅行に日程が近い、1 学年は体力づくりを始めて間もない時期など問題が多くあり無理だと思われる。

III 今後の検討

目的の…①は、そのまま。

②は、キャリアの観点で照らし合わせると合致する項目がみあたらないので②の文言を変える。

(2) 生徒会役員選挙 担当分掌：生徒指導部

I 目的をマトリックスの観点と照らし合わせると…

生徒会役員に立候補したり、立候補者の主張を聞いて投票するという活動を通して生徒会や選挙への関心を高める。

知識・技術：社会の仕組み、自己理解：他者からの評価の受容

II アンケートから

☆それはどのように改善したらよい？

- 1 立候補者が少ない。人気投票になっている。事前の説明や働きかけなど立候補者の動機や公約を先に発表し、概ね知れ渡ってから写真の発表にしてみるなど。

立候補者が最近少ない。生徒自身が学校をよりよくしていくという意識を持たせるような声かけをしていく。

⇒全校集会や生徒総会で生徒会の活動内容を周知する機会を増やす。活動内容を増やす(行事の運営から取り組ませる等)

2 選挙期間と投票日の間に夏休みがある。こうした形の行事は他にはない。間延びしていないだろうか

2～3週間内に告示～投票までをやってしまうとよいのでは。それがいつできるかは、他の行事の都合によって設定していいと思う。

⇒現行の日程は各学年の現場実習のない時期。変更するとその時の生徒会の任期が長くなるがよいのか…(前期生徒総会で選挙時期の変更を伝える)。学校祭後から12月中旬までの期間であれば可能。この時期に変更すると学校祭の運営を3年生が行えるという利点もある。

Ⅲ 今後の検討

・目標をマトリックスに合わせ変更。応用力：意思決定を入れる。

↓

選挙に立候補することを通して他者から受けた評価を受け入れる気持ちを育む。

(自己理解：他者からの評価の受容)

立候補者の主張を聞いたり投票活動を通して、選挙のルールやマナーを身につける。

(知識・技術：社会の仕組み)

自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うことができる力を育む。

(応用力：意思決定)

(3) 作業強化日 担当分掌：作業部会

Ⅰ 作業強化日の大目標をマトリックスの指導観点に照らし合わせると…

<1> 現場実習の模擬学習として働くことへの意欲を高める。

【自己内省：物事に対する意欲】

<2> 長時間の作業に取り組むことにより、自分の課題を解決させる。

【自己内省：課題を解決しようとする心】

<3> 課題の解決に向けて、目標をもって働き続けることの大切さを体得させる。

【自己内省：課題を解決しようとする心】

以上のように、作業強化日の目標はマトリックスが示す「自己内省」の観点にすべてが該当した。このことから、これまでの作業強化日の目標は「自己内省」を重視していると言える。この事をふまえ、マトリックスの学年段階の文言と照らし合わせ、強化日の目標を学年ごとに系統立ててみた。

○1 学年 (案)

<1> 働くために必要な力(※)を理解し、働くことへの意欲をもたせる。

<2> 長時間の作業に取り組むことにより、自分の課題(※)に気付き、解決しようとする意識を持たせる。

<3> 目標を持って働き続ける大切さについて、他者の意見も受け入れながら自分の気持ちや考えを整理する力を育てる。

○2 学年 (案)

<1> 働くために必要な力(※)を整理し、働くことへの意欲を高める。

<2> 自分の課題(※)について、自己決定・自己反省を繰り返してきた中で解決する姿勢を育てる。

<3> 目標を持って働き続ける大切さについて、自分の気持ちや考えをまとめ、実行しようとする姿勢を育てる。

※については、自己内省の観点の中身から実態に応じたものを設定する。(集中力、積極性、素直さ、自主性、持続力等)

Ⅱ アンケートから

どのような課題があるか?…★ どのように改善したらよいか?…→ WGの見解…⇒

生徒のモチベーションに関する課題

★生徒たちにとって「やらされている感」が強いと思う。

→生徒自身が本当に必要だと思い、取り組みたいと思えるような指導を行う。

⇒進路の話と絡めたり、作業目的を明確に伝えたり、個別の課題の改善を目指すような指導を行う。

※生単の進路の学習と連動するとさらに効果的に生徒に伝わるが、時期的に難しく、調整が必要な学年もある。

時期や日数に関する課題

★学年によっては独自に期間を設けているところもある。

★1日だけでは体験だけで、改善につながらないと思います。(1年生作業強化日)

→3学年トータルで見直してもよいのかも。現場実習とも連動するだろうが。

→日数(3日以上)設定で、体験・経験・失敗したことを1つでも改善できるように。

→社会に出ると毎日同じ仕事が残っているのが一般的なので、同じ作業を3日間続けさせてほしいです。

⇒1日だけでは課題を解決することが難しいという意見を受け、今年度は作業目標の一部を変えている。

⇒日数的に変更は厳しい。もし変更を考えるなら、生単の単元計画、学校行事の見直しが必要。また、そうした変更を行う必要があるかという検討も必要となる。

作業の内容や目的に関する課題

★1年夏は実習の事前的意味があるが、他は意味が薄い。製品づくりの都合という感が強い。

★自学科の作業で追い込まずに社会奉仕や校外での作業をさせる理由。

→1・2年冬は1年間のまとめのテストと位置付けて、働きぶりをしっかり評価し、生徒に返してやるといいと思う。

→2年夏は、後期現場実習から個別実習になったことで、気が緩む生徒もいる中で行うという事をふまえて、あり方ややり方を考えると良いのでは。課題別校内実習を毎週1日は設けるなどすれば、進路選択への意識が継続しないか。

⇒夏と冬の作業内容と目的をもう一度、部会内や担当学年内で確認したのち、生徒にわかりやすく伝える。

※現在の作業強化日の各学年の目標は大別すると、夏が現状把握と実習への意欲づけ、冬が総まとめ的な意味合いが強いといえる。例えば、①このまま生徒に伝えとか、②2年冬は販売会に向けての製品確保の時期として生徒に伝える方法が考えられる。

⇒冬の作業内容に関しては総まとめという内容を前面に押し出して、テスト的な内容を取り入れてもよい。

(例えば、平成24年度の1学年は授業の参観を行い、参観者からいただいた評価を生徒に伝えた。)

⇒課題別校内実習は、同じ課題や目標、進路を目指す生徒をグルーピングすることで、生徒間での競い合いや自学科で追えない課題のある生徒への指導、ターゲットを絞った指導が期待できる。

⇒自学科には自学科の、校外作業や他の作業にも良いところがある。何を生徒に伝えるかが重要である。生徒の多くが次第に進路に意識が向いていくような題材設定が求められる。

※他にもこのような課題が挙げられる…

□目標の観点が【自己内省】のみである。

※例えば現場実習とリンクさせ、【応用力】や【知識・技術】、【自己理解】、【職業】に関する目標を付け加えてみてよいのではないかと。

□(2)と(3)は【自己内省：課題を解決しようとする心】に当てはまるため、1つの文章にしてもよい。

Ⅲ 今後の検討の流れ

目的をマトリックスの観点で見直す。

↓

目的から・・・作業強化日の位置づけ、時期、期間、事前事後学習、評価の在り方を検討する。

(4) 現場実習 担当分掌：進路指導部

I 目的(職員会議の要項)をマトリックスの観点に照らし合わせると・・・

〈1学年〉

①校内での学習効果を確かめるとともに。課題や問題点を把握する。

「自己内省：課題解決」

②経験領域の拡大を図る。

「応用力：情報活用」

③社会生活の初歩的な理解(職場の雰囲気・人間関係・作業時間・一定の労働時間等)や社会生活の決まりを理解させる。

「知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術」

④働くことの大切さや厳しさに気づかせる。

⑤自分に適正や課題を自覚させ卒業後の進路について関心を持たせる。

「自己理解：長所課題の理解」

〈2学年〉

①自分の能力・適性や課題を自覚し、卒業後の進路について関心を高める。

「自己理解：長所課題の理解」「職業：職業理解」

②職業生活や社会生活の決まりを理解する。

「知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術」

③経験領域を拡大する。

「応用力：情報活用」

〈3学年〉

①作業や福祉サービス事業所に本人の適正等を理解してもらい、卒業後の進路先としての可否について判断していただく。

②職業生活への適正能力を身につけ、卒業後の社会生活への移行に結びつける。

「知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術」

このことから、これまでの現場実習は・・・

「知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術」

「応用力：情報活用」

「自己理解：長所課題の理解」を重視した行事であることがわかる。

よってこの3点を現場実習の系統立てた目的とする。

目的（案）

〈1 学年〉

- ①知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術
現場実習をととして、社会のルール・マナー・礼儀などを意識して行動させる。
- ②応用力：情報活用
学校・寄宿舎・地域社会の中には様々な活動があることを、体験を通じて理解させる。
- ③自己理解：長所課題の理解
自分の長所や課題に気づかせる。

〈2 学年〉

- ①知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術
社会のルール・マナー・礼儀などを状況に応じて使わせる。
- ②応用力：情報活用
自らの興味のある活動や職業に関して、様々な情報を収集し、活用させる。
- ③自己理解：長所課題の理解
自分の長所や課題を受け入れるとともに、自己肯定感を持たせる。

〈3 学年〉

- ①知識・技術：社会の仕組みなどの知識・技術
社会人として必要なルール・マナー・礼儀を身につけさせる。
- ②応用力：情報活用
希望する進路の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報を収集し、自ら判断して活用できる力をつけさせる。
- ③自己理解：長所課題の理解
自分の長所や課題を踏まえて、自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、自分らしさを持たせる。

Ⅱ アンケートから

★どのような課題？またどのように改善したら良いか？

- ・自分の将来、自分の今を考えたときにこの行事がどう結びついているのか本当はわかっていない生徒が多い。
→もう少し人生設計などを学習し、自分の生活や必要な活動・計画などを考える活動をしてはどうか。
- 目的をマトリックスの観点で系統立てれば、ある程度明確な方向性も見えてくるのではないか。その目的をもとにして進路・学年でこれまでの生単の現場実習単元の中身を見直し、人生設計の学習も取り入れるか検討する。

現状のままで時数確保が厳しいようであれば・・・

- ・生単の他の単元の学習を削り、人生設計の時間を確保するか？
- ・実習期間を短くして時間を確保すべきか？
- ・生単の「進路」の学習の中に入れるか？
- ・事前事後学習特別日課を作り対応するか？また、人生設計の学習自体をどうするか？必要か？検討する。

① 2 年の実習時期が早い、他の行事との絡みがある。

→他の行事と時期を調整する。実習期間を見直す。期間が長いのが今金の特徴だが今後もそれでいいのか？生徒の実態や雇用、社会情勢を踏まえて、今一度考えてもよいのでは。目的の再考とともに実習期間と時期に関して、適切かどうか検討する。事前事後学習の時間の確保も含めて学年の意見をもらいつつ、進路が中心となって検討。ちなみに、もし2年の現場実習の時期をずらすとしたら・・・

- 5月：現在行っている。
- 6月：体育祭があり準備や特別日課が入るため無理。
- 7月：宿泊研修があるため無理。
- 8月：夏休み明けすぐの対応になるので事前指導が十分できない。また、水泳記録会・生徒会役員選挙がある。この後すぐに3年現場実習がある。
- 9月：1年現場実習の時期を避け、尚かつ秋祭りはかからないようにしなくてはいけないことを考えると下旬になるが・・・
- 10月：上旬に保護者懇談週間がある。保護者懇談の時期を一週遅らせられれば9月下旬～10月上旬の実習は可能と思われる。それ以降は、マラソン大会・学校見学会があり無理。
- 11月：学校祭の準備と特別日課が入るため無理。
- 12月：農家は農閑期。

上記の事から仮に、9月下旬～10月上旬にすると・・・

- ・2年作業強化日の目的も変わってくる。
- ・生単の年間計画も大幅に見直す必要がある。
- ・後期の個別実習の対応がどうなるか。現場実習の時期をこの時期にずらし、例年どおり後期に個別実習を入れると2学年の日程が過密になる。かといって後期の個別実習をなくすと進路決定に遅れが出てくる。
- ・この時期に変更すると、その後の個別実習までそれほど期間がないため、課題が見つかったも課題を意識して解決するまでの時間がない。それでは、2学年の目的（案）の③にそぐわなくなるのではないか。
- ・これらのことは、期間を短くしても変わらない。

- ② 実習先の大人の実態がよろしくないケースが多い。
→実習先の検討。少なくとも学校で言っている「あいさつ」がある所へ。
具体的な企業は記載なし。こちらから依頼している関係上、企業側に求めることはできないと思われる。地域柄、実習先も限られているため、実習をさせていただけるだけで良しと考えるか・・・そういう実習先をさるか（きれるか）・・・。進路にて検討。一番は、実習の目的を理解しつつ受け入れてくれる企業だと、本来の目的を十分に達成できるだろうが、すべてを望むのは現実では厳しいと考える。そのため、指導者側でいかに生徒に実習の位置づけを意識づけさせられるかが大事になっている。
- ③ 日誌・評価・項目・評価表・学習帳など重要な部分が学年一任に近い格好。
→実習先・卒業生の就労先の意見も聞きつつ、キャリア（マトリックス）の視点も踏まえ、進路としての押さえ（指針）をつくってほしい。（細かい部分は学年としても）
→目的をマトリックスの観点で系統立てる。その目的をもとにして進路・学年でこれまでの日誌や学習帳の中身を点検・確認を行う。人生設計の学習をどうするかも含めて検討。

Ⅲ 今後の検討の流れ

目的をマトリックスの観点で見直す（（案）を原案として）。



目的をもとに

- ①実習の期間と時期
- ②事前事後学習（学習帳・日誌）の中身（人生設計の時間について含む）
- ③評価

これらを総合的に検討する。それに伴い、生単の年間計画の検討も必要になる。

Ⅳ 参考までに

H25の実習時期と期間

- 1年：9月 3日（火）～11日（水）実働7日間
- 2年：5月20日（月）～30日（木）実働9日間、後期個別実習
- 3年：一般就労前提7週間、福祉的就労・施設2～3週間

時期・期間について、これまでの経緯

平成21年まで2年生は、前期後期にそれぞれ今金町内で9日間ずつ行っていたが、教育課程検討委員会にて見直され、平成22年から2年現場実習は、前期のみにして後期は進路に直結させるための個別実習を必要に応じて行うこととした。それによって進路を早めに決定できるように配慮した。（都市部の高等養護学校に後れを取らないための対策でもある。）

その他のWG

教頭、中島、東海林

(1)「体育祭」 担当分掌：保健体育部

●目的（職員会議資料より）

- ①日頃の体育活動や体力づくりの成果を発揮する。
- ②競技ルールを理解し、仲間と一緒に行動する楽しさを知る。
- ③集団行動を通して仲間意識を高め、協力する態度を養う。

●キャリアの観点（マトリックスより）

指導観点	指導の中身（解説）	指導の柱	備考
①心とからだ	応用力・体力	心身の健康	
②応用力	協力	人間関係	
③感性	表現力	表現力	（よさこい）

●課題（アンケート結果から）

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 親があまり来ない。生徒が主体的に取り組む場が少ない
2. もう少し、生徒が係活動に関する方が実態に合っていると思う。
3. 1年のみ生単で単元化しているが今や必要だろうか？特別に何かいつもやっていない競技の練習をしなければならない（その準備する教師も大変）
4. 金曜開催の是非が出ている
5. 学年種目：毎年趣向を凝らして見ていて見る方は楽しみな反面、担当の負担増になっています。
6. 毎日体育祭の活動で本番までに生徒が疲れてしまうこと。
7. 事前学習期間に勉強がない。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 土曜や日曜に関係するなど、生徒がアイディアや意見を出して取り入れられる内容や場面を増やす
2. 特別日課で係活動を組み込んでいく
3. 普段体育や体力づくりでやっている成果を発揮したり、学年一丸となって取り組むといったねらいで内容を検討できないか？
4. 春の体育のスポーツテストをコンパクトにできれば体育祭前にもう少し多くのスポーツができると思うが
5. 開催時期検討（保護者に聞くなど）
6. そもそも中身が変われば全校レクのような規模になって保護者は呼ばなくなる？
7. 学年種目を固定制にしてみてもどうでしょうか？
8. 長期化して通常の日課もした方がいいと思います。
9. 体育祭への練習と作業学習の両立をねらっての時間割とすべきと思う。

●まとめ

- ・「通常の教育活動＋体育祭」として特別日課を長期化する。
- ・学年種目は、学年ごとに必ず使用する備品を設定するなどして準備の軽減化を図る。
- ・生徒の自主的な取り組みを促すためにも種目内容を一緒に計画する等、生徒の参加取り組みを進める。
- ・「水泳授業（体育）」「体力づくり」「歩くスキー（体育）」の成果の場として、それぞれ「水泳大会」、「マラソン大会」「ピリカ歩くスキー大会」があるように「体育・体力づくり」の成果の場として「体育祭」を目的でも押さえる。
- ・生徒に協調性や協力性を身につけさせるように現状の取組を推進する。

※土曜開催について

- ・メリット：父母の参加のしやすさ、デメリット：生徒の疲労等 が考えられる。検討は進めるべきだが、寄宿舎（勤務等）やPTAの意見も確認すべきである（PTA役員会、学校評価等で）。

(2)「フレンドリーライブ」 担当分掌：教務部

●目的（職員会議資料より）

- ① 近隣の学校と音楽分野で交流する。
- ② 他の学校や団体の演奏や合唱を聴いたり、歌ったりして音楽を楽しむ。

●キャリアの観点（マトリックスより）

指導観点	指導の中身（解説）	指導の柱	備考
①感性	感受性	感受性	
②コミュニケーション	表現力	表現力	

●課題（アンケート結果から）

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 年々、充実した内容になってきたが交流教育とまではいかないと感じる
2. 形式的であり、交流教育としての要素が薄い。本校のみに負担が大きい、他校の交流意欲が疑われる
3. 交流活動がもっとあればよいと思います。
4. 今中・檜山北高との交流を維持していく必要がある。
5. 活動場所が限られる。
6. 今中、北高生との温度差があるように見えます。

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 席を自由にするとかちょっとした工夫を増してみる
2. 互いにとってどういった教育的メリットがあるのかを関係学校間で整理すべき。よりねらいを持った系統性があり、継続的な交流計画を関係校全てで作るとよい
3. 楽器あてクイズや楽器に触れる経験、うまく歌えるマル秘テクニックや作詞作曲で即興で曲をつくる。
4. 新たな交流先を探す。
5. 年に一度ではなく、複数回の継続的な交流が必要だと思います。

●まとめ

- ・「交流教育」の目的や必要性を別紙からしっかりと捉える。その上で本行事は本校にとって数少ない交流事業のひとつであり、開校時から続いていることを鑑みて実施内容や課題については検討・改善を行い継続すべきである。
- ・フレンドリーライブと学校祭はその内容性や生徒の意識付け等を勘案すると連続日が望ましい。
- ・校内的には学校祭と合わせ金土の日程も考えるが対外的には土日もやむを得ない。しかし、開催時期の移動は、今中・北高の都合の確認が必須であり、両校にはこちらから参加依頼をしていることから参加しやすいように配慮が必要である。もし、移動となれば学校祭にも影響するため、学芸部との連携を進める。
- ・継続的には難しいが新たな交流先として町内の音楽サークル等もお誘いする。
- ・本校独自に「芸術鑑賞」に取り組むとは費用的に難しいが、他校との交流も踏まえて近隣の学校で機会があれば参加を進める。

(3)「学校祭」 担当分掌：学芸部

●目的（職員会議資料より）

- ・生産品販売や舞台発表などへの取り組みを通して、学習の成果を確認するとともに、学習意欲の向上を図る。
- ・保護者や地域の人々との交流を深めるとともに、本校の学習活動に対する理解・啓発を図る。

●キャリアの観点（マトリックスより）

指導観点	指導の中身（解説）	指導の柱	備考
①職業	全項目	全項目	
②自己内省	自主性、積極性	両項目	
③コミュニケーション	協調性	相手を受け入れ、・・・	

●課題（アンケート結果から）

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 常連様以外の新規のお客さんを呼ぶことを考えると具体的な課題が見えてくるのでは
2. 特別日課・練習・在舎期間の長さに生徒がイライラして耐えられない。(舎)
3. 生徒の負担を考慮すると日曜日実施よりも土曜日実施が望ましいと思います。(舎)
4. 日程が慌ただしい(当日)、内容を難しいことをやっていないか？(舞台発表は特に)

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 学校祭を日曜実施から土曜実施にしたらどうか(舎)
2. 以前のようにフレンドリーライブを学校祭と切り離して日程を組んではどうか？(舎)
3. 学習の成果を発表する機会と考えればいろいろな内容が考えられる。

●まとめ

- ・土曜日開催は、フレンドリーライブと一緒に考える必要がある。
- ・学校祭は、日頃の学習の総合的な成果を発揮する一つの重要な特別活動として、内容を検討しながら発展させる。
- ・学年劇は負担面が問題視されているが、「学年劇」を行う教育上の意味を別紙からしっかりと考える必要がある。負担だから他の出し物と考えがちだが小学校・中学校で培った経験を伸ばす必要もある。また、衣装や道具の作成、生産品プリントなど、日頃の作業学習等の経験やスキルを活かし、生徒が主体的に取り組む機会を設ける。
- ・寄宿舎職員も関わることでできるような取組みや場面を考える。

(4)「卒業式」 担当分掌：教務部

●目的（職員会議資料より）

厳粛で清新な雰囲気の中で、卒業生は

- ・卒業の喜びを印象深く味わう。
- ・社会人の仲間入りをすることへの自覚や卒業後の生活への自覚を高める。
- ・保護者や地域の人々への感謝の気持ちを持つ。

在校生は、

- ・卒業証書授与式の意義を理解し、卒業生への祝福の気持ちを持つ。

●キャリアの観点（マトリックスより）

指導観点	指導の中身（解説）	指導の柱	備考
①自己内省	感謝の心	物事に対する意欲	
②職業	責任感、自立心	職業理解	
③知識・技術	礼儀	社会の仕組み	
④応用力	判断力・計画性	将来設計	

●課題（アンケート結果から）

○ 具体的にどういう点に課題があると思いますか？

1. 一般就労者も増え特別日課の日数が足りないのでは
2. 学年や担当の意見で物事がかわること

○ それはどのように改善したらよいと思いますか？

1. 必要に応じて弾力的に日課変更を行う
2. 担当する生徒を思うからこそそのこととは思うが、それに周囲が振り回されるようでは毎年トラブルが尽きない。教務がもっと主導権を持って良いと思う。
3. 職員会議で決裁された内容で実施することを全員で確認すればよい。

●まとめ

- ・職員会議の決定内容のとおり実施する。

(5) その他

●課題（アンケート結果から）

○ 教育課程全般についてご意見・ご要望があればお書きください

1. 生単と各教科の関連やつながりが見えやすいものになっていればよい。
2. 舎の行事も見直しを並行して行う必要はないのか。
3. 委員会の数・種類・内容・目的・時数、週時程に入れていることの必要性など全体的な見直し。
4. 国数は本当に力がついて生活や仕事に役立っているか検証していない。
5. 一部の教諭の負担が大きいように感じる。偏りがなくなるような配置。
6. とにかく行事ややらなきゃいけないことに追われているという日程で慌ただしい。その行事の存在する意味を全て見つめ直し、他の行事や学習活動でカバーできるものであったら行事数は削減して良いと考える。生徒の実態は変わってきているが、日々の教師の指導がそれに追いついていない。実態に即さなくなってきたかもしれない行事に関する業務に追われていることもその一因ではないか。
7. もし、行事が多いのであれば遠足と社会見学は結合できるかもしれない。

●まとめ

- ・委員会活動内容を精選して確認を進める。
- ・国語・数学の担当者間で連携・確認を進める。

補足

①「キャリア」の視点から「交流教育」を考察する

障害のある子どもが地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きる上で、障害のない子どもとの交流及び共同学習を通して**相互理解を図る**ことが重要となっています。また、交流及び共同学習は、小・中学校等の子どもたちや地域の人たちが、障害のある子どもとその教育に対する**正しい理解と認識を深める**ための絶好の機会でもあります。

国総研マトリックスの4領域から「交流教育」を考察すると

1. 「人間関係形成能力」：人とかかわり、自己理解・他者理解
発表を通して相手のことを知り、認めあえるような場を設定する。
2. 「人間関係形成能力」：自己理解・他者理解
他校との交流、作品の鑑賞
3. 「人間関係形成能力」：協力・共同
合奏・合唱：練習の成果を精一杯出し、一体感を味わえるようにする。
4. 「人間関係形成能力」：意志表現
見る人に歌詞や楽器がわかるように声の大きさや動きを練習する。
5. 「人間関係形成能力」：挨拶・清潔・身だしなみ、場に応じた言動
発表・見学に応じた服装をする。
6. 「将来設計能力」：生きがい・やりがい
授業や練習の成果を見学者や保護者に聞いてもらう。

が考えられ、本校マトリックスでは、その中から①感性（感受性）②コミュニケーション（表現力・人づきあい）を期待している。

障害のある子どもと障害のない子どもが一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じて**豊かな人間性を育むことを目的**とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする**共同学習の側面がある**ものと考えられます。特に、本校のような地方の学校は交流対象となる学校も限られ交流機会も恵まれているとはいえません。そのような中では、現在行っている「フレンドリーライブ」、「合同花壇整備」、「地域行事参加」は積極的に進めていくべきです。

②「キャリア」の視点から「劇」を考察する

なぜ、学校祭で劇をするのか（演劇教育とは）。**演劇教育**とは、創造と鑑賞の活動をとおして、学習者の人間形成に資そうとする芸術教育の一分野として位置付けられています。その教育効果として、つぎの5点が挙げられています。

第1に、「演劇」を通じて得られる**知識は能動的に獲得される**ことです。

第2に、あるテーマや役を演劇という形で表す過程で、その**対象に対する理解が深くなり**、ある役を演じることで、生徒が自分の演じる人物像をより自分に引き寄せ、共感を持って理解する経験を持つことが可能であることです。

第3に、演劇する空間は小劇場的空間であり、たとえ演じる側が演劇の技術的に全くの素人であったとしても、その微細な動きや表情により**ダイレクトに相手に伝わります**。

第4には、演劇的教育の過程は「生徒同士が協力して取り組む**協同的で相互的な学び**」であるということが挙げられます。

第5には、演劇的な授業そのものが**創造的な学び**であるということです。生徒はその役のメッセージを伝えるために身体表現を試行錯誤します。この過程は受身的な授業にはみられない、オリジナリティが求められる創造的活動であるということです。

このように、学校祭での演劇発表の効果は実は多くの要素を持っているのです。もし、それを何らかの報告会や発表会に置き換えたとき多くの観客は生徒の成長や感動を得ることができるのかも併せて考えましょう。また、本校の学校祭は「演劇発表」と「生產品販売」の二本柱で構成されてきており、多くの来校者に認知され好評を得ているのも事実です。このような要素を鑑みれば今後も演劇を続けるほうが良いと考えます。

第4章

寄宿舎の研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

卒業後を見据えた生活の指導

(2) 研究の目的

今年度は本校の第6次研究、プロジェクト計画である「キャリア教育」の2年目として研究を行っていく。キャリア教育とは、「生徒の実態に応じて労働や就職、就労のみに捉われず、自分でやれることを増やしていこうとする態度、意欲を育み、自らの生き方を主体的に考え進路を適切に選択できる能力、態度を障害の特性や発達段階に応じて育成する教育のこと」である。本研究は校内の研究推進委員会が連絡・調整役となって進められ、寄宿舍も研修に参加し理解を深めながら進めていく。

今年度の寄宿舍研究は、キャリア教育に関する研修会に参加し、職員間の共通理解を図る。また、昨年度の研究で作成された「今養版キャリアプランニングマトリックス（以下『マトリックス』と略す）」を取り入れたソーシャルスキルトレーニングの事例研究を行い、学校教育目標である「豊かな心と健やかな体をつくる生徒」「希望に向かって努力する生徒」「自ら判断し行動する生徒」を目指す。

(3) 研究内容と方法

① キャリア教育の共通理解

- ・学校で行われる全体研修会へ参加し、理解を深める。
- ・長期休業中に研修会を計画し、キャリア教育について共通理解を図る。

② 事例研究

- ・男子棟をAグループ、女子棟をBグループとし、対象生徒を1名抽出する。生徒の個々の実態に応じた課題に対して、どのようなスキルを身につけることが求められ、それに対してどのようにアプローチしていくか考察する。
- ・研究主題は『卒業後を見据えた生活の指導』とし、副題は今養版マトリックスの指導観点を参考に生徒の実態に応じた目標を設定する。
- ・研究期間は1年間とする。

＜推進計画＞ 6月・・対象生徒抽出、グループ協議、研究内容決定、全体発表・協議
 10月・・中間発表、全体協議
 2月・・最終発表

2 事例報告（A グループ）

1 事例対象生徒 A くん

- ・年齢 15 歳
- ・学科学年 生活家庭科 1 年
- ・I Q 57 （田中ビネー式 平成23年5月判定）
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…自閉症、魚鱗癬

2 対象生徒の環境

- ・家族構成、及び家庭環境
父、母、姉の4人家族

3 対象生徒の実態

（1）基本的生活習慣

- ・身辺処理全般において自分で行うことができるが、丁寧さに欠けたり忘れていることがあるため、言葉かけや確認が必要である。
- ・鏡で確認し、身だしなみを整えることが難しい。
- ・自主的にひげをそることや耳掃除をすることが難しい。

（2）社会性

- ・コミュニケーションをとることや、意思伝達を行うことが難しい場面がある。
- ・日課に沿って生活できているが、自分で日課や時間を確認する様子が少なく、周りの動きを見て行動していることが多い。
- ・場面に応じた言葉遣いが難しいときがある。
- ・余暇時間を一人で過ごすことを好み、他生徒と関わりを持つことが少ない。

4 保護者との連携

- ・姉と仲が良く、入学前に洗濯の方法などを教えてもらっている。
- ・自分のことはできるだけ自分で行うようになってほしい。

5 課題の設定及び指導仮説

（1）実態の整理

- ・自分で日課を理解したり時間を確認して行動している様子が見られず、周りを見たり声をかけられて行動することが多い。
- ・興味、関心のあることを優先し、そのときに行うことを忘れるときがある。
- ・身辺処理全般について行うことはできるが、丁寧に行うことが定着していない。

（2）課題の設定

以上の実態からマトリックスの指導観点「心と体」、指導の柱「基本的生活習慣の確立」より「生活リズムを整え、規則正しい生活ができるように指導する」ことを方針とし、部分的に指導観点「知識・技術」、指導の柱「社会の仕組みなどの知識・技術」を取り入れ下記の課題を設定することにした。

『身辺処理能力の向上と基本的生活習慣の確立』

（3）指導仮説

本生徒の様子を見ていると、身辺処理全般において経験不足から丁寧に行うことが難しかったり、

定着していないことが多い。また、時間や日課の理解度が低く、自主的に日課に沿って生活できていない様子も伺える。これまでは、場面に応じた言葉かけや確認をする指導を中心に行ってきたが、その場限りの理解になってしまうことが多く、継続して取り組むまでには至っていなかった。

コミュニケーションの取り方を工夫し、能力に応じたスキルトレーニングを積むことや経験させることによって、課題を解決できると考える。

6 指導内容及び方法

(1) 日課の流れを理解する。

- ・一日の流れがわかるボードを作成し、起床後と下校後に確認できるようにする。
- ・分担区掃除箇所など毎週変更があるものについては、日曜日に本人と確認する。

(2) 身だしなみを整えることができる

- ・着替えの際、気をつける部分がわかるように写真を撮ったものをロッカーに貼り、意識付けを図る。
- ・ひげそり、耳掃除の仕方をイラストや写真を用いて職員と一緒に確認する。
- ・ひげそり、耳掃除を行う曜日を設定し、その日に行うように意識付けを図る。
- ・職員と一緒にいき、徐々に一人でできるように支援を少なくする。

(3) 身の回りの整理整頓を行うことができる。

- ・収納箇所に写真を掲示し、その場所に収納する習慣を身に付けさせる。
- ・衣類など丁寧にたたんだりすることが必要な場合は、職員がそばにつき一緒に行う。

7 指導経過

(1) 日課の流れを理解する。

- ・目につきやすく、いつでも確認できるようにするため、時間と活動内容を表示した札を作成し、ホワイトボードに貼って机に掲示した。また、毎週変更がある分担区掃除の場所については、週の始めに貼り替えることで、いろいろな当番活動があることや、部屋ごとに輪番制であることがわかるようにしてきた（資料1）。
- ・日課表を見て確認する機会が増えたことによって、活動内容を理解し、自分で行動する様子が少しずつ見られてきているが、17:00以降については、余暇活動を優先してしまうことが多く、時間に遅れたり行うことを忘れたりすることがある。
- ・下校後に日課表を確認する習慣が定着するように、言葉かけや確認を繰り返し行うことや、活動内容の表示の仕方を工夫することで、日課の理解が定着するように指導していく。

(2) 身だしなみを整えることができる。

- ・着替え後にシャツがズボンから出ていることが多く、そのようなときは言葉かけをし、鏡で確認して直させる指導を行った。言葉かけだけでは改善している様子がなく、指導の効果は見られないため、整った身だしなみの写真をロッカーに掲示して意識付けを図って行く。
- ・ひげそりについては、入学以前に自分で行っている習慣がない様子だったため、必要な道具と一緒に確認し準備を行った。繰り返し行うことで、一人で準備を行うことができてきた。
- ・鏡を見てひげが伸びているか確認する習慣や、定期的に耳掃除をする習慣が定着しておらず、職員の言葉かけで行うことが多いため、机周りの壁にひげそりと耳掃除を行う日を設定したカレンダーを掲示し、その日に必ず行うように指導を行っている。カレンダーを掲示してから、自分でカレンダーを確認し、行う様子が見られてきている。月・水曜日に設定し行わせているが、今後は毎日自分で確認して行うことができるように指導を行っていく（資料2）。

(3) 身の回りの整理整頓を行うことができる。

- ・特にロッカー内の整理整頓を行うことが難しく、言葉かけや確認がないといろいろな場所に収納してしまう様子があったため、ロッカーやその他の収納場所に写真を掲示し、その場所に片付ける習慣が定着するように指導を行っている。写真を掲示してからは、言葉かけや確認がなくてもその場所に片付けることができるようになってきているが、衣類については、丁寧にたたんで収納することが定着していないため、今後も職員と一緒にいき、徐々に一人でも丁寧にたためるように指導を行っていく（資料3）。

8 結果及び考察

（1）日課の流れを理解する。

机上にホワイトボードで作成した日課表を置くことで、自然と確認する習慣が定着してきており、以前に比べると、時間に遅れたり忘れたりする様子が少なくなってきた。実際、どのくらい日課を理解できているか、簡単な穴埋め問題のプリントを作成して解いてもらった結果、基本的な日課の流れについてはほぼ理解できていることがわかった（資料4）。

掃除時間（17：00）と部屋に戻る時間（21：00）については、それぞれ5分前の時間を記入していた。個別には5分前行動の重要性についての指導はしていなかったが、周りの動きを見ながら時間を確認して行動に移すことができるようになり、5分前行動の意識も少しずつ身につけている様子が見られる。今後も継続した指導を行い、より日課の理解度を高めていくようにする。

（2）身だしなみを整えることができる。

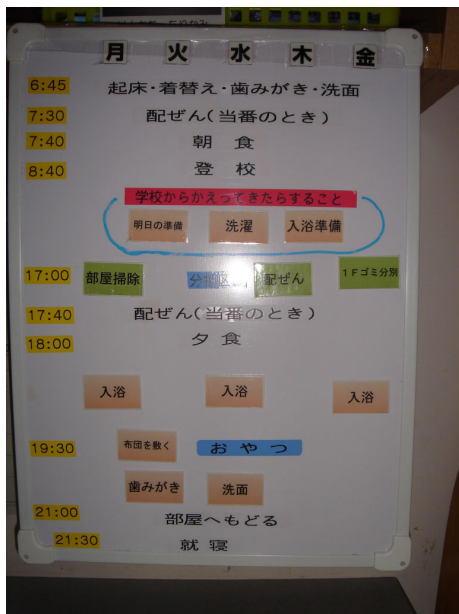
服装については、整った身だしなみの写真を掲示する前に、気をつける所を繰り返し鏡で確認する指導を行った。繰り返し行うことで、自分ができていない所を把握し、意識して着替える様子が見られてきたため、継続して同じ指導を行っている。

ひげそりと耳掃除については、自分で行う習慣が定着していなかったため、初めは職員と一緒にいき、慣れてきたら徐々に一人でやらせるようにした。また、行う曜日を本人と設定し、習慣化できるようにした。経験を積むことで、鏡で確認して行うことや、丁寧にすることが少しずつ定着してきている。また、毎週同じ曜日に行い、終わったらカレンダーにシールを貼ることで、行う日が意識付けされ忘れずにできるようになった。次の段階として、自分で確認してひげそりや耳掃除を行うことができるように設定をしていたが、曜日で行う習慣が定着してしまい、途中で変更することが難しかった。今後は、自分で確認して行うことができるように指導を行っていく。

（3）身の回りの整理整頓を行うことができる。

収納場所に写真を掲示することで、決められた場所へ片付けることは定着しており、職員の言葉かけや確認は必要ない様子である。衣類を丁寧にたたんで収納することについては、トレーナー・Tシャツ・ズボンについて職員と一緒にたたみ方の練習を繰り返しいき、定着できるようにしてきた。その場では丁寧にやる様子が見られているが、時間が経つと忘れてしまったり、丁寧に欠ける様子が見られた。定着するまでには至っていないため、今後は本生徒にとってわかりやすい方法を見つけ、それを基に練習する必要がある。

今回の事例研究は、マトリックスの指導観点を取り入れた指導を行ってきた。基本的生活習慣が確立されていない様子が見られたため、「日課の理解」「身だしなみ」「整理整頓」の3点に絞り、基本的なスキルの習得を目標に本生徒の能力に応じた指導方法を探し取り組んだ。一度定着したことについては継続して行う様子が見られる。しかし、卒業後の生活を考えた場合、習得したことをどのように応用していくかが重要になると考える。今後は、定着したスキルをどのように応用していくかを踏まえた指導を行っていく。



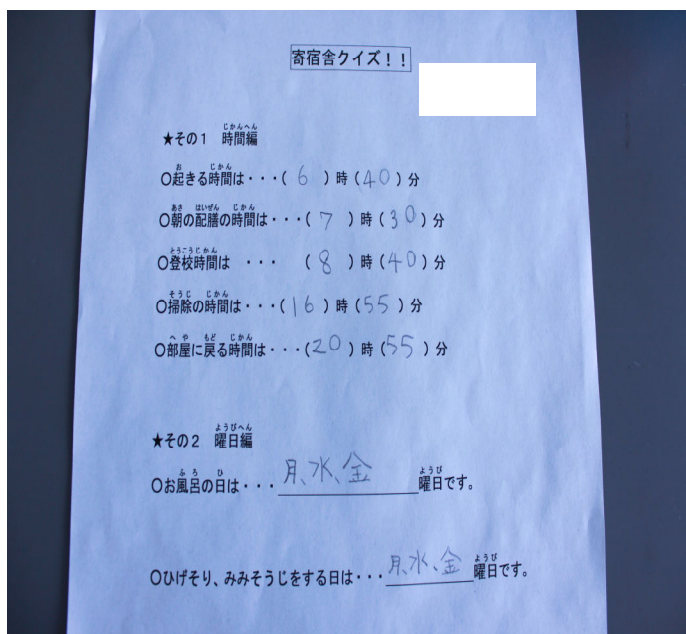
(資料 1)



(資料 2)



(資料 3)



(資料 4)

3 事例報告（Bグループ）

1 事例対象生徒 Bさん

- ・年齢 15歳
- ・学科学年 産業科 1年
- ・IQ 85（日本版 WISC-Ⅲ 平成22年11月判定）
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…情緒障害

2 対象生徒の環境

- ・家族構成、及び家庭環境
母、祖父母、本人の4人家族である。

3 対象生徒の実態

（1）基本的生活習慣

- ・身辺処理については全般的に自分で行うことができる。
- ・食事では好き嫌が多く、野菜を残すことが多い。
- ・清潔に関して意識が薄く、言葉かけを行わないとシャワー浴をしないことがある。
- ・疲れやすく、身体の痛みを訴える傾向にある。
- ・交友関係がほとんどなく、一人で過ごしていることが多い。

（2）社会性

- ・小学生時代から不登校だったことから、社会性において経験不足な面が多い。
- ・コミュニケーション能力に乏しく、他者と関わるのが苦手である。特に、同年代や男性に対しては苦手意識が強い。
- ・小学生時代から他者との関わりが少なかったため、一方的な会話になってしまったり相手の話を最後まで聞けずに拒絶したり反論してしまうことがある。
- ・誰に対しても自分の非を認め、謝罪することが難しい。
- ・時と場に合った敬語を使用することが難しい。

4 保護者との連携

- ・自宅ではほとんど母親と行動を共にしている。
- ・高校入学後は自分の身の回りのことは行うようになった。
- ・母親としては、集団行動を通して色々なことを経験してほしいと考えている。

5 課題の設定及び指導仮説

（1）実態の整理

- ・小学生時代から不登校だったことから、社会性において経験不足な面が多い。
- ・小学生時代に他者との関わりが少なかったため、一方的な会話になってしまったり相手の話を最後まで聞けずに拒絶したり反論してしまうことがある。
- ・誰に対しても自分の非を認め、謝罪することが難しい。

（2）課題の設定

以上の実態からマトリックスの指導観点「自己理解」、指導の柱「長所・課題の理解」より「自分の長所や課題に気付くことができるよう指導する」ことを方針とし、下記の課題を設定することにした。

『よりよい人間関係を築くための指導』

(3) 指導仮説

本生徒は学校生活に不適応を起こしていたために人間関係がうまく構築できず、思っていることをうまく伝えられないことがあったり、相手の感情を理解する力が不足していたりする様子が見受けられる。また、自尊心が高く職員から注意を受けるとすぐに反論しようとして最後まで話が聞けないことがある。そのため、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ自分の長所と課題を知り、自己理解を深めることにより自信を持つことができ、よりよい人間関係の構築ができると考える。

6 指導内容及び方法

(1) 自分の特性を知る。

- ・自分の性格、得意不得意、どうなりたいのか、何が足りないのかなどについてのワークシートに取り組む。
- ・検査や診断を通してデータから自分の特性を読み取る。
- ・職員からの評価を聞き入れ、他者から自分はどのように見られているのか、自分と他者との間のずれに気付く。

(2) 相手の感情を理解する。

- ・あらゆる場面を想定してロールプレイ方式で学習することで、自分の発した言葉から相手がどのように受け取るのかを知り、よりよい伝え方を職員と一緒に考える。

(3) 自分の課題を考える。

- ・卒業後の生活に則して自立した生活を送るためにはどのような力が必要であるのか考えると共に、自己肯定感を高められるような支援をしていく。

7 指導経過

本生徒は小学時代から遅刻・欠席が多く、不登校傾向のまま中学へ入学することになった。中学2年生から言語障害学級に在籍し、職員と1対1で本生徒の状況に合わせた指導ができる環境が整ってから少しずつ登校日数が増えていったという経緯がある。

そのため、今回この指導を進めるにあたっては本生徒の体調や様子を十分に考慮し、慎重に取り組める時間を設定し行ってきた。本校へ入学して3カ月が経過したところで不調を多く訴えることはあったが、学校、寄宿舎の生活にも少しずつ適応していけるようになり、行事や現場実習にも最後まで参加することができていたため、今回の指導を開始した。

(1) 自分の特性を知る。

生活リズムが整い精神的にも安定してきていたため、自分自身についてのワークシート(資料1)を記入させたところ、ほぼ一人で記入することができた。記入したものを室担と振り返ることで自分の課題を受け止め、克服するための方法についても話し合うことができた。

長期休業明けで生活リズムが崩れつつあったが、どうにか寄宿舎の日課には沿って行動することができていた。そこで2枚目のワークシート(資料2)に挑戦したが、表情が固まり何も話さなくなるという状態になった。言葉で伝えなければ相手に伝わらない事、前回のワークシートでこれからチャレンジしたいことの「自分の考えや思いをできるだけ自分で書く」という目標を達成させてみようと言っても顔を隠し、部屋の隅に隠れてしまうため中断した。学校での実習報告会と重なった事も影響してか、欠席が続いている。

今後は本生徒が精神的な重圧とならないような方法で指導していく必要があると考え、記述方式ではなく○×や記号で選択していく方法を取りたい。また、「コミック会話」法などを用いて会話を視覚化してコミュニケーション支援をしていきたいと考える。

(2) 相手の感情を理解する、(3) 自分の課題を考えるについては指導段階に到達していない。

8 結果及び考察

自宅から寄宿舎に戻ってることができず、指導に至らなかった。また、苦手なことから回避しようとする様子が見られ、自分の課題と向き合うことが難しかった。今後は、できるだけ寄宿舎に戻ってきて生活リズムを整え、少しずつ適応していけるよう指導していく。

(資料1)

(資料2)

別紙1		別紙2				
ワークシート No.1 「自分自身について」 ● 自分自身について書き出してみよう。 私の良いところを一言で言うと 好きだから 特技・得意な事 ピアノが上手 今、一番頑張っていること 学校での生活 好きな物を食べる これから直したいと思っていること 生活リズム、正しい物のこくふく なこされてふてくされたりしない おこる これからチャレンジしたいこと 人から 自分きえや思いをできるだけ自分で書く 今までほめられたことを覚えていますか。何と言ってほめられたか3つあげてみましょう。 <table border="1"><tr><td>好きだから</td><td>めんどうみかいい</td><td></td></tr></table> 過去の出来事 ●あなたが影響を受けた出来事 先生に采女ならできるとおこされて入試を対た ●あなたが影響を受けた人との出会い 小学校のよつごり先生 氏名 _____		好きだから	めんどうみかいい		ワークシート No.2 「私の特徴」 1. 私は、に就いて自分の特徴を良いところとダメなところについて書いてください。 ◎良いところ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ ◎ダメなところ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ 私は、 _____ 2. 私についてまとめてみよう。どんな人？ 氏名 _____	
好きだから	めんどうみかいい					

4 成果と課題

キャリア教育の共通理解については、勤務の関係上、全職員が学校の全体研修に参加することは難しかったが、研修会の資料や記録をもとに個々で理解を深めることができた。また、夏季休業中には昨年度の研究報告と今年度以降の研究について学校研修部の先生より説明をしていただき、冬季休業中にはキャリア教育学習会へ参加することで、共通認識のもと取り組むことができた。

事例研究では、日々の指導をマトリックスに照らし合わせ、抽出生徒へのアプローチの仕方を具体的に提示することで統一した指導を行うことができた。

今後は、個別の指導計画作成の際の記述観点について、マトリックスを取り入れた形で見直しを行う。それに沿った形で目標設定・評価を行っていけるよう取り組んでいき、記述観点の検証を行っていく。

第 5 章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

平成23年度初頭、平成23年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容の研究をスタートさせ、キャリア教育についての研修や、キャリアの視点を具現化かつ現実化するために、第6次研究をどのように進めていくかが話し合われた。

その結果をもとにスタートした第6次研究は、今年度で2年目を迎えた。研究主題である『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究 ～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』に沿って、課題研究では「今養版キャリアプランニングマトリックスを活用した実践的研究 ～生活単元学習と作業学習を中心に～」に取り組んだ。また、プロジェクト研究では「キャリア教育の視点を通した教育課程（行事）の見直し」に、寄宿舍ではマトリックスを活用した「卒業後を見据えた生活の指導」と題した事例研究に取り組んだ。さらに、昨年度から行っている研究推進委員会によるキャリア教育学習会のほか、今年度は実に7年ぶりの公開研究会を実施した。その準備にあたり研究に関わる会議が多く持たれたことから、今年度はキャリア教育についての研究・研修を深められる機会が多く設けられたと言える。

（1）成果

① 「キャリア教育」の共通理解と意欲喚起

本校の研究の進み具合を全職員で確認し合う全体研修会のほか、昨年度から行っているキャリア教育学習会、公開研究会という大きな目標も見据えて研究を進めるといった取り組みを通じて、マトリックスを手元にキャリア教育の在り方や本校の教育活動の在り方について考え、議論する機会が増えた。これにより、キャリア教育の基本的な考え方について職員間で共通理解を図ることができたほか、ディスカッション形式で職員が相互に日頃の指導についての悩みや意見を出し合い、共有し、ともによりよい教育活動を実践していこうという意欲喚起にも繋がった。

② 教育活動の“整理整頓”と「マトリックス」の浸透

①を下地として、具体的には生活単元学習と作業学習の授業の在り方や評価の方法、学校行事の位置づけや今後の在り方、寄宿舍における生活指導の在り方など、学舎ともに様々な教育活動について整理整頓が進んだ。基本的にどの研究組織でも「マトリックスに沿って」「マトリックスを生かして」という言葉をキーワードに研究を進めてきたことで、本校なりのキャリア教育、すなわちマトリックスの教育方針を普段の指導に浸透させていくという流れができた。

③ より一層の学舎連携

昨年度から、研究推進委員会に寮務主任に入ってもらうことで、学舎の研究の連携を図ってきた。今年度はこれに加え、寄宿舍職員に学校の研修会や学習会に参加してもらうことが増えた。これにより、学舎ともに“今養版キャリア教育の創造”という一つの方向で研究や教育活動を進めるといった流れがより強固になった。

(2) 課題

① 「キャリア教育」「マトリックス」に根付いた教育活動

成果で述べたように、キャリア教育やマトリックスに関しては、研究という取り組みを通して普段の教育実践に徐々に浸透しつつある。今年度の課題研究では評価や計画の在り方から授業づくりを、プロジェクト研究では学校行事の見直しといった学校づくりを、寄宿舎の研究では生活指導を、それぞれマトリックスを生かした形で進めることができた。こうした流れと積み上げてきた成果を次年度へ継続できるよう、また一層深化させていけるよう、研究の進め方を工夫していくことが課題である。

また、どの研究組織でもマトリックスをどのように生かせばよいのか苦慮している場面があった。それは、マトリックスに記載されている教育方針が、具体的にどの授業、どの指導場面に盛り込まれるべきかが明確化されていないことも一因と考えられる。こうしたことも踏まえ、マトリックスの生かし方というものを改めて考えた上で研究を進めることも必要である。

② 「マトリックス」や「指導内容表」の検証とリンク

マトリックスはあくまで“試案”である。今年度、そして次年度の指導・支援の実践を通して内容の見直しが必要ならば見直し、改訂していく必要がある。また、学校教育目標も数年来変わっていないが、時代に即したものに変わるとしたら、その達成に向けた道筋であるマトリックスがきちんとした道筋をたどる形になっているのか確認する必要もある。

マトリックスの他に「指導内容表」についても、その存在意義や活用方法について改めて確認し、中身の見直しが必要ならば見直し、改訂していく必要がある。指導内容表は、マトリックスで示された教育方針をもとに何を指導するのかを具体的にまとめたものである。マトリックスよりも早い平成22年度に大幅な改訂を終えているが、それ以来中身については一度も見直されていない。また、マトリックスとの相関についても検証されていない。今後、新たに作られたマトリックスと以前からある指導内容表の両方をリンクさせた活用を促進することは、本校のキャリア教育に一貫性・系統性を持たせる上では望ましい姿であると考えられる。

③ 調査・研修の在り方

これまで、キャリア教育学習会を通してキャリア教育についての研修を行い、その考え方を共通理解することができた。第1章でも述べたが、その内容についてマンネリ化しないよう、また意味のある学習会になるよう工夫しながら継続していくことが課題である。

また、計画段階では盛り込んでいたものの職員アンケートによって実施しないことになった「調査研究」について、今まで以上にその必要性を検討することが課題である。卒業生の就労状況、生活状況、転職や離職の状況などを捉えて分析し、教育課程の見直しに繋げることは全道的な課題ともなっている（北海道特別支援学校長会研究より）。在校生に見られる課題や教職員の理想像だけで教育課程を構築し指導・支援するのではなく、卒業生や保護者、就労先の声にも耳を傾け、校内外の指導・支援実践上のミスマッチを明らかにし解消していくといった取り組みは、本校においては調査研究を通して進められるものとする。

④ 教職員の専門性向上

昨年度から今年度にかけてキャリア教育を学び、本研究に取り組んだことで、教職員のキャリア教育に関する専門性の向上が図られてきた。しかし、その取り組みの内容は会議における議論が中心であり、研究の一環として計画的に実際の授業を見合い、協議を重ね、職員相互に指導技術を磨き合うという取り組みは少なかった。公開研究会では授業を公開し、職員間や参加者から様々な意見が出されたが、結果としてよかったという反省が挙げた。これを踏まえ、次年度は研究の一環として研究授業や公開授業を実施することで、職員一人一人のスキルアップや、キャリア教育、ひいては特別支援教育に関する専門性の向上を図ることが必要であると考えられる。

⑤ キャリア教育と生徒指導

マトリックスに基づいた指導・支援をしたとしても、その効果を左右しかねない問題が近年顕著に見られる。それは、家庭・地域環境や本校入学以前の生育歴などから派生している生徒指導上の諸問題である。その内容は、非行・暴力から異性関係、情報リテラシーの問題と幅広い。特別指導の件数は年々増え、ケース会議ではその指導の進め方について検討が重ねられているが、同じような過ちを再発してしまう生徒もいる。こうした背景から、道徳的要素を取り入れた指導の必要性について議論されることも増えてきた。また、保護者支援の必要性についても年々話題となるケースが増えている。

そもそもキャリア教育とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程である“キャリア発達”を促す教育である。生徒指導とは、生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動である。この2つはいずれも、教育活動全体を通して行われるべきものであるという点で共通している。さらに、学校において生徒一人一人のよりよい人格形成を目指すという点でも共通しており、視点が定義上異なるだけで目指す方向性は同じと言える。従って、キャリア教育の推進と生徒指導上の諸問題解決に向けた取り組みは、切っても切り離せない関係にあるのであって、今後の研究推進においては相互の相関と相乗効果を考慮すべきものとする。

⑥ キャリア教育と学校組織

本校は今金町という人口6千人以下の郡部の町に位置し、檜山管内唯一の特別支援学校である。3学科（既設科2、生活科1）を設置し、生徒数は73名である。寄宿舎を併設しており、69名が入舎している。総職員数は69名、うち教務（教諭、実習助手等）44名、寄宿舎（寄宿舎指導員）14名である。特筆すべきは、期限付き教諭、新採用教諭、長期休業中の教諭の多さによる仕事の継承性である。期限付き及び新採用は教諭34名中7名、長期休業中は5名である。さらに外勤中心の教諭4名は授業に入っていない。このように、実際には総職員数よりも少ない職員数で授業や分掌業務をこなさなければならないが、それゆえに授業や業務の本質を見過ごし、場当たり的に事が進んでしまっていることも少ないとは言えない。

キャリア教育実践のカギは、「生徒が主体となること」「教育課程の見直しと授業改善をすること」「組織の見直しをすること」の3つとも言われている。つまり、このままの教育課程や組織体系で果たして機能するのかどうか、検討が必要ではないか、ということである。例えば時間割や分掌組織や教科・形態部会といった会議の持ち方など、学校運営に関する様々な現状と今後の在り方をキャリア教育の観点から見つめ直す時期に来ているのではないだろうか。

2 次年度に向けて ～第6次研究3年目に向けて～

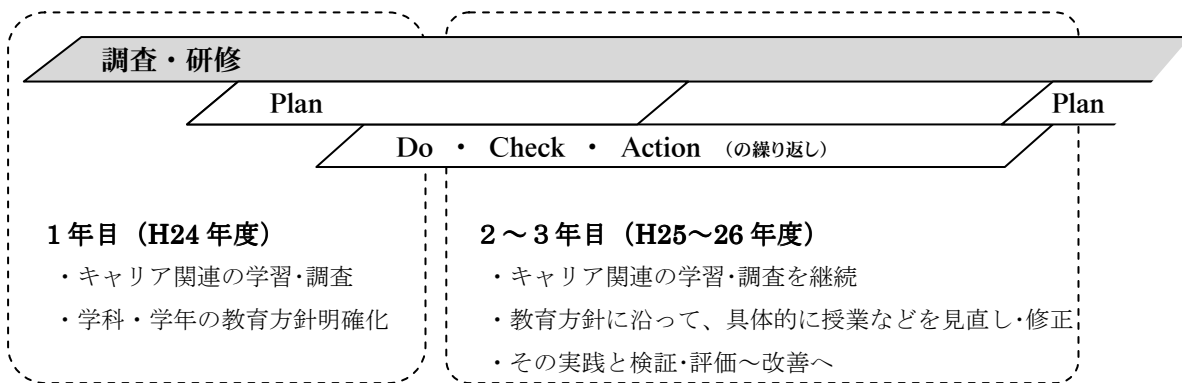
本研究は、キャリア教育の概念をどのように本校の教育課程や教育活動に位置づけていくか、教職員間で共通理解していくことから始まった。第6次研究の1年目である昨年度は、「キャリア教育」をどのように捉え、どのように進めていくかを全職員で考える1年であった。その結果、「キャリア教育」の理念や考え方を職員間で共通認識できてきただけでなく、「今養版キャリアプランニングマトリックス」を完成させることができた。

第6次研究の2年目である今年度は、試行錯誤しながらマトリックスを活用していく1年となった。生徒を立派な社会人に育てたいという、職員全員の思いが詰まっているマトリックスに沿って教育活動を考えるのは必然であるが、実際に指導計画の作成、実際の指導、評価などそれぞれの場面においてマトリックスの要素を練り込んでいくことに大変苦勞した。しかし、職員一人一人が真剣にこれと向き合い、うっすらと見えてきた形を公開研究会で発表することができた。第6次研究最終年である来年度は、今年度の成果と課題をもとに、本校なりのキャリア教育の形をさらに明確にしていくことになるだろう。同時に、マトリックスそのものについても改めて見直し、生徒や地域の実態、時代の流れに則した教育方針・教育活動を創り上げていくことになるだろう。

本校の教育活動全てが生徒一人一人の生きる力と明るい将来につながることを信じ、今後も全職員一丸となって「今養版キャリア教育」を創造していく。

～ 第6次研究の流れ ～

課題研究



	プロジェクト研究	寄 宿 舎
平成24年度	産業科 ・作業工程などの資料改訂	事例研究（卒業後を見据えた生活の指導）
平成25年度	教育課程検討委員会 ・教育課程（行事）の見直し	事例研究（マトリックスを活用した指導）
平成26年度	未定	未定

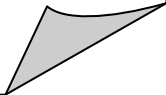
資料 1

公開研究会の記録

平成25年12月13日

社会の変化に対応できる力を育む

キャリア教育を考える



平成25年度公開研究会開催要項

1 目 的

- ・「キャリア教育」の視点から卒業後の生活を見据えた授業実践を進め、生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について整理する。
- ・本校の実践を発信し、分科会や講演などを通して意見交換を行うことで、特別支援教育の専門性の向上を図る。

2 主 催

北海道今金高等養護学校

3 日 時

平成25年12月13日（金） 10:00～16:00

4 会 場

北海道今金高等養護学校

〒049-4304 瀬棚郡今金町字今金454-1 Tel : 0137-82-3121

5 日程及び内容

10:00～	11:15～ 11:30	11:30～ 12:10	12:10～ 13:00	13:00～	14:10～ 14:20	14:20～15:45	15:45～ 16:00
受付 公開授業	移動	分科会	昼食	開会式 基調講演	休憩	パネルディスカッション	閉会式

6 研究会主題

「社会の変化に対応できる力を育むキャリア教育を考える」

～知的障害・発達障害の生徒が社会自立できるように何をすべきか～

7 講師

北海道特別支援教育センター 教育課 知的障害教育室長 中川 正規 氏

北海道教育大学函館校 准教授 北村 博幸 氏

有限会社 小川食品 代表取締役（本校後援会会長） 小川 宏 氏

NPO法人せたな共同作業所ふれんど サービス管理責任者 今西 一憲 氏

8 参加費 無料

9 定 員 150名

公開授業 (10:00~11:15)

・「今養版キャリアプランニングマトリックス」に基づいた授業実践を行います。

	学年・学科	授業	題材名・内容	場所
①	2学年・全学科	生活単元学習	「心とからだの学習」	2階 視聴覚室
②	1学年・産業科	作業学習	「板づくりによる はり合わせ」(カップ作り) 「板づくり」(長角皿・小)	1階 窯業実習室
③	3学年・生活家庭科	作業学習	「紙すき作業」	1階 作業実習室2
④	1・3学年・農業科	作業学習	「プラグトレイの洗浄」	温室

分科会 (11:30~12:10)

・公開授業を振り返りながら、意見交換・協議を行います。

	分科会	場所
A	生活単元学習	体育館
B	作業学習	参加希望がないため、中止いたします。

開会・基調講演 (13:00~14:10 体育館)

開会のあいさつ・講師紹介 校長 佐々木 誉之

本校の研究紹介 研修部長 矢倉 一

基調講演「キャリア教育の現状と課題」
北海道特別支援教育センター 教育課 知的障害教育室長 中川 正規 氏

パネルディスカッション (13:00~14:10 体育館)

・4名の講師の方々をパネラーに迎え、「発達障害・知的障害のある生徒の社会自立」をテーマに協議を行います。会場の皆様からのご意見・ご質問をいただきながら進めて参ります。

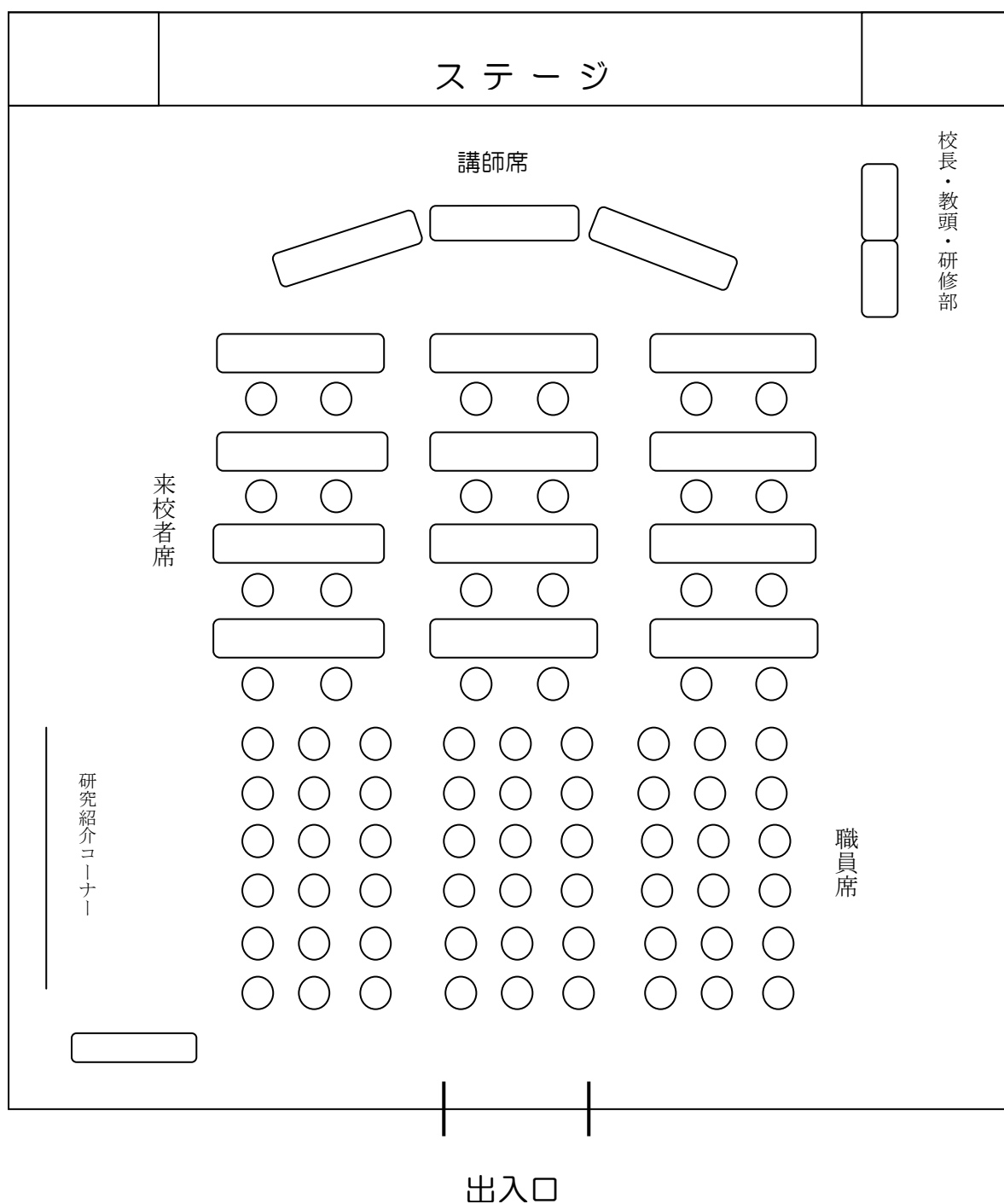
閉会 (15:45~ 体育館)

<パネルディスカッションについて>

テーマ 『発達障害・知的障害のある生徒の社会自立』

キーワード 「キャリア教育」 「アセスメント」 「就労に向けた指導」
「就労の実際」 「就労後の支援」 「障害者総合支援法」

- 講師の先生方から、テーマ・キーワードを踏まえた提言をしていただきます。
- テーマ・キーワードに沿って、参加者全員でディスカッションをします。



2 学年 生活単元学習「心とからだの学習④」授業公開資料

1 本時の展開

単元・題材名	心とからだの学習④ 「命を大切にすること」	生徒	2年 生徒23名
		場所	視聴覚室
日 時	平成25年12月13日(金)2・3校時	指導者	T1:鐘ヶ江真知 T2:中川優子 T3:木田絢子 T4:藤倉雄一
本時の目標	① 様々な人の生き方や、仲間の考え方を知ることができる。 ② 自分はどのように感じたかを振り返ることができる。 ③ 今後の自分の生き方について考えることができる。		

学習内容	学 習 活 動	教材・教具	指導上の留意点
【導入】 挨拶 前時の振り返り 本時の説明 「命を大切にすること」 ・パワーポイントを見ながら学習する。	・農業科の日直が始まりの挨拶をする。 ・数人が前時に学んだことを発表する。 ・「命」と聞いて考えるものを発表する。 (性教育では命の誕生について触れている) Q 先生が落としたプリントをなぜ拾ったか。また、拾わなかったか。 ◎JR で電車とホームの間に挟まれた女性の記事を知る。 Q ：あなたならどうするか？ ワークシート ↓ 考えを交換する Q ：電車が出発する直前になった。 あなたならどうするか？ ワークシート ↓ 考えを交換する ・何人もの人が協力して助けた。この出来事は世界で称賛された。という結果を知る。	・パソコン ・テレビ ・ワークシート	・全体に投げかけ、数人に答えさせる。 ・導入として、T1がわざとにプリントを落とし、誰が拾ったかを確認する。 ・T2とT4は、理解が難しい生徒に具体的な説明をしたり、A：助ける B：助けない など2択から選ぶよう促すなどの支援をする。 ・T3は必要に応じて、説明をするなどの支援をする。

	Q：あなたはこのニュースから何を感 じましたか。 ワークシート ◎踏切の中で倒れてしまったおじい さんの記事を知る。 Q：あなたならどうするか？ ワークシート ↓ 考えを交換する Q：目の前まで電車が来ている。あ なたならどうするか？ ワークシート ↓ 考えを交換する ・おじいさんは助かり、助けに行っ た女性は亡くなった。という結果を知 る。 Q：この女性は命を大切にしたいと思 いますか？ 考えを交換する ・この女性のお父さんの思いが書かれ た記事を知る。		- 全体に投げかけ、数人に答え させる。 - T2とT4は、理解が難しい生徒 に具体的な説明をしたり、A： 助ける B：助けない など2 択から選ぶよう促すなどの支 援をする。 - T3は必要に応じて、説明をする などの支援をする。
【まとめ】	・どのように感じたかを数人が発表す る。 ・T1からまとめの話を聞く。 Q：「命を大切にしていますか？」		- 考えの交換のみを行う。 - 踏切の中にいるのが自分の家 族、友達、ペットだったらど うするか。また、家族や友達 がこの女性の立場だったらど のように感じるかなど聞いて いく。 - T1の思いを話す。 - 最後に投げかける。(考えは聞 かない)
次時の説明	・次時の説明を行う。		ワークシートを回収する。
あいさつ	・農業科の日直が終わりの挨拶をする。		

今養版キャリアプランニングマトリックスとの関連

指導観点	指導の柱	段階	指導方針
・感性	・感受性	2	・事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値にその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。
・コミュニケーション	・相手を受け入れ、自らそこに参加する。	2	・相手の立場や考え方を理解して受け入れ、かかわることができる力を育てる。
・応用力	・意思決定	2	・TPO、自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をできる力を育む。

2 生徒の実態（学級経営案より）

- ・精神的に幼く、一方的に自分の興味・関心のある話を続けたり、相手の気持ちを考えずに自分の考えや思いを優先した行動をする生徒が多い。
- ・他者とのコミュニケーションを不得意としている生徒が多い。発問や指示に対して理解できずに混乱してしまう生徒もいる。
- ・学習には積極的に取り組む生徒が多い。なかには仲間と共に学習できなくなる生徒がいるが、生徒同士で声を掛け合いながら学習しようとする姿が見られるようになってきた。
- ・生徒全員が知的障害、発達障害があり、IQ は測定不能～90位と幅広い。

3 題材設定の理由

入学してからこれまでの間に、仲間との関わりや異性関係等で様々な問題が起きた。その際に、ほとんどの生徒は、なぜいけないか、相手はどのように思ったかなどの質問に対しては、正当な答えを言うことができる。しかし、その後も何度も同じような問題を起こしてしまったり仲間を傷つけてしまったりする。そのような問題が続くなかでも、日々の学習の中では進路に向けての話があったり、実際に実習に行ったりしている生徒もいる。どのような進路を選ぶことが良いのか、このままの自分のままで良いのかなど生徒の悩みはつきない。

そこで、様々な人の生き方を知り、何を選択しどのような生き方をすると自分の人生を大切にしていることになるのかを考え、またそのときに仲間はどうに感じているのかを知ることによって、色々な生き方や価値観があり、自分の人生、命を大切にすることとはどのようなことなのかを考えてほしいという思いで本題材を設定した。

本単元は、1. アルコールや喫煙などの健康に関する知識を深めると共に、人によって様々な考え方があることを知る。2. 命の誕生などの性の知識を深めることで、命の大切さについて考える。3. 様々な人の生き方やそれに関わる人の感情を知ること、自分なりの考えを持つ。という3つで構成している。

4 指導計画・内容（概要）

本単元「心とからだの学習④」の目標

- アルコールやたばこについての知識を深めることができる。
- 性に対する正しい知識の習得を通し、望ましい心身の成長を図る
- 知識や仲間の考えを参考にして、自分の考えを持つことができる。

- 第1回 12月 4日 : オリエンテーション
第2回 12月 5日 : 健康・安全な生活①
第3回 12月 6日 : 健康・安全な生活②
第4回 12月 11日 : 性教育①
第5回 12月 12日 : 性教育②
第6回 12月 13日 : 命を大切にすること（本時）
第7回 12月 18日 : 前時の振り返り
第8回 12月 20日 : まとめ

5 評価（A：大変よい B：おおむねよい C：努力を要する）

評価の観点	評 価
本時の目標は達成されたか	
① 様々な人の生き方や、仲間の考え方を知ることができる。	A・・・B・・・C
② 自分はどのように感じたかを振り返ることができる。	A・・・B・・・C
③ 今後の自分の生き方について考えることができる。	A・・・B・・・C
マトリックスの指導方針を、指導に反映することができたか	A・・・B・・・C
本時の目標設定は適切であったか	A・・・B・・・C
導入・展開・整理の流れ、時間配分、教材・教具は適切であったか	A・・・B・・・C
全体・個別に対する働きかけ（手立て）は適切であったか	A・・・B・・・C
生徒の学習に取り組む姿は、自ら学ぶものになっていたか	A・・・B・・・C
<その他>	

1 学年 産業科「窯業作業学習」授業公開資料

1 本時の展開

単元・題材名	「板つくりによるはり合わせ」・カップ 「板つくり」・長角皿（小）	生徒	産業科1年 生徒9名
		場所	窯業実習室
日時	平成25年12月13日(金)2・3校時	指導者	T1:田中龍右エ門 T2:鈴木貴史 T3:小松裕樹
本時の目標	①報告・連絡・相談を中心としたコミュニケーションの力をつける。 ②各作業工程に従って、丁寧に製品を製作する。		

学習内容	学 習 活 動	教材・教具	指導上の留意点
(導入) 作業の用意 あいさつ 内容と目標の理解	- 各自、各グループで使う道具を揃えて用意する。 - 始業のあいさつをする - 本時の内容・目標を確認する。 - 掲示物を見て、既学習項目を思い出す。	掲示物 「会社が必要とされる人間になるために」	- 作業時間の開始までに、道具への雑巾がけを完了させる。 - 内容と目標を具体的に示す。 - 既に学習した項目を思い出させると共に、自分の将来像を想像させる。
(展開) 製品製作の開始 製品作り終了 あとかたづけ 掃除	- 各自に示された製品作りに取り組む。 - 正しい手法や工程に沿って正確な製品を作る。 - 定められた時点で、指導者に確認を求める。 - 次回の工程に進めるように処理をする。 - 各自の道具類を片づける。 - 作業室の掃除を始める。 - お互いに取り組む役割を決めて仲間に示す。 ↓ 聞こえたことに対して返事をする。 - 役割を終えたら、仲間に示す。 ↓ 聞こえたことに対して返事をする。 - 協力が必要な場面では、お互いに声をかけ合って進める。	矢印セット (柿崎用)	- 指示された手法で取り組ませる。 - 次の工程について確認させる。 - 正しい手法や工程に沿わずに作成する心配のある生徒には、声をかけて正しく取り組ませる。 - 丁寧にできたときや目標に沿って活動できたときには称賛して、良い気持ちで続けて取り組ませる。 - はっきりと聞こえる声で確認させる。 - 正しい方法で処理させる。 - 使った道具を雑巾で拭き、責任を持って片づけさせる。 - 各自の道具を片づけた順に、掃除を始めさせる。 - 仲間に聞こえるように促す。 ↓ 仲間に返事をさせる。 - 役割が終わったら、仲間に聞こえるように促す。 ↓ 仲間に返事をさせる。 - 掃除のもれ落ちに気づくように、助言する。 - 掃除場面で取り組む事を探せない生徒に対して具体的なアドバイスをする。
(まとめ) 反省 あいさつ 解散	- 各指導者からの反省を聞いて、各自の取り組みを振り返る。 - 終業のあいさつをする - 解散する		生徒の達成感や反省点を振り返らせるために、良かった点や改善すべき点を具体例を挙げる。

今養版キャリアプランニングマトリックスとの関連

指導観点	指導の柱	段階	指導方針
心と体	心身の健康	1 学年	・健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができるよう指導する。
	基本的生活習慣の確立	1 学年	・生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。
職業	働く態度・能力	1 学年	・与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。 ・手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組むことができる力を育てる。
自己内省	物事に対する意欲	1 学年	・時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。 ・自主的・積極的に活動に取り組む大切さを知り、自ら努力を続けようとする気持ちを育む。
	課題を解決しようとする心	1 学年	・成功や失敗を繰り返しながら反省を積み重ね、他者の意見も受け入れながら、自分の気持ちや考えを整理する力を育てる。 ・自己決定・自己反省の過程を繰り返し、課題を解決する姿勢を育てる。
知識・技術	社会の仕組みなどの知識・技術	1 学年	・集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。
コミュニケーション	自分から相手に発信	1 学年	・場や状況に合わせた大きさで、あいさつ、返事・報告ができる力を育む。
	相手の話を聞いて判断 相手を受け入れ、自らそこに参加する	1 学年	・相手の話を最後まで落ち着いて聴くことができる力を育む。 ・相手の考えや気持ちを受け入れる力や集団に合わせる力を育てる。

2 生徒の実態

- ・学習全般に対して、全員がまじめに意欲的に取り組むことができる生徒たちである。
- ・学級活動では、自分の意見を出す生徒が少なく、自分が集団に属しているという帰属意識が弱い。
- ・文字の読み書きや簡単な計算、単位の換算などを理解できる生徒が多い。また、全員がはかりを使って重量を正確に読み取ることができる。
- ・言語によるコミュニケーションをある程度とることはできるが、伝えられたことの要点を理解したり、自分の考えを相手に伝える言葉を考えたりするのを苦手とする生徒が多い。

3 題材設定の理由

窯業の作業では、粘土を必要な重さに計って切り出して石膏型に合わせて製品を作ったり、規定の大きさの部品をはり合わせて製品を作ったりして、乾燥、素焼き、やすりがけ、釉薬がけ、本焼きなどの作業工程を経て製品を完成させている。それまでの作業活動を通して、卒業後の社会参加・自立に必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、勤労を重んずる実践的な態度を育てることを目標としている。

このような理由から産業科学科経営案に掲載されている指導の重点のうち、以下の3点に沿って今回の題材を設定した。

- ①正しい手順や方法で作業を行い、集中力や作業に必要な体力などの基本的な能力を身につけさせる。
【職業】
- ②あいさつ、返事、報告などの作業をするのに必要な基礎となる力を身につけさせながら、仲間と協力して取り組む姿勢を育てる。対応の仕方など基本的な行動様式を育成する。【コミュニケーション】【職業】
- ③健康・安全指導を徹底すると共に、整理整頓、清掃などの習慣を育成する。【心と体】【知識・技術】

4 指導計画・内容（概要）

本単元「板づくりによるはり合わせ・板づくり」の目標

- 勤労意欲の向上を図る。
- 働くことへの理解を深めさせる。
- 返事やあいさつ等の基礎的・基本的な態度を身につけさせる。
- 社会参加・自立に必要な実践的態度を育成する。

第1回 11月21日： 合わせづくり・板づくり（新しい製品の製作）について、作業学習開始。

第2回以降 11月22日～H26.3月19日（99時間）（本時は29時間目）

5 評価（A：大変よい B：おおむねよい C：努力を要する）

評価の観点	評 価
本時の目標は達成されたか	
①報告・連絡・相談を中心としたコミュニケーションの力をつける。	A・・・B・・・C
②各作業工程に従って、丁寧に製品を製作する。	A・・・B・・・C
マトリックスの指導方針を、指導に反映することができたか	A・・・B・・・C
本時の目標設定は適切であったか	A・・・B・・・C
導入・展開・整理の流れ、時間配分、教材・教具は適切であったか	A・・・B・・・C
全体・個別に対する働きかけ（手立て）は適切であったか	A・・・B・・・C
生徒の学習に取り組む姿は、自ら学ぶものになっていたか	A・・・B・・・C
<その他>	

3 学年 生活家庭科「紙すき作業」授業公開資料

1 本時の展開

単元・題材名	挨拶回り用製品作り 「紙すき」	生徒	生活家庭科3年生徒7名
		場所	作業実習室2
日時	平成25年12月13日(金)2、3校時	指導者	T1:佐々木真由美 T2:木村幸子 T3:出村朱美
本時の目標	①準備、作業、掃除を仲間と声を掛け合いながら取り組むことができる。 ②手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら集中して取り組むことができる。 ③挨拶・返事・報告を自ら行うことができる。		

学習内容	学 習 活 動	教材・教具	指導上の留意点
(導入)9:50 準備	○紙すき、製品作りに必要な準備を手早く行う	パルプ、お花紙 計量用牛乳パック、はかり ミキサー、ローラー すき枠、不織布 ネル生地 アクリル板、タオル ハシ、カッター カッターマット、ヘア 両面テープ	・自分の担当工程の準備が終わったら仲間の準備を手伝うように指示する。
挨拶 10:00 (5分)	○日直の号令に合わせて挨拶 ○本時の学習について知る		・板書を見ながら本時の担当を伝える。 ・紙すき、製品作りの目標枚数を伝え、手早く丁寧に取り組むよう指示する。
(展開) 10:05 作業	○紙すき(ミキサー・紙すき・ローラーかけ)と製品作り(裁断・封筒切り・折り線付け・両面テープ貼り)を行う		・各担当指導者が活動前に注意する点、報告するタイミングを確認してから作業に取り組ませる。
10:50	○片付け・掃除		・声を掛け合いながら手早く取り組むよう支援する。
(整理) 11:00 反省	○手洗い後、作業日誌を記入し、担当指導者と個別に反省をする ○全体反省 ○次回の予告 ○日直の号令に合わせて挨拶	作業日誌 筆記用具	・ひとりひとりの良かった点、反省点を具体的に伝える。

今養版キャリアプランニングマトリックスとの関連

指導観点	指導の柱	段階	指導方針
職業	働く態度・能力	2	○手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組むことができる。
		3	○自ら仕事の工程や課題を理解し、効率よくやりとげる力を育てる。
自己内省	物事に対する意欲	2	○時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。
コミュニケーション	自分から相手に発信	3	○その場に応じた挨拶、返事・報告をする力と、相手の人権を尊重するような適切な言語能力を育てる。
	相手の話を聞いて判断	2	○必要な支援を他者に求めることができる

2 生徒の実態

- ・全員が挨拶をしたり簡単な会話ができるなど、言語によるコミュニケーションをとることができる。
- ・場や相手に応じた言葉遣いをすることが難しい生徒が多い。
- ・聞かれていることや指示が理解できていないのに返事をし、指示通り活動できない生徒もいる。
- ・どの学習にも意欲的に取り組む生徒が多い。

3 題材設定の理由

紙すきは、2 学年から継続して取り組んでいる題材である。各工程を全員が何度も経験していて、やり方をほぼ理解している。製品(封筒、メモ帳)作りも過去に経験し作り方を理解していることから、手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら取り組める力を身につけさせることを目指している。また、準備から掃除までの流れで、場や状況に合わせて仲間と声を掛け合いながら協力する力、挨拶・返事・報告を自ら行う力を身につけさせることを目指している。

4 指導計画・内容（概要）

本単元「挨拶回り用製品作り」の目標

- お世話になった地域の方への感謝の気持ちを持って作業に取り組むことができる。
- 作業工程を理解し、手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら取り組むことができる。
- 場や状況に応じた挨拶、返事・報告、声のかけ合いをしながら取り組むことができる。

第1回 12月 3日(火)：製品作りの話し合い

第2回 12月 4日(水)：石けん作り、紙すき準備

第3回 12月 5日(木)：石けん作り、紙すき準備

第4回 12月 6日(金)：紙すき、液体石けん作り

第5回 12月 10日(火)：紙すき、製品作り

第6回 12月 11日(水)：液体石けん作り、紙すき製品作り

第7回 12月 12日(木)：紙すき、製品作り

第8回 12月 13日(金)：紙すき、製品作り(本時)

第9回 12月 17日(火)：製品作り、袋詰め

5 評価 （A：大変よい B：おおむねよい C：努力を要する）

評価の観点	評 価
本時の目標は達成されたか	
①準備、作業、掃除を仲間と声を掛け合いながら取り組むことができる。	A・・・B・・・C
②手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら集中して取り組むことができる。	A・・・B・・・C
③挨拶・返事・報告を自ら行うことができる。	A・・・B・・・C
マトリックスの指導方針を、指導に反映することができたか	A・・・B・・・C
本時の目標設定は適切であったか	A・・・B・・・C
導入・展開・整理の流れ、時間配分、教材・教具は適切であったか	A・・・B・・・C
全体・個別に対する働きかけ（手立て）は適切であったか	A・・・B・・・C
生徒の学習に取り組む姿は、自ら学ぶものになっていたか	A・・・B・・・C
<その他>	

1・3学年合同 農業科「プラグトレ洗淨」授業公開資料

1 本時の展開

単元・題材名	単元名：「次学期・来年度の準備」 本 時：「プラグトレ洗淨」	生 徒	農業科 1 年生徒 9 名 3 年生徒 7 名 合計 16 名
		場 所	農業科 温室(ガラス室)
日 時	平成 25 年 12 月 13 日(金) 2, 3 校時	指 導 者	T1:小原雄一 T2:近藤和也 T3:加藤大輔
本時の目標	①軽作業を通して、基本的な作業態度を身につける（確認する）ことができる（4） ②他学年とのかかわりの中で、相手に合わせたコミュニケーションの取り方を意識することができる（7）		

学習内容	学 習 活 動	教材・教具	指導上の留意点
1 確認(5分) 10:00	・身だしなみを確認する。 ・全体で本日の作業内容を教員と確認する。 知識・技術 コミュニケーション	身だしなみ チェック表	・健康状態や安全性を確認する。 ・おおよその時間配分を示す。 ・作業内容を簡潔に伝える。 ・作業班長がスムーズに取り組めるように必要があれば簡潔に言葉掛けする。
本時の作業内容を確認し、活動の見通しを持つ。			
2 準備・移動(10分) 10:05	・前日に確認した必要な道具を、1 年生に声を掛け準備を行う（3 年生） ・3 年生の説明を聞き、一緒に準備を行う（1 年生） ・作業班長が本時の作業工程や片付け時間を全体で確認する。 ・所定のペアを組む。 職業 コミュニケーション	プリント プラグトレ バケツ スポンジ 歯ブラシ ペア確認表	・声かけは極力少なくし、見守り支援する。 ・必要な道具を用意できているか様子をみて報告を待つ。
活動内容を理解して、作業に必要な道具を確認し合いながら準備する。			
3 プラグトレ洗淨(40分) 10:15	・前時で確認した内容を 1 年生に説明しながら、洗淨を行う（3 年生） ・3 年生の説明を聞きながら、洗淨の工程を理解し、全員で洗淨を行う。 ・相談や確認し合いながら行い、迷う場合は教員に相談する。 職業 自己内省 コミュニケーション		・言葉かけは極力少なくし、見守り支援する。 ・相談された場合は簡潔に答える。 ・作業の進み具合と片付け時間を作業班長に確認する。
活動内容を理解して、最後まで集中していねいに取り組む。			
4 後片付け(10分) 10:55	・使用した道具を洗い、所定の場所に片付ける。	洗い場	・言葉掛けをせずに、見守り支援する。

	・他で作業中（後片付け等）の人がいれば声をかけ手伝いをする。 ・片付けが終了したら作業班長に報告し全員の片付けが確認できたら、作業班長が教員に報告する。 知識・技術 コミュニケーション 次の作業が行いやすいように、汚れを落とし確実に後片付けをする。		・報告を受けたら、確実に片付けられたか確認する。
5 反省(10 分) 11:05	・今日の作業の成果と反省を、教員と確認し合う。 職業 コミュニケーション 自分の課題を確認し、次時につなげる計画を考える。		・本時の作業内容を振り返り、次回に生かせるように評価する。

今養版キャリアプランニングマトリックスとの関連

指導観点	指導の柱	段階	指導方針
職業	働く態度・能力	一学年段階 (1 年生)	与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。
		三学年段階 (3 年生)	自立した社会人を目指すために自らの課題を理解し、問題解決能力を育てる。
コミュニケーション	相手を受け入れ自らそこに参加する相手の話を聞いて判断	一学年段階 (1 年生)	相手の考え・気持ちを受け入れる力や集団に合わせる力を育てる。 相手の話しを最後まで落ち着いて聞くことができる力を育てる。
	自分から相手に発信	二段階 (3 年生)	あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表示能力が高まるように、日常的に指導する。

平成 25 年度農業科指導の重点(学校教育計画に記載)は今養版キャリアプランニングマトリックスを絡めている。そのため、毎時間の授業も指導の重点を意識して計画している。

- (1) 自立に必要な基礎的学力や社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身に付ける。(知識・技術)
- (2) 栽培から販売までの過程を学習することを通じ、やりがいや生きがいを見いだし実践的な労働意欲を高める。(職業)
- (3) 整理・整頓・清掃の生活習慣を身に付けるとともに、健康・安全に気を付ける。(心と体)
- (4) 姿勢の保持、集中力、持続力、集団行動などの基本的作業態度を身に付ける。(職業)
- (5) 「作業強化日」「現場実習」を通して自己の課題を理解し、卒業後の職業自立に向けて自ら課題解決をしようと努力する姿勢を身に付ける。(自己内省)
- (6) 様々な作業体験を通して自己の理解力を高め、卒業後の職業生活への見通しを持たせ、自立への興味・関心を持つ。(自己理解)
- (7) ホームルームや他教科との連携を図りながら、社会人として必要なコミュニケーションの取り方を身に付ける。(コミュニケーション)

2 生徒の実態

1 年生	3 年生
・感情のコントロールが苦手な態度や行動に表れてしまう。 ・協力し合わなくてはいけない場面では、声を掛け合えるようになってきた。 ・指示されたことは一所懸命に取り組む。指示がないと動けない生徒もいるが、全体的に少しずつ気がついて動けるようになってきた。	・積極性がある一方で、集中力が途切れやすく学習意欲が途切れたり、過去の失敗と同じような失敗をするケースが多い。 ・精神的な幼さや経験不足もあり、自分の考えを分かりやすく他者に説明したりすること、他者や状況を意識した言動をすることが苦手である。

3 題材設定の理由

本題材である「プラグトレイ」は各草花や野菜栽培時、播種するときに使用するものであり、使用後に洗浄し再度使用する一連の活動を通して、仕事のサイクルを学ぶことができると同時に、きれいに洗浄することで生産品の品質保持・向上にもつながっている。その中で、本時の洗浄作業は同じ工程を時間いっぱい取り組むことで仕事に対する忍耐力や集中力が身につくと考え。

また「先輩から後輩へ伝える」という本時の取り組みは、昨年度から行っており、3年生は責任を持って主体的にアドバイスできるようになること、また1年生はアドバイスされた内容を理解し実行できるようになることで、相手にわかりやすく伝え合うコミュニケーション力や仕事に対する責任感や実行力が身につくと考え。

そして、「洗浄」と「伝える」の両者を組み合わせることで、よりキャリア発達を促すことをねらい本題材を計画した。

4 指導計画・内容（概要）

本単元「次学期・来年度の準備（後輩への引き継ぎ）」の目標

○加工作業を通して、生産から販売までの流れを理解し、労働意欲を高めることができる（2）

○軽作業（洗い物、除雪など）を通して、基本的な作業態度を身につける（確認する）ことができる（4）

○他学年とのかかわりの中で、相手に合わせたコミュニケーションの取り方を意識することができる（7）

※目標語尾の網掛け数字は、平成25年度農業科指導の重点とリンクさせている。

	1年生	3年生
第1回目 12月5日	合同授業・加工について事前指導	タマネギの調理（事前学習）
第2回目 12月6日	タマネギの調理（合同授業）	
第3回目 12月11日	振り返り（コミュニケーションの取り方など）	各鉢花手入れ・プラグトレイ洗い
第4回目 12月12日	ポット洗い	プラグトレイの洗い方について確認
第5回目 12月13日	プラグトレイ洗浄（合同授業）本時	
第6回目 12月18日	プラグトレイ洗浄	大掃除

5 評価（A：大変よい B：おおむねよい C：努力を要する）

評価の観点	評価
本時の目標は達成されたか	
①軽作業を通して、基本的な作業態度を身につける（確認する）ことができたか（4）	A・・・B・・・C
②他学年とのかかわりの中で、相手に合わせたコミュニケーションの取り方を意識することができたか（7）	A・・・B・・・C
マトリックスの指導方針を、指導に反映することができたか	A・・・B・・・C
本時の目標設定は適切であったか	A・・・B・・・C
導入・展開・整理の流れ、時間配分、教材・教具は適切であったか	A・・・B・・・C
全体・個別に対する働きかけ（手立て）は適切であったか	A・・・B・・・C
生徒の学習に取り組む姿は、自ら学ぶものになっていたか	A・・・B・・・C
<その他>	

分科会の記録

◇生活単元学習「心とからだの学習」

(1) 授業者より



『命を大切にすること』で目標としたこと』

①様々な人の生き方や、仲間の考え方を知る。

→授業の導入で、教師がプリントをわざと落とした。手伝おうと判断し行動した生徒、見ていただけの生徒がいた。小さなことでも、自分で決めて行動することに気づかせた

②自分はどのように感じたかを振り返る。

→授業では、実際にニュースで取り上げられた事故の救出の記事を何個か話し、“自分だったらどうするか”の考えを引き出していくように進めた。

③今後の自分の生き方について考えることができる。

→授業の初めには、『自分も助ける』という意見を出していた生徒が、現実を知っていくと、少しずつ「周りと協力して」や『わからない』という意見に変化していった。

→実際に自分ではどうするかを考えると、矛盾や憤りを感じる生徒が出てきた。

○自分で決めることは、進路選択にも繋がり、自分の考えで決めてほしいということで、今回の授業を行っている。



(2) 参加者とのやり取り

Q：今回のような授業では、スキル学習で終わってしまうことも考えられるが、生徒の意見を引き出していたので、工夫が感じられた。そこで、この単元の生活単元学習を通して、生徒に変化が見られたかどうか聞きたい。

A：『選択する』授業を行ってから、細かい行動でも、“自分で判断したんだね”と話し、“自分で決める”“選択する”という意識付けができてきたと感じている。

Q：生徒の実態が異なるが、『心とからだ』の単元で取り扱っている内容について教えてほしい。

A：『心とからだ』、『生活する力を身につけよう』、『進路の学習』は、3年間通して行っている。

『心とからだ』は、内容も難しく、現在、学校の研究でも題材一覧を作成している。

1 学年：体のつくり、二次性徴、人とかかわり、自己理解など。

2 学年：1 学年で学んだことをより深めていく。妊娠などの性教育講話も行った。

3 学年：ストレスコントロール、性加害、性被害など、卒業後の生活に向けて行っている。

他校実践：心とからだの単元の内容を見ると、高等学校では、保健体育の他にも、心は道徳的要素も含んでおり、進路はキャリア教育の一つなど、扱いが難しい題材だと感じた。

キャリア教育としては、1年時に職場見学、自分史の作成、SST、国際福祉、労働についてグループで調べ学習を行う。2年時には、地域の産業について知る、インターンシップ、人前でディベートする、自分を深く考え、自分の将来に繋げられるようなライフプランを考える。

（３）講師の方々からの講評

○中川氏

- ・丸いすを使用していたので、姿勢が気になった。背もたれのあるいすで行う方が良いのでは。
- ・イメージを膨らませるために、目で見てわかる支援がもう少しあると良いかもしれない。
- ・TTで行っているために、MTの説明や、生徒の意見を引き出しているときに、STが意見をボードに書いたり、残したりすると、自分の意見が受け入れられたことをより感じるができる。



○北村氏

- ・『命』をテーマとして取り上げたのは、良い題材だった。このテーマは、デリケートであり、配慮が必要なものではある。
- ・生徒にとって、様々な意見や生き方を知る良い機会になったと思う。
- ・意見を目に見える形で残すと、より生徒が自分の考えの判断材料にできたのではないかな。

講演の記録

1 基調講演

(1) 北海道特別支援教育センター教育課 知的障害教育室長 中川 正規 氏
演題：「キャリア教育の現状と課題」

『キャリア教育の考え方の基本について』

☆キャリア教育＝職業教育ではない。

→「働くこと」「生きること」「学ぶこと」の重なりを重視する。
個々人にとっての生きていく力を高めていく必要がある。

☆自分の役割を持つこと。

→係活動でも良い。自分の役割を理解させ、責任を持たせる。
できたことの積み重ねをする。誉められる喜びを経験させる。

☆“どうしよう”と考え、行動する力を身につけること。

→社会で生きていく中で、自己決定できるように指導する。
普段から、教師の促しがないと動けない子ではなく、自分で考えて行動できるように。



『留意点や実践のポイント』

☆教師が働いている姿、人と会話している姿を見せることが大事。

→今の子どもたちは、親が働いている姿を見る機会も少ない。
だからこそ大人（教師）が様々な姿勢を見せる必要がある。

☆指導内容を絞り、必ず達成できるように指導にあたる。

→TTを行う際、同じ場面では、必ず同じ指導を徹底する。

☆実際の生活に活かされる指導。

→“なぜ”それが必要なのか、何のためにやるかなど、理由がわかるように働きかけることが重要。

『知的障害の学習上の特性』

☆小学部・・・学ぶこと、勉強することが仕事

- 様々なことにチャレンジ
- やろうとする意欲を土台に基礎的能力の確立を

☆中学部・・・小学部段階をよく知って指導し、高等部への橋渡しになってもらう

- 今より少し難しいことにチャレンジ
- 基礎的能力の確立から社会参加の基礎的能力の確立へ

☆高等部・・・働くことを学び、実体験的に実習を多く取り入れる

- 夢の実現に向けてチャレンジ
- 働くことだけではなく「くらす」ことへ

◎未来に向かい よろこびをもって生きる子どもを育てる

◇よく考え学ぶ子ども ◇豊かな心をもつ子ども ◇命と体を大切にする子ども

『今後に向けて』

☆各学校の段階を踏まえた職業観・勤労観を育む

☆「進路先指導」からの脱却

☆生活の質の向上（「働く」以外の）

☆一人一人の目標の具体化と指導内容の重点化に向けた組織的な対応

2 パネルディスカッション（テーマ：発達障害・知的障害のある生徒の社会自立）

（１）北海道教育大学函館校准教授 北村 博幸 氏

【特別支援教育の新たな専門性】

- ・Assessment・・・アセスメントの力
- ・Strength oriented・・・強い部分を活用する力
- ・Team approach・・・チームで支援していく力

【二つの「個人差」】

- ・個人間差・・・人と人の違い
 - ・個人内差・・・個人が持つ発達のバランス、得手不得手のバランス
- 発達障害・知的障害教育では、個人内差に重きを置くことが大事。

自分の特性を活かし、社会で生きていくために、自分らしい生き方を実現していくことが大事



（２）有限会社小川食品代表取締役 小川 宏 氏（本校卒業生就労受け入れ）

【本校卒業生の様子】

- ・元気であいさつもしっかりできている。
- ・適応能力も高く、気遣いができる。

【最近の課題・悩み】

- ・職場に慣れてきたことで、緊張感が少しずつなくなっている。声小さくなったり、眠気に襲われたりしており、注意しなければならない場面が出てきている。また、養護学校卒業ということを知られるのを嫌がっている。

→能力的に良いものを持っているので、どのようにモチベーションを維持させていくかが課題



（３）NPO 法人せたな共同作業所ふれんどサービス管理責任者 今西 一憲 氏

【「ふれんど」の取り組みと学校の職業教育】

- ・社会自立に向けての一つのステップとして考えている。
- ・卒業生は、社会性があり、あいさつ、謝罪、お礼などが言える。
- ・以前は、職業教育がなされていなかったが、近年は、就労に向けた指導・教育、社会性の訓練が行われており、成果として現れている。
- ・長所が伸ばせれば、短所が引き上げられていく。

→本人の特性や長所を評価し、生かせる場所を探し、マッチングできると良い



以上の提言をもとにディスカッションに移る

進行役の北村氏より

◇キャリア教育や企業が求める生徒像などについて

- ・現在求められているのは、職業教育と言える。目的としてやるべきことは多様化しているため、難しい面があるが、子どものマッチングに翻弄されていないか振り返る必要がある。
- ・企業側が心配しているのは、１年目で３割が、３年以内に５割が離職してしまうこと。そのため、企業では、我慢強い方、打たれ強い方を求めている。
- ・発達障害の方が増えてきており、その方々に対する関わり方の難しさを感じている。

◇比較的障害の重たい方へのキャリア教育に関する観点や工夫について

- ・筋ジストロフィーの方は、できることが減っていく方が多い。できないことでも、できていたことを評価し、ワークキャリアよりもライフキャリアに重点を置いて良いと考える。

近隣の特別支援学校教諭より

- ・モチベーションについて。就職することが目標になっているのではないかと感じている。むしろそこがスタートであることを改めて意識しなければならない。
- ・「養護」という言葉について。本人も気づいていないことを、我々が気づいて伸ばしていくことは必要。自信を持って、胸を張って「養護学校」を卒業できるようにしていきたいと感じた。



近隣の高等学校教諭より

- ・インターンシップをした際、高等養護の生徒よりもできていないと評価された。学校の中にいれば、あいさつ、気配りもできるが、外に出れば、できないことが多い。学校単位で、指導方針を決めるのは難しい。手厚く指導できる方法を模索中。



近隣の中学校教諭より

- ・民間の仕事もらい、ラベル貼りの仕事をいただいたことがある。子どもたちが、自分が貼ったものが店に並ぶのを見て、喜びを感じることができた。地域や企業の方々と間接的でも繋がり、経験させることで働くことも意識させたい。

◇企業側から養護学校に求めることについて

- ・卒業したら終わりではなくて、その子にとっての自立が何なのか、それを描いたうえで就職を考えてもらいたい。
- ・自分のことをしっかりと理解し、長所を知り、自信を持てるような指導をしてほしい
- ・養護学校の生徒のことを誤解している人は多い。地元に残って生活していける場を広げるとともに、多くの人々にも理解してもらいたい。

◇まとめとして

- ・キャリア教育を行うにあたって、マトリックスを作ることが終わりではない。活用して、教育課程も柔軟に編成していくことが大事。
- ・モチベーションが続かないというのは、自尊感情は低く、自信がないためである。生徒の自尊感情を高め、自信を持たせられるように子どもの視点で気持ちを理解する。
- ・オーダーメイドの教材教具を用意して、より専門的な指導を行う。
- ・その後の人生を考えて教育していくもの。小中学校の段階からも捉えてほしい。

3 参加者概要

- | | | | |
|-----------|-----|---|-----|
| ・出席者数（外部） | 17名 | | |
| （本校職員） | 41名 | 計 | 58名 |

資料 2

今養版キャリアプランニング マトリックス

今養版キャリアプランニングマトリックス（試案・平成25年3月現在）

指導観点	観点の中身(解説)	指導の柱	1 学 年 段 階 (学びを通して気づく・知る)	2 学 年 段 階 (将来を意識し、自ら学ぶ・行動する)	3 学 年 段 階 (将来を見据え、自ら学ぶ・行動する)
心と体	・元気・体力・健康 ・食生活・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康 基本的生活習慣の確立	●健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができるよう指導する。	●自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	●卒業後の生活を見据え、自ら心と身体の健康が保てるよう、望ましい生活を組み立てる力を育てる。
			●生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。	●自立した生活を意識し、望ましい生活習慣を身につけることができるよう指導する。	
自己理解	・自分の長所や課題を見つける力 ・他者からの評価を受け入れる力	長所・課題の理解 他者からの評価の受容	○自分の長所や課題に気づくことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を受け入れるとともに、自己肯定感を持つことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を踏まえて、自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、自分らしきを持てるよう指導する。
			○他者から受けた評価に、耳を傾ける気持ちを育む。	○他者から受けた評価を受け入れる気持ちを育む。	○他者の気持ちや考えを理解・尊重し、自分のあり方・生き方にいかすことができる力を育てる。
職業	・責任感 ・向上心 ・食意心 ・実行力 ・職業理解・分析能力 ・働く意識 ・働く喜びを知る ・将来の目標を立てる力 ・将来の目標に向けて課題を解決する力	働く態度・能力 職業理解	●与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。	●手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組む事ができる力を育てる。	●自らの仕事の工程や課題を理解し、効率よくやりとげる力を育てる。
			●身の回りのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる。	●自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育てる。	●職業生活の中にやりがいや生きがいを見いだし、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる。
自己内省	・集中力 ・持久力 ・持続力 ・忍耐力 ・積極性 ・自主性 ・柔軟さ ・忍耐力 ・前向きである ・様々な物に興味を持つ ・謙虚な心 ・反省の心 ・感謝の心	物事に対する意欲 課題を解決しようとする心	○時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。 ○自主的・積極的に活動に取り組む大切さを知り、自ら努力を続けようとする気持ちを育む。	継続 →	○自らの課題解決に向け、素直な気持ちで物事に取り組む姿勢を育てる。 ○他者への感謝の心を持ち、それを表現する姿勢を育てる。
			○成功や失敗を繰り返しながら反省を積み重ね、他者の意見も受け入れながら、自分の気持ちや考えを整理する力を育てる。 ○自己決定・自己反省の過程を繰り返し、課題を解決する姿勢を育てる。	継続 →	
知識・技術	・公共交通機関の利用 ・金銭管理 ・職業に応じた知識・技能 ・読み書き計算 ・常識 ・マナー ・身だしなみ ・礼儀 ・ルール ・整理整頓	社会の仕組みなどの知識・技術 読み書き計算などの知識・技術	●集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。	●社会のルール、マナー、礼儀などを、状況に応じて使うことができる生徒を育てる。	●社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身につけ、社会の一員として生活できる力を育てる。
			●金銭管理や読み書き、計算などの生活に必要な基礎的知識が身につくよう指導する。	●身につけた知識を、日常生活で生かすことができる生徒を育てる。	●身につけた知識を応用し、社会の中で生きていく力を育てる。
コミュニケーション	・声の大きさ ・あいさつ・返事 ・報告・連絡・相談 ・言葉遣い ・話す・聞く ・協調性 ・人づきあい ・他者理解	自分から相手に発信	○場や状況に合わせた声の大きさで、あいさつ、返事・報告ができる力を育む。	○あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表現能力が高まるよう、日常的に指導する。	○その場にに応じたあいさつ、返事・報告をする力と、相手の人権を尊重するよう適切な言語能力を育てる。
		相手の話を聞いて判断	○相手の話を最後まで落ち着いて聞くことができる力を育む。	○必要な支援を他者に求めることができる力を育む。	○解決出来ない問題に対して、地域の中で適切な相談相手を選んで支援を求める力を育てる。
		相手を受け入れ、自らそこに参加する	○相手の考え・気持ちを受け入れる力や集団に合わせる力を育てる。	○相手の立場や考え方を理解して受け入れ、かかわることができる力を育てる。	○自分や他者のよい点を認め、思いやりを持って、よりよい人間関係を形成できる力を育む。
応用力	・洞察力 ・判断力 ・理解力 ・計画性 ・意思決定 ・柔軟性 ・効率性 ・情報収集 ・情報活用 ・取捨選択能力 ・自己統制力 ・危険回避 ・協力 ・余暇の充実	意思決定	●TPOに応じて何ができるか、何をすべきかの選択肢を与え、その意味を理解させ、選択していきける(判断する)力を育てる。	●TPO、自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をできる力を育む。	●卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活において、自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うことができる力を育む。
		将来設計	●目標を達成するためには工程があることを理解させ、与えられた計画や工程に取り組ませ、習慣化できるよう指導する。	●家庭生活・学校生活に必要な習慣の確立を目指し、職業生活に活かす力を育む。	●社会生活・職業生活等に必要な習慣の形成に向けた指導をするとともに、余暇の活用等を図り、前向きに自己の将来を設計する力を育む。
		情報活用	●学校・寄宿舎・地域社会の中には様々な活動があることを、体験を通じて理解できるよう指導する。	●自らの興味のある活動や職業等に関して、様々な情報を収集し、自ら活用できる力を育成する。	●希望する進路の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報収集・取捨選択し、自ら判断して活用できる力を育成する。
		人間関係	●集団活動に参加し、他者と協力することができる力を育む。	●集団において自分が果たす役割を理解し、周りと協力することができる力を育む。	●集団の一員として自ら役割を理解し、協力していくとともに、その役割を遂行していく力を育む。
感性	・想像力 ・表現力 ・感受性	感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	継続 →	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む。
		表現力	○真・善・美として感じたことを言葉・造形・音楽・行動などで表現できる力を育む。	○真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて言葉・造形・音楽・行動などで適切に表現できる力を育む。	○卒業後の豊かな生活を目指し、真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む。

学校教育目標の達成

豊かな心と健康な体力を
つくる生徒
自立心と判断力
豊かな心と健康な体力を
つくる生徒

このマトリックスは、平成24年度の校内研究において、研究推進委員会、学年部会、学科部会が検討を重ねた、最終的に結果まとまった完成版です。
これは各学年段階の指導方針として捉えていただき、これをもとに授業・指導・支援していくよう、また必要に応じて保護者等に説明していただくようお願いします。
しかし、日頃の教育実践等により、再度検討が必要になることも考えられます。そのため「試案」としています。検討の必要性を感じたら、研究推進委員会に連絡をお願いします。

あ と が き

『平成25年度 研究紀要 創』第16号をお届けいたします。

今年度も今金高等養護学校としての「キャリア教育」の在り方について、研究推進委員会および研修部を中心に全教職員が研究・研修に取り組んできました。本号には、今年度の「キャリア教育」に係る研究やその推進に向けて取り組んできた実践、報告等が収録されています。

本校においても、生徒の将来的な社会参加・自立を目指した「生きる力」の育成が教育活動おける最大の目標の一つであることは言うまでもありません。最近、外部関係者の皆さまから「卒業後の生徒像を見据えた教育を」「就労した後も活躍できる人間の育成を」「卒業後も意欲や緊張感を持続できる指導を」といったご意見をいただくことが多々あります。まさに、学校3カ年における「キャリア教育」の充実・発展こそが喫緊の課題であると捉えています。

今年度も学校全体として「キャリア教育」に係る様々な取り組みを行ってきましたが、大切なのは、このような取り組みを全教職員がそれぞれの糧としながら共有し、共通理解のもとで日常的に共通実践され、いかに生徒にとって教育効果のあるものとなるか、ということでもあります。これからの厳しい時代を生き抜くたくましい人間を育成するためにも、本校の実態に応じた、本校のキャリア教育の充実・発展に向けて、我々教職員は日々切磋琢磨していかなければなりません。現在の成果と課題が次の発展への大きなステップとなります。今後も、生徒一人一人が夢や希望を持ちながら充実した社会生活が送れるよう、研究・研修を推進していきたいと思えます。期待され、信頼される今金高等養護学校であるために、皆様に御一読賜り、御意見・御指導いただければ幸いです。

最後に、校内研究・研修の推進役となった研究推進委員会および研修部をはじめ、関係職員に深く感謝します。

平成26年3月

北海道今金高等養護学校教頭

佐 藤 公 人

共 同 研 究 者

学校長 佐々木 誉之
教 頭 佐藤 公人
事務長 五十嵐裕昭

<教務部>

1 学年 阿部 昌弘 、 泉谷 好子 、 及川 文雄 、 小原 雄一 、 小林 睦美
東海林栄徳 、 鈴木 貴史 、 高橋 詩織 、 橘 晴美 、 田中龍右ヱ門
外山 陽子 、 湊上 香奈 、 松原 与人 、 渡邊 雅都

2 学年 岩城 研太 、 加藤 大輔 、 鐘ヶ江真知 、 木田 絢子 、 木村 幸子
国府由香利 、 小松 裕樹 、 祐川建一郎 、 中川 優子 、 能代麻衣子
初山小枝子 、 林谷 和織 、 藤倉 雄一 、 矢倉 一

3 学年 上村 幸教 、 大口 香織 、 金子 亘喜 、 後藤 倫弘 、 小林 和幸
近藤 和也 、 佐々木真由美、 鈴木 美彩 、 高田のぞみ 、 出村 朱美
天満 理恵 、 土井 一矢 、 中島 朋之 、 早坂 麗子 、 吉本 香奈

<舎務部>

生内 希 、 伊藤 亮 、 猪瀬 雅法 、 上山 真人 、 川村 洋二
齊藤 直美 、 島野 五樹 、 清野 恵美 、 泉波 卓也 、 竹端 賢一
藤田 美華 、 松尾 晴奈 、 三澤麻衣子 、 和田 雅史

<行政>

遠藤 史憲 、 川崎 澄子 、 高野美智代 、 中村 和子 、 森谷 香
山崎 直樹

平成 2 5 年度 研究紀要

創

TSUKURU 第 1 6 号

発行者 北海道今金高等養護学校長

佐々木 誉之

発行日 平成 2 6 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

T E L (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

F A X (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2